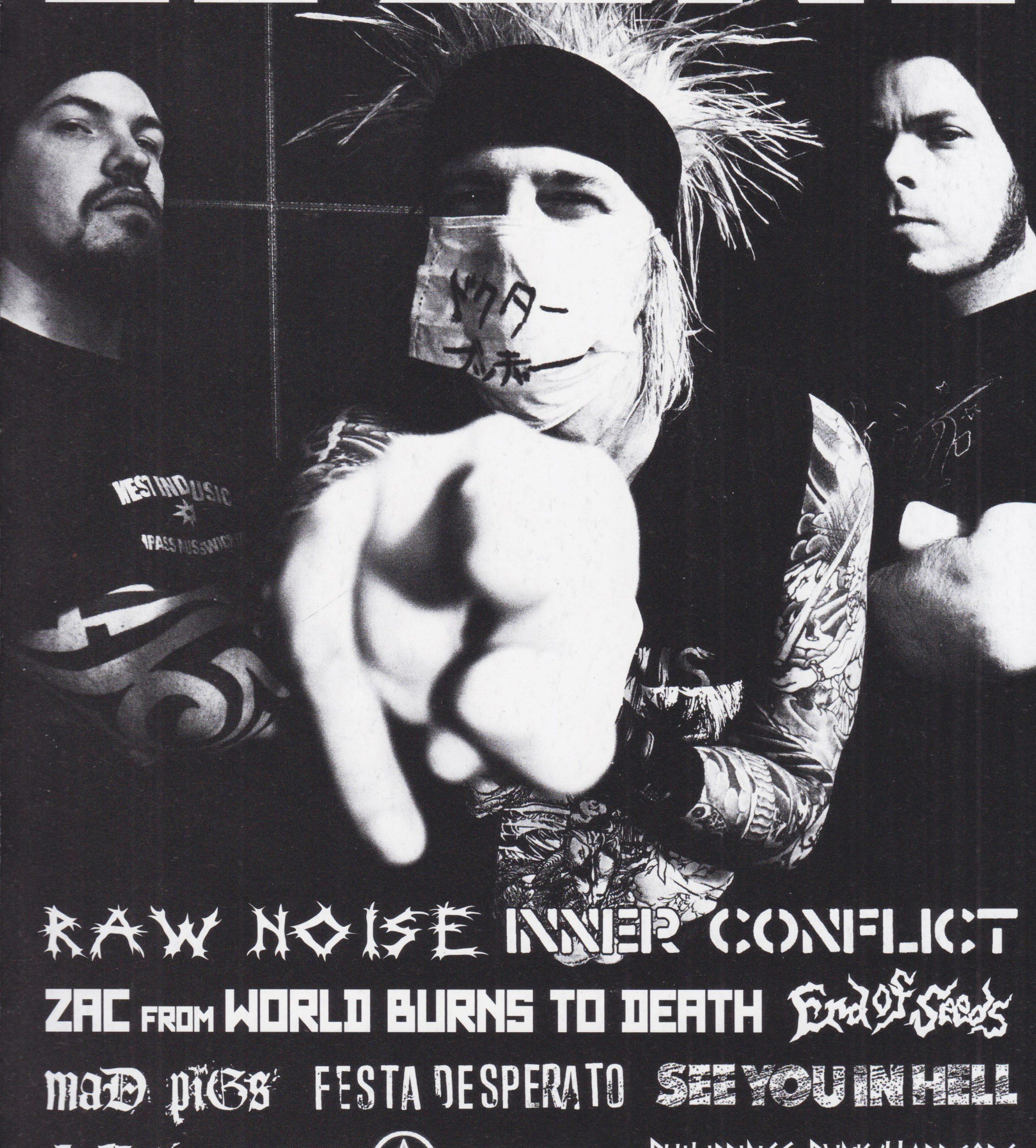
DISAPPEARANCE FROM REALITY VOL.6

EL ZINE



RAW NOISE INNER CONFLICT

ZAC FROM WORLD BURNS TO DEATH End of Seeds

maD piGs FESTA DESPERATO SEE YOU IN HELL

A.U.K. MENOS VALIDOS PHILIPPINES PUNK/HARDCORE 1980 - 2010

EL ZINE
DISAPPEARANCE FROM REALITY VOL.6

Contents vol.6

P03 RAW NOISE
P07 INNER CONFLICT
P11 ZAC FROM WORLD BURNS TO DEATH
P15 MENOSVALIDOS
P19 END OF SEEDS
P22 PHILIPPINES PUNK/HARDCORE 1980-2010
P27 A.U.K.
P31 PUNK/HARDCORE/UNDERGROUND IN LATVIA THE SECOND VOLUME
P35 SAKATA - RUIDE - NO - TOBBIKIRI - TAIDAN
P37 WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING - GERMANY
P39 GIVE THE ANARCHIST A CIGARETTE SPECIAL
P43 METALPUNK - YAROUZE!
P45 SATANIC OCCULT DEATH III
P46 THE THUNDERBOLT!
P47 LASHING SPEED DEMONS
P49 KISS THE DISC
P51 DISAPPEARANCE FROM REALITY - CZECH
P57 MARTINO FROM MAD PIGS
P60 PAAYA FROM FESTA DESPERATO
P63 FILIP FROM SEE YOU IN HELL
P66 EDITOR'S NOTES/BACK ISSUES


GBH



RAW NOISE

DEAN JONES INTERVIEW

昨年、来日を果たしたEXTREME NOISE TERROR。ステージ上に立つ、スパイキー・ヘアにズタボロのクラスト・パンツ姿のDeanを見て、"変わってない!!"と驚喜した人も多いのではないでしょうか。
そのDeanがEXTREME NOISE TERROR結成前からフロントに立ち続けているバンド、RAW NOISEの新譜("SCUM WILL RISE TO THE TOP"EPと"SYSTEM NEVER"CD/LP)がMCR COMPANYとメンバーの自主レーベル、LOW LIFEよりリリースされています。
音楽性の変化もあったEXTREME NOISE TERRORと比べると、RAW NOISEは初志貫徹、バンド名に偽りなしのピュアUKクラスト・コアで、"EXTREME NOISE TERRORよりもRAW NOISEの方が好き"という人も。
解散、というか自然消滅したのかと勝手に思っていたのですが、EXTREME NOISE TERRORの活性化と併せるかのように、こちらも前線復帰!前述の新譜も間違いのない、これぞ!という100% RAW NOISEな仕上がりです。
DeanにちょっぴりEXTREME NOISE TERRORのことも含め、インタヴューを敢行しました! PHOTO:JESSICA GRAFX

■このインタヴューはRAW NOISEをメインにしているのですが、EXTREME NOISE TERRORについても少し聞かせて下さい。まず初めに、2009年に行った日本ツアーの印象はいかがでしたか?僕は東京(WORLD BURNS TO DEATH、鉄アレイなどと共演)のショーを見ましたよ。

「ENTのジャパン・ツアーはもの凄ぇ良かったよ!SLANGのKOや他のメンバーもいいやつらだったしね!日本のパンク・バンドは熱い情熱を持ってプレイしているよな!既にもう、来年また日本に戻ってくる予定も持ち上がっているぜ」

■2009年とその前に来日した90年代とで、日本のハードコア・バンドの変化は感じましたか?2009年のツアーで特に強く印象に残ったバンドは?

「いいや、変わっていなかった。90年代にプレイしていたバンド(BASTARD、GAUZE、etc)の情熱と全く同じものを、今回のツアーで共演したバンド(特にSLANG)にも感じたぜ」

■Philが2005年にスイスからUKに戻った時に、なぜ彼に連絡をとったのですか?あの当時のあなたの心理状態も教えてもらえますか?ENTには彼は絶対に必要な存在だと考えたから?

「PhilのいないENTはENTではないと感じていたからね」

■ではRAW NOISEのインタヴューを始めましょう。RAW NOISEを2009年に再びやろうと決めた切っ掛けは?また、なぜ解散したのかも教えてもらえますか?

「実際は解散していないんだ。ENTに専念していただけなんだよな。俺はイプスウィッチ(イギリス・サフォーク州の州都)でパンク・ショップをやっていたんだが、Chino(Gu)とBarney(Dr)とはこの店を通じて友達になった。オリジナル・ギターのAliと一緒にまたRAW NOISEを再開したらどうか聞かれてね。再始動するその時が来たと思ったよ」

■Low Life Recordsを紹介してください。あなたとPhilがRAW NOISEのために運営しているんですか？RAW NOISEも(ENTもリリースしたフランスの)Osmose Productionsからリリースするつもりなのかと思っていましたが、実際にはLow LifeやMCR Companyからリリースしていますね。こういうやり方をとっているのはどうしてでしょうか?

「俺とPhilは俺たちからぼったくるレコード会社にうんざりしていたんだ。それで、EXTREME NOISE TERRORのアルバムをすぐにLow Lifeから出すつもりで、Low Lifeを作った。目下、Low Lifeの次回作に取りかかっているところなんだ。それが"DEATH DEALERS"の作品だよ。このバンドは、俺とPhilがヴォーカル、Charlie(ANTI CIMEX)がドラム、Rocky(RAW NOISEのオリジナル・メンバー)がベース、Chinoがギター、Barneyがパーカッション、Staff(ENT)が追加のベース、このメンバーでやっている。既にドラムとギターの録りは終えているぜ。俺たちの作品を出してくれているYumikes(MCR)、Mika(Farwell Records/ドイツ)、Agipunk(イタリア)は、みんな素晴らしい人間だよ。裏切ったりしない。将来、こういうハードコア・パンクのD.I.Yなやつらとだけ仕事をしていくつもりでいる」

■再始動後、最初にEP「Scum Will Rise To The Top」をリリースしたのは?EPはアルバムよりもロウなサウンドに感じましたが、EPとアルバムではレコーディングの方法を変えたのですか?

「いいや、どちらもロウに仕上げたかった。アルバムは少しばかりロウさが足りなかったかもしれないけどな。でもアグレッシヴさは増しているだろ(俺はアルバムのほうが好みだぜ。あれを誇りに思っているよ!)」

■とにかく、ニューEPとアルバムはブルータルで、アグレッシヴ、100%ハードコア・パンクな仕上がりです。どんな作品にしたいと思ってましたか?

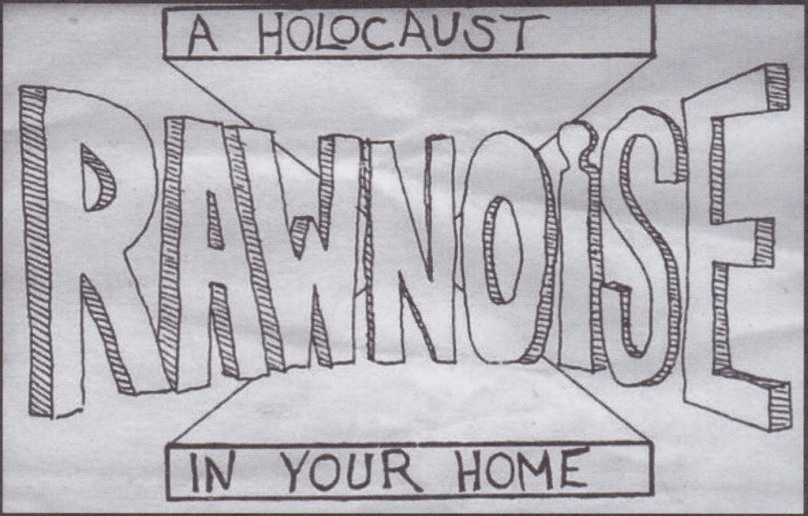
「まさに、ロウでアグレッシヴ、ポリティカルで闘志みなぎる音楽さ。凶暴なパンク・ロック・パーティーをやりたくなっちまうような音楽をさ!誰かの顔をぶん殴りたくなっちまう音楽だ!!!!」

■両作品ともアートワークをSean Fitzgeraldにお願いしたのはどうしてでしょう?"Front Cover Concept:Phil Vane"ともクレジットされていますね。あなたもいくつかアイデアを提案したのですか?アルバムの前面のアートワークには日本語の"漢字"を用いていますね。

「彼は素晴らしいアーティストだからね。そう、アートワークをどうするかは俺が判断を下しているよ。"カンジ"を建物の上に使ったのは、英語だとあまりにもあからさま過ぎるからさ。それに俺たちは日本のカルチャーが大好きだしね!」

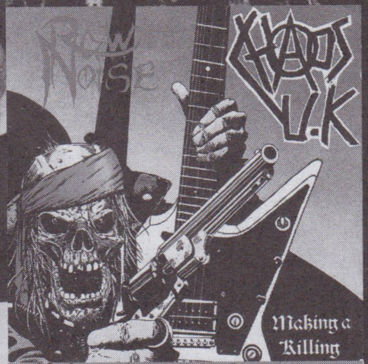
■RAW NOISEの曲作りで最も重要視しているのは?

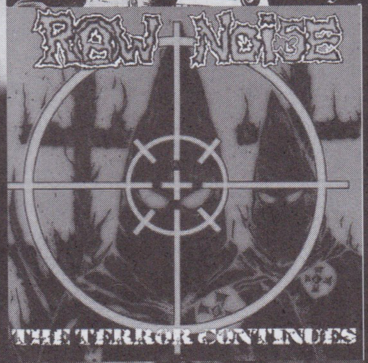
「典型的な超高速D-Beatハードコア・スカルの破壊的なパンクだぜ」

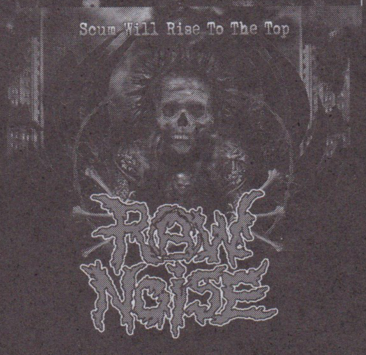





RAW NOISE


Raw Noise
Chaos U.K
Making a Killing


RAW NOISE
THE TERROR CONTINUES


Scum Will Rise To The Top
RAW NOISE




System Never
RAW NOISE

■アルバムのレコーディングはどうでしたか?順調にいきましたか?そのへんのことも教えてください。レコーディングも拘ったんじゃないかと思いますが。

「もの凄ぇ速さで、2、3日で録ったよ。できるだけブルータルなサウンドになるように、俺は自分のベストを尽くして、それぞれ(ギター、ドラム、ベース)の音を作ったぜ。ギターの音質がロウになるように、1950年代と60年代のスピーカー・キャップを使ってみたんだ」

■ちなみに、動物の権利に対するあなたの考えを聞かせてもらえますか?「Murder」(ENT)にしろ、「Watch Your Backs」(RAW NOISEの新曲)にしろ、よく歌ってますよね。

「ドラムのBarneyが動物の権利活動家で、「Watch Your Backs」の歌詞はやつが書いているよ。俺は今はもうベジタリアンではないが、動物実験は断固として反対だ。この曲はそういう内容だよ」

■「Impartiality Kills」はパレスチナ自治区ガザ地区について書いていますね。イスラエル/パレスチナ紛争に対して、どんな考えを持っていますか?

「「Impartiality Kills」はイギリスのBBC放送が、テレビでこの紛争の真の恐ろしさの恐怖を伝えることを("公明正大"であるべきなのに)拒否している事実について書いている。これらの国々に住む負傷した人々を援助しようと訴えるのも禁止しているんだ。それとは逆に、他の放送局は援助の必要性を訴える放送をしているのにな」

■「God, Guts & Guns」では銃問題について歌っていますね。この問題については?

「銃は特にUSAじゃ、N.R.A(全米ライフル協会)のせいもあって、今は難なく手に入る。俺がこの曲で言っているのは、争いは言葉やこぶしで解決するほうが良いってことだ」

■2009年以降、ショーはやっていますか?どんなバンドと共演していますか?

「もちろんさ、俺は生きている限り、ENTのショーをやり続けていくぜ!今年の後半にはRAW NOISEとDEATH DEALERSのほうもショーをやる予定があるよ」

■最近のUKハードコア・パンク・シーンはどう思ってますか?

「正直なところ、今はお粗末なほどひどいもんだよ。俺の好みから言うと、インチキなにせものパンク・バンドがあふれ返っているな」

■活動を続けているモチベーションは?RAW NOISEやENTの長い活動の歴史の中で、様々な経験をされてきたと思います。今なお歌っているのはどうしてでしょう?

「あらゆるバンドに親友と呼べる仲間がいるし、ツアーで味わうパーティーの雰囲気が好きなんだよ。自分の意見を声にし続け、ブルータルな音楽を演奏せずにはいられない血が俺の体に流れている。そういうアドレナリンも、出会ってきた素晴らしい人間たちも、俺が体験してきたクレイジーな全ての思い出も、その全てが大好きだ」

■ところで、あなたのパンク/ハードコア・ミュージックとの初めての出会いを教えてもらえますか。

「1976年のことになるが、友達がSEX PISTOLSの『Anarchy In The UK』を持って来たんだよ。その瞬間から俺の人生は変わった。9歳だったね。その後にDISCHARGEやDISORDERを聴くようになり、これがRAW NOISEの結成にインスパイアを与えてくれた。その後、もっと強烈なハードコア・パンクをやりたくなって、ENTの結成につながっていったんだよ」

■あなたにとってRAW NOISEとENTとは?

「最高の仲間であり、俺の人生さ!!」

■今後の予定や目標などを教えてください。

「RAW NOISE、ENT、DEATH DEALERSでブルータルなハードコアをやり続けていくぜ。ドラッグをやり、酒をしこたま飲み、強烈なセックスをし、ハッピーにやっていくことだな」

■日本の読者のみんなにメッセージをお願いします。どうもありがとうございました!

「パンクをやり続けてくれ、ハッピーでいてくれよ。来年会えるといいな」



争いは 言葉やこぶしで解決するほうが 良いってことだ



INNER CONFLICT

ドイツ西部の都市ケルンを拠点に1992年から活動を続けている女性ヴォーカル・メロディック・ハードコア・パンク・バンド、INNER CONFLICT。
たおやかなJennyの歌声と80年代後半にかけてからのUKメロディック・バンドも彷彿とさせる繊細な旋律、そして、止むを得ない理由があるのか敢えてなのか若干不明なドラムマシンを使用したスタイル(…止むを得なかったようです)。一番近似しているのはフランスのLA FRACTIONかもしれませんが、ドイツのバンドならではの、良い意味での垢抜けなさ、骨っぽさも魅力の一つ。
18年ものキャリアがありながら、恐らく本邦初となるINNER CONFLICTのインタヴュー。"TRAGEDYとALKALINE TRIOが好き"と、この2バンドの名を並列するセンスも、柔軟性に富んでいて最高です。今年に入り、遂に"人間"のドラマーも加入したようなので、今後のリリース含めその動向に注目していきましょう!

■INNER CONFLICTの結成について聞かせてください。スタートは1992年でしたよね?

Carlo「そうだね。ギターで３、４曲作っていたRönnéが自分のバンドを始めたんだよ。俺はそのバンドの一員になりたかった。ギターはRönnéと俺がいたから、ドラムを探したよ。1993年に初のショーをやる前に、Rönnéがベースに変わり、1995年からはドラムマシンを使うようになった。1996年にTobiが加入し、Jennyが1998年に加わった。2010年になってやっとドラムを見つけることができたよ。それがBalloだ」

■INNER CONFLICT(自己への葛藤)というバンド名にしたのは?誰が名づけたのですか?

Carlo「それはRönnéが答えないとな」

Rönné「特別な理由はないよ。俺は15歳だった。ただクールに感じたからかな。33歳になった今…今になっても良いバンド名だと思うよ…ふざけたのやマヌケなのや、邪悪を気取っているような名前にしなくてほっとしている」

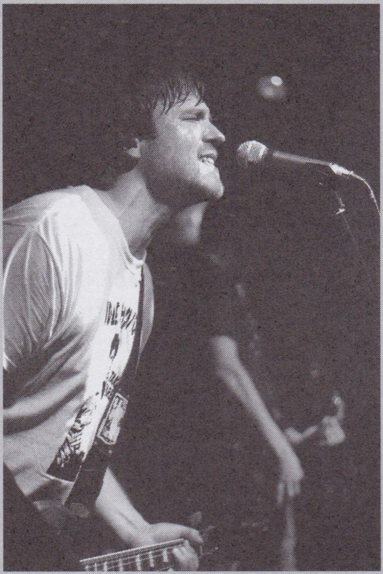
■INNER CONFLICTの前にはバンドはやっていましたか?メンバーそれぞれの音楽遍歴もお願いします。

Carlo「俺は"DISLIKE"とか"HEARSE"のような想像力あふれる名前のメタル・バンドをやっていたよ。RönnéはDISLIKEでベースを弾いていたけど、バンドに在籍していた間ずっと自分のベースを持っていなかったんだぜ」

Rönné「ハハハ。そうだった(笑)。仲間と小さな村で過ごした楽しい時代だったな。俺は2000年から2LHUDでも活動していたよ。パンク・レゲエ・メタル・ダブ・コアって感じのサウンドだ。このバンドは活動する時間がなくて、終局へとまっしぐらの状態さ。Carlo、Tobiと俺は一度、DUESENJAEGERのTorbenとTHE IDEL HANDSのKlickと一緒に素晴らしいリハをしたことがあった。そこでオールドスクール・ハードコア・ソングが生まれたんだ。この"バンド"はTAKE OVER KIDSっていうよ」

Jenny「学生の頃、1993年に兄弟と友達何人かとで初めて組んだのがVINAPAってバンドだったの。1999年に学校を卒業すると同時にバンドも解散してしまったわ。2005年から2009年まではPLANETAKISというエレクトロ・ポップ・バンドで活動していたのよ」

■最初に手本にしたバンドは何だったので



すか?80年代のUKHCバンド?80年代のUKといってもDISCHARGE、EXPLOITED、CONFLICT、DAN、LEATHERFACEなどのように様々なバンドがいますね。

Carlo「初めのうちは、メタルとドイツのパンクを混ぜ合わせたものをプレイしていたよ(演奏技術はボロボロだった)。最初に影響を受けたものは、間違いなくBIOHAZARDやSICK OF IT ALLのようなNYHCバンドだったと思う。言うまでもなく、こういうバンドの影響が音に現れていないのはとても幸せだね(笑)」

Rönné「当時はあれもこれもと、とにかくいろいろなバンドを聴いていたよ(今は何でも聴いているわけじゃないんだ)。でもあの頃好きだったのは、SLAYERや他のスラッシュ/デスメタル・バンドだったんじゃなかったかな。あとはCarloが言っているようにドイツのパンク・バンド(初期TOXOPLASMA、SLIME、BUTTOCKS)、それにCONFLICTなどのUKパンク・バンドだね。振り返ってみると、DEAD KENNEDYSもお気に入りのひとつだったな。君が俺たちのファースト・デモ・テープを聴いたことがあれば…これは薦めもしないし、聴くチャンスも与えないぜ(笑)…最初にいたドラマーの影響や、俺たちには楽器を演奏する技術が全くなかったなんてことを、このテープから聴き取れるはずだよ」



■それで、ドラムマシンを用いているのはどうしてですか?自分たちにしっくりくるから使っているのですか?

Carlo「1995年の頃はドラムがいなかったんだよ。新しいドラムを見つけることができなかった。ドラムマシンを使うか、解散するかのどちらかを選択するしかなかったんだ。それでDr.Rhythm(コンパクトなリズムマシンの草分け)を使うことにした。どうすればいいいか、もうそれ以上は考えつかなかったよ。そういうわけさ。少なくとも現在まではね!」

■INNER CONFLICTにJennyが加入したのは?彼女の声はとても魅力的ですね。彼女のお気に入りのヴォーカリストも教えてもらえますか。

Carlo「Jennyが加入したのは1998年だったね。それ以来、俺の母親は、俺たちの曲を好きになってくれたよ(笑)。彼女が歌っているのを聴いたとたんに、INNER CONFLICTの曲だってわかるだろ。それが彼女の加入の理由さ」

Rönné「彼女が加入したのには、特別な物語はないんだよね。Jennyは以前にもバンドをやっていたし、練習やギグをやるのに出入りしていた地元のJZって所で、時々顔を合わせていたしね。彼女はパンク・バンドで歌いたがっていた。俺たちもヴォーカルをやってくれる新しいメンバーを捜していたところだったから、試してみたんだ。前よりも良いバンドにしようと思ってさ」

Jenny「好きなシンガーはMike Patton。女性ヴォーカリストにも好きな人はたくさんいるわ。具体的な名前をあげると、LA FRACTIONのMagalieと、Camille(※恐らくフランスの歌手のことだと思われる)ね」

■JUGGLING JUGULARSとスプリットEPをリリースしたのは?彼らも素晴らしい女性ヴォーカルのハードコア・バンドだと思いますが。

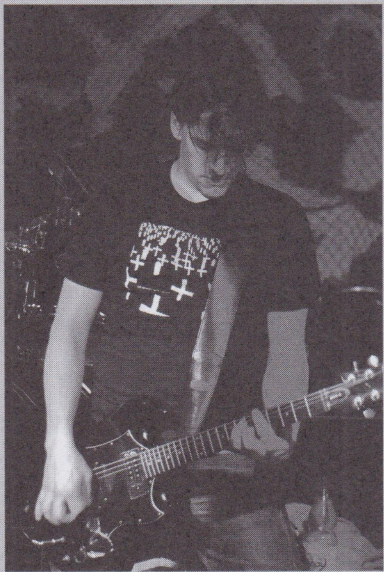
Carlo「彼らも、俺たちがリリースしているレーベルのTWISTED CHORDSから作品を出しているし、一緒にツアーをやったこともあるんだ。よく気も合うから、スプリット7"をリリースすることにしたよ。あの作品はとても気に入っている。そう、君の言っていることは正しいね。彼らは素晴らしいよ。人間的にもいいやつらだしね。長いこと一緒にプレイし、友達になった。Jantsa(JUGGLING JUGULARSの元ベース・ヴォーカル)が亡くなったと聞いた時は、本当に悲しかった」



Rönné「JUGGLING JUGULARSに関して面白いのは、彼らも男性バンドとして始まったってところだな。まさに俺たちと同じ。でも最初にJUGGLING JUGULARSと知り合った時には、すでにArjaが歌っていたけどね。ツアー初日の夜に、JennyとArjaはすぐにおしゃべりを始めて、両バンドの間にあった氷の壁は砕け散ってしまったな。最後にはABBAの曲を一緒に歌っていたしね。でもCarloも言っているように、彼らはとてもクールなやつらだ。彼らの曲も歌詞も大好きだよ。残念なことにフィンランドはドイツのケルンからは何キロも離れているから、なかなか頻繁には一緒にプレイもできないし、会えないんだよね」

■女性ヴォーカルのメロディアスなハードコア・バンドはどうですか?例えば、LA FRACTION、POST REGIMENT、PETROGRADなど色々いますね。こういうバンドは好きですか?

Carlo「俺はヴォーカリストがひどい音楽は



好きじゃないんだよな。声を張り上げて歌うシンガーは好きだけど、敵意に満ちて聴こえるように歌うシンガーはいただけない(俺の言っている意味がわかるかい)。美しいメロディーはとても好きだな。LA FRACTIONは大好きだよ。BAMBIXのWickの声も好きだね。でも男性ヴォーカル、例えばSTRIKE ANYWHEREやHOT WATER MUSICなどもいいね」

Rönné「サウンドが素晴らしければ、ヴォーカルの性別は気にしないよ。LA FRACTIONの声はもちろんだけど、TRAGEDYの声も好きなんだよね。ALKALINE TRIOの声と同じくらいにSPITBOYの声も好きだしね。でも大きく言って俺の音楽の好みは多岐に渡っている。俺にとって重要な音楽は…常にそうだけど…パンクとハードコアだね。でもヒップホップやジャングル、テクノ、ポップ、フォーク、インストゥルメンタル、いろいろと好きだよ」

■英語とドイツ語で歌っていますね。2つの言語を使うのはどうしてでしょうか?

Carlo「わからないな。そうなってる。今はドイツ語だけで歌うようになっているが、これは曲の言葉や意味と共鳴して演奏するのが好きだからなんだ。でもまた英語を使うようになるかもしれないよ」

Rönné「そう、まさに。決まったルールはないよ。今の時期はみんながドイツ語で歌詞を書いていたからそうなってる、ってだけだしね。今の時点で話せば、英語の細かい知識が乏しいから、個人的には英語で歌詞を書こうとは考えられない。俺の英語力はひどくて、会話ぐらいならまあどうにかなるし、"fuck this/fuck that"みたいな歌詞(誤解しないでほしい。俺はそういう歌詞も大好きだよ!)にはぴったりだが、今俺たちが書いている曲のタイプには合わないんだ。最初に何で英語で歌詞を書いたのか、その理由がわからないんだよね」

■歌詞を書くうえで最も重要視しているのは?

Carlo「たぶんメンバーそれぞれ違うだろうね。俺の場合は感情を表現する歌詞が重要だな。曲を歌ったり演奏している間に、感情を感じてもらえるものが。一緒に歌ってもらえる曲がいい」

Rönné「難しい質問だね。ある状況に対しての、あるいはその状況下の気持ちや印象を記すことかな。一番大事なのは感情を表現することだな。曲を聴いてくれる人たちとの関係は、歌詞を書いている時点では重要じゃない。自分の書きたいことを書きたいよ。でも曲を好きになってくれたら、間違いなく嬉しいね。でもなかなかうまくはいかないんだけどさ。俺は素晴らしい曲と歌詞とが作用し合っているものが好きだな」

■曲はどんなふうに作るのですか?曲のアイデアをみんなが持ってくるのですか?あなた方の曲は本当にメロディーが素晴らしいですね。

Carlo「俺が曲を書く時は、大抵は歌詞があって、歌/コーラス/歌/コーラスのような感じでアレンジしていく。時にはギターのパートが決まっていて、残りの部分をつけていくこともあるな。その時によって作り方は違うよ。1回のリハーサルで曲ができることもあれば、1年以上も熟成させることもあるしね。最新の曲はそれぞれがアイデアを持ち寄って完成させたよ」

Rönné「こんな感じかな。3つのパートと曲の歌詞カードがあって、それが例えば60秒のハードコア・スマッシャーになる。結局、多かれ少なかれメンバー全員のミクスチャーだね」

■『Schiffbruch Im Rahmenprogramm』(目下の最新アルバム。2007年リリース)の表面のアートワークはどういう意味を込めているのですか?紙の船?

Carlo「どうやって英語で説明したらいいのかわからない。タイトルを訳すとするなら、"フレームワーク・プログラムの中の難破"になるんだけど。俺たちは紙の船の写真が好きだった。木片は難破船の一部。この説明じゃ、たぶん"光るもの必ずしも金ではない"という意味だと思われちゃうかもしれないけど、これは的を得てないな」

Rönné「うーん…そうだな。俺も的を得た説明ができないな。フレームワーク・プログラムって単語は、ジャケのアートワークの説明に結びつけるとややこしくなる。どうにかやってみるよ。難破することで、自分ではない何かのふりをすることであり、決してそういう結末にはならないだろうと思っていた状況に陥ること。なぜなら、人は自分を特別なものであると思っていたり、あるいはマスター・プランを持っていると思っていたりするから。言葉にするのは難しいな。英語で説明するのは難しいから、それがドイツ語で歌詞を書く理由だね(笑)。結局はジャケはアートかな。レコードが表現している歌詞と雰囲気とが一致していて、良い曲が詰まっている作品に見えるような、良いジャケにするためかな」

■現在のドイツのハードコア・シーンをどう思いますか?グレートなバンドはたくさんいますか?最近のお気に入りバンドも教えてください。

Carlo「ドイツには本物の良いバンドがたくさんいると思うよ。俺が好きなのはANTITAINMENT、TURBOSTAAT、TACKLEBERRY、CAPTAIN PLANETなどだね」

Rönné「ここのハードコア・シーンは一つではないんだ。本当に細かく分かれている。実際のシーン以上に、よく一緒に活動したり、共演したりするバンドがいる。そういうのは俺には大事だね。でもドイツはインフラが整い、とても充実している。言い換えれば、ドイツ全土にはプレイするにはクールな場所があるね。まあ、特に俺たちの住んでいるケルンのような都市では練習場所を見つけるのは簡単なことじゃないんだけど。値段も高いからね。でも、ドイツは一般的に言って、DIYパンク/ハードコア・バンドの置かれている状況は良いよ。お気に入りのバンドって、実際に活動中のバンドだよね?Carloがいくつかあげていたけど、忘れているものもあるみたいだからつけ加えておくよ。TREND、BURIAL、BOMBENALARM、KOMMANDO SONNE-NMILCH、KOBAYASHI、他にもたくさん。俺も今、ど忘れしているかも(笑)」

■あなた方にとってINNER CONFLICTとは?活動を続けているモチベーションとなっているものは何でしょうか?

Carlo「INNER CONFLICTは俺の人生の一部であり、自分を表現する方法かな。一緒に音楽を作り活動する。いろいろな人間を知ることを学び、新しい音楽と出会う。俺を前に進ませ続けるモチベーションは一つだけではないよ。何か欠けていたら、続けていないだろうな」

Rönné「Carloにつけ加えるなら、俺たちは純粋に親友同士ってことかな」

■ドイツの政治についてはどう考えていますか?あなた方が最も懸念しているドイツの社会問題は何でしょうか?

Carlo「ふぅ。厳しい質問だ。一つだけ選ぶね。俺が考えるドイツ政治の一番の問題は、政治家が誰になろうと違いを感じることができないことだな。何度も何度も同じような愚かな政治が繰り返される。ぬけぬけと戯言を言ってと思うかもしれないが、俺は政党が変わったとしても、政治が変わるとは信じていない。エネルギー資源で金を得ることが、エネルギーを作り出すための新しい方法を見つけること以上に重要に考えられているくらいだしな」

Rönné「少なくとも大抵の主要国では同じだろうけど、貧富の格差だろう。現在、裕福な者と貧しい者との差が大きくなっているだけじゃなくて、働いても働いても厳しくなるだけって状況があるように思うんだ。たぶん20年前は、今よりも社会階級の中での行き来は簡単だった。貧しくても裕福になれる可能性があったように思う。今はいくつかの理由があって、それが難しくなっているな。教育のシステム、労働者の仕事の分野がコンスタントに変化したり(農業や"普通の"産業の減少)、また冷戦が終わり、国と企業との間で、世界規模の資本主義競争が激しくなってきたりと。あとは、俺の嫌いなある種のナショナリズムが、特にドイツの社会には一部あることだな。歴史を反省していない。俺はとことんうんざりしているよ」

■なるほど。ちなみにスクワットではプレイしていますか?ドイツのスクワット・カルチャーをどう思っていますか?

INNER CONFLICT=
俺の人生の一部であり、自分を表現する方法
いろいろな人間を知ることを学び、新しい音楽と出会う

Carlo「時々スクワットでも演奏しているよ。スクワットのほとんどはベルリンにある。俺の知る限り、新しいスクワットは多くはない。いくつかの街にスクワットがあり、AZ（自治されたインディペンデント・センター）も存在しているが、多くの場所が閉鎖されている」

Rönné「そうだね。ドイツのほとんどのスクワット・カルチャーは、俺たちがバンドで関わる以前に設立された。（特に初期）80年代（この時代はドイツの独立した極左翼のグループの活動が強固だった）は盛んで、ベルリンの壁が崩壊した後の90年代初期になると、セカンド・ウェイヴが訪れ、またスクワット・カルチャーは活発になったよ。警官や政府からの圧力が激しくなり始めた後は、それ以上、多くのプロジェクトが守られることがなくなり、スクワットの周りのシーンも小さくなっていった。それらのいくつかは合法的なプロジェクトへと姿を変え、建物に住む人たちは集合体として建物を購入した。中には不法に留まっていた人もいて、いまだに残っているよ。残りは立ち退きさせられた」

■日本について、バンドや文化は何か知っていますか？

Carlo「正直言うと、日本のハードコア・シーンはよく知らない。俺にはスクリーモの印象が強いが、それが正しいのかどうかもわからないんだよ。SISTA SEKUNDENとスプリット7"を出したI SCREAM 7SHOWERSは知っている。それとENVY。でもそれくらいかな」

Rönné「日本の女性ハードコア・バンドを収録した 4 wayスプリット・ダブルLPを持っているよ。WORMCAST、GAIA、PISS、GUSHの4バンドが収録されていたはず。それにS.O.BとG.I.S.M.も知っている。もちろん、ドイツのバンドで日本で一番有名なのはBURIALだよね。質問はパンク・カルチャーって意味ではないよね？俺の知識はいくつか日本の食べ物を知っているくらいの基本的なものに過ぎないぜ。王様がいるんだろ？でも民主主義で、高い工業基準、多くの伝統を持つ長い歴史。あまり詳しくはないんだ。20世紀初期の日本と中国との戦いなど、いくつかを除いてはね。もちろん、第二次世界大戦の間、ナチ・ドイツと同盟を結んでいたことも。あ！悪い面ばかり並べちゃったね（笑）。他にかい？火山とひっきりなしに起きる地震の危険。俺が知っているのはざっとこんなところかな」

■今後の予定や目標を教えてください。

Carlo「バンドの今後の予定は新しい作品を作り、新しいドラムのBalloと一緒にライヴをやることだね」

Rönné「作品を作り続けて、ギグをやり、家族（友達でもあるこのバンドのメンバー）とプレイすることだよ」

■日本の読者の皆さんにメッセージをお願いします。どうもありがとう！

Carlo「インタヴューをしてくれてありがとう。日本に俺たちの音楽に興味を持ってくれる人間がいるなんて、俺には全く信じられないよ。少なくとも、これはグローバリゼーションの良い面だね。音楽は世界中に広がる。じゃあね!!!」

Rönné「インタヴューに感謝しているよ。正しい側にいるみんなへ。"フォースが君とともにありますように。自分自身を貫け"。その他のやつらへ。"ファック・ユー、俺たちを放っておいてくれ"」





前みたいにパーティーでもそんなに酒もガバガバ飲んでベロベロにもならなかったからね、今回は(笑)」

■じゃあ最初の質問。生まれは当然テキサス?ヒューストンだったっけ?

「生まれも育ちもテキサスさ。1979年にHoustonで生まれて以来30年間テキサスに住み続けているね」

■ヒューストンはどんな所?いい所?地元は好き?

「Houstonは暗くて危険な町だよ。犯罪率も滅茶苦茶高いし、未だドラッグとギャング文化が蔓延しているしね。俺も正直、今迄さんざん酒飲んで馬鹿な事やってたけど、殺されなくて今迄生きて来れた事は本当にラッキーだと思ったね。いい町だとは正直思わないけど、自分の生まれた土地だから思い入れは多少あるよ」

■家族は向こうに住んでるの?兄弟とかは?

「俺には兄弟はいないんだ。でも親父とは何時も一緒にいたよ。仲がいいんだ。母親はちょっと保守的すぎる所があってね、俺の選んだ道も未だに認めてないから。まあ時が解決してくれると思うけど。父親と母親は俺が2歳の時に離婚したんだけどその後も数年間は二人の関係から板挟みになってたね」

■10代の頃はどんな子供で、どんな音楽を聴いてたのか教えてくれるかな?

「1987年、俺が8歳の時に初めてスケートボードを手に入れて以来、16歳くらい迄、ずっと俺はスケートボードに乗ってたよ。

ZACHARY TEW

WORLD BURNS TO DEATH - KEGCHARGE YOU PEOPLE - SMASH DETOX - INTERVIEW

テキサスの暴れ馬とはまさにコイツの為にある言葉だろうか。典型的なテキサンであり、またWORLD BURNS TO DEATHのギタリストでもある。今回のインタヴューはギター・クラッシャーの異名をも持つZACこと、ZACHARY TEWである。CHAOS IN TEJASのイベントの後、SLANGのツアーの後半戦に参戦する為に器材等の準備をしている忙しい中、時間を割いて貰った。いくつかプライベートな部分も含めた過去から現在、また未来に対する彼の展望を聞いた。

INTERVIEWED:Souichi(UNDER THE SURFACE/FORWARD/SMASH DETOX)

■最初に、今回のCHAOS IN TEJASではBASTARDや俺達のケアを色々してくれてどうもありがとね。

「今年のCHAOS IN TEJASはとても楽しかったよ。年を追うごとに出演するメンツもすごくなって来ているしね。10何年以上前からBASTARDは知ってたけど、まさか彼等がここでショーをするとは全く想像してなかったよ。俺はね、今年のCHAOSは皆がここにいる間は楽しんでもらえる様に頑張ったつもりだし、ちゃんと俺の仕事はしたつもりだよ。

で、10歳の時にDRIとかSUICIDAL TENDENCIESを友達から教えてもらったのがパンクに目覚めたきっかけだね。ギターを始めたのが12歳の時で13歳位にはBLACK FLAG, SUBHUMANSとか聴きながらスケートボードに没頭してた。で、友達にJasonて

のがいてそいつから日本のハードコアの事を教えて貰ったんだ。90年代半ばくらいかな。俺が14歳くらいの時だから」

■いつからバンド始めたの？音はパンク？ハードコア？ロック？

「14歳でバンドを始めたんだけど激しい音楽を一緒にやってくれる奴等が周りにはあまり居なかったから色々な奴等ともやったんだけどね。初期のBAD RELIGIONみたいなのなんかもやってたし。でも地元には俺がやりたい様な音を一緒にやってくれる奴は皆無だったから、18歳の時から２年間ギターを弾く事を止めてたんだ。でもまたバンドをやる為に21歳の時にAustinに引っ越したんだ」

■因みに最初に買ったギターはどんなの？あと一番好きだと思うギターは？

「俺が最初に買ったギターは何だったかあまり覚えてないけど赤のWashburnだったね。すごくいい低音も出てて手に入れた時はすごく嬉しかったのを思い出すよ。数年後にはいくつかのIbanezとEpiphoneのレスポールとか持ってたよ。でAustinに引っ越した時にJackが俺にGibsonのA1978 alpine white SGを買ってくれたんだ。因みに俺が一番好きなギターは、Gibsonのレスポールスタンダードだよ」

■あっ、あとKEGCHARGEとHARDCORE TEXAS Jamesについて少し話を聞かせて貰えるかな？

「知ってると思うけどKEGCHARGEは冗談で始めたバンドなんだ。たまたまJon(WB2D)とJames(SPAZM 151)と俺は何にもやる事が無くて暇してて、毎日飲んだくれてたんだけど、何かやらないとなとか思い始めて、まあDISCHARGEみたいなのをパーティーでやろうという事になったんだけど、実際やったら予想以上にキッズ達に受けが良かったもんで最終的にレコーディングする所までいったんだよ。その時のレコーディングではJamesと俺はコカインでバッキンバッキンになって楽器なんか持てない状態でレコーディングしたからね。作品にもそれがよく出てると思うよ(笑)。HARDCORE TEXAS Jamesは本物だよ。彼の事を知りたければ彼のもう一つのバンドであるSPAZM 151を聴くといいよ。素晴らしいアルバムもあるから。Jamesと会った事のある奴は誰もが口を揃えて彼の事が好きだと言うよ。俺にJamesの事を話させるとインタヴューが５回できるくらい沢山あって話す事は尽きないよ」

■自分にとってのテキサス・スタイルとは？

「俺にとってのTEXAS STYLEとは何事も心を込めて生きて行くという事だと思うね。全てに於いて信念を持って発言し、行動する事だと思う。それを実践している人はなかなか数少ないけど。特別な血統だよ」

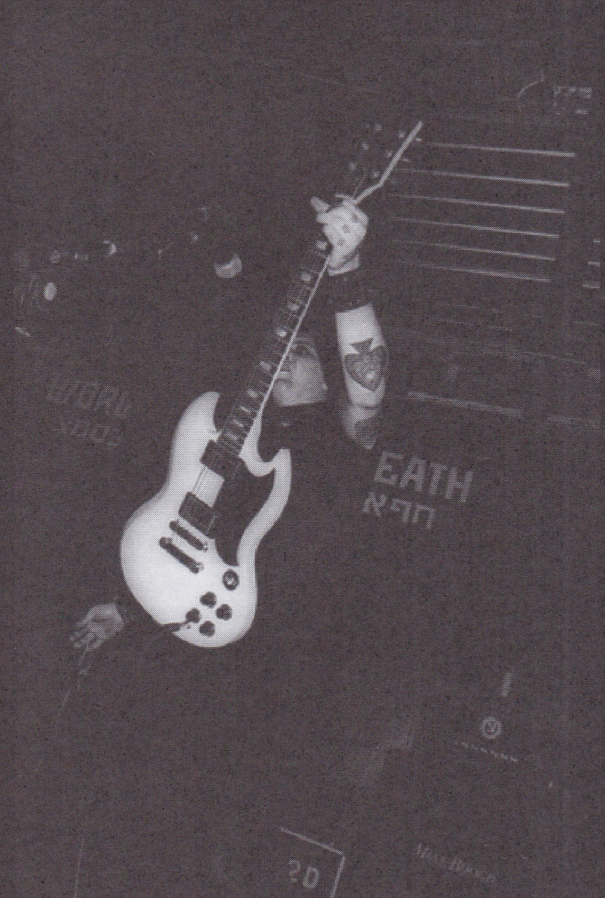
■話はまた変わるけど、俺は君がGUITAR CRUSHERなのはよく知ってるけど、今迄何本のギターを壊したのかな？

「今はほとんど壊してない(笑)。今迄は沢山ギター壊したけどね。SGは４回、レスポールは５回ネックを修理したね。あとは飛行機で荷物に預けた時にも２、３回あったな。2008年のEUROPE TOURでの、最初のスウェーデンのショーでは3曲目にギターがクラッシュしてしまってさ、ネックが折れてブリッジがすとんと落っこちた時はまいったね(笑)」

■君はWB２Dのオリジナル・メンバー？Jack Controlと初めて会ったのはいつ？彼とバンドを始めたきっかけは？

「オリジナル・メンバーだよ。一番最初の練習から参加してる。Jackと最初の出会いは2000年位だったかな。沢山の地元の友達がJackに会う為によくAustinに行ってたよ。10年前の話だ。もちろん彼がレーベルも運営しててリリースもしているという事は会う前から知ってた。笑える話だけど俺はHARDCORE TEXAS JamesとJackに一度ぶっ飛ばされた事があるよ(笑)。Jackは俺の事をJamesの連れってのは知ってた筈なんだけどね。水曜日にビールがピッチャーで１ドルという店がAustinにあったんだ。







で、とある水曜日の夜にその店で彼等と飲んでたんだ。俺はかなり酔っぱらっててつぶれる一歩手前でさ、周り見渡したらテーブルにはDallasのオールド・パンクスが集ってたんだ。JackとJamesを入れると１０人以上は居たかな。俺はその時サングラスをかけてトレンチコート着てて一人で尖っててさ(笑)。俺はHoustonから来たから、Dallasの奴らにDallasはHoustonほどタフじゃないとか言ってさ、調子に乗ってからんでいたんだ。そうしたらJamesが俺を別の場所に連れて行って俺に落ち着けと言ったんだけど、だれも俺を殴ろうとしなかったんで、更に調子に乗ってテーブルに戻るやいなや俺は彼のビールを吹っ飛ばして顔に唾を吐いていたらしいんだ。そうしたらJamesがテーブルをひっくり返して、俺はそれでガッツリ殴られ、俺の歯が一本欠けたんだよ。Jack Controlは俺の後頭部を思いっきりグラスで殴るはでね。あとから聞くと俺はその後、頭から血を噴き出し床に倒れてて、警察が来る迄そのままだったらしいね。その後、留置所で目が覚めたよ(笑)。その次にJackに会った時に色々話をしたんだ。好きなバンドの事とかね。あとちょっと俺がJamesの連れだったもんで悪かったなという気持ちがあったのかもしれない。彼は俺がギターを弾いていた事を知ってたんで、彼から新しいバンドを組む予定があるという事を聞いたんだ。それはやらなきゃと思ったね。それがWORLD BURNS TO DEATHの始まりだった」

■JackがBARで刺されたあの事件の時は君は一緒にいたの？実際どんな状況だった？どんな奴が？

「俺の当時の彼女の家族がTHE PARLORっていう人気のBARを経営してて、ライヴも出来るPUNK ROCK BARだったんだ。とある晩にライヴがあったからそこで飲んでたんだけど、なんか変なパンクの奴等が数人で酔っぱらって騒いでいるのが目につき始めたんだ。そのうちに人に絡んだり窓を蹴り始めたり、そいつ等のうちのBingoっていう奴がついにショーウィンドウを蹴り破った。その後奴等が店の外に出て行った後に俺の彼女がそいつを追いかけ始めたんだ。俺は彼女が心配だったから、彼女の身を案じて後を追いかけた。それで俺がそいつの頭をボトルで殴ってたら他の数人が俺を羽交い締めにしてきて身動きが取れなくなったんだけど、その後すぐにJackが俺と彼女を助ける為に追って来てくれてたんだ。ちょうどその時、俺がボトルで殴った奴が起き上がって来て、あろうことかJackの背後からナイフで襲いかかって来て彼のみぞおちの辺りをナイフで刺したんだ。心臓迄あと数センチだった。Jackには背後から襲って来てる事を予測出来なかったんだと思う。血が噴き出し、彼はシャツを持ち上げて、「もう行かなければならない」なんてことを言ってたんだ。冗談抜きで。血がホースでぶちまけた様になっていてそのくらい重傷だった。血のプールの中でJackが倒れていた時、軍隊でmedic(衛生兵)をやってたというパンクスがやってきて救急車が来る間、彼に適切な応急処置を行った。その男がJackの命を救ったんだ。その後の何回もの手術で、その度命を落としそうになっていた彼だったけど沢山の友人からの支援もあり、医者達は最終的に彼の命を救う事が出来たんだ。この時Jackが死んでたら俺の人生は確実に変わっていただろうね。Bingoはジャックを刺した数分後に警察に取り押さえられたらしい。沢山の友達がGunに弾詰めてその夜は奴を探していたんだけど、その時奴は既に警察に逮捕されてたんだな」

■Jackの歌詞の世界観は戦争、紛争、内乱、虐殺等に関するものが主だけど、君もそういうのは詳しいの？

「そういう事に関しては普通に知ってはいるけど、殆どはJackの視点によるものだからね。俺は彼程、それらの歴史とか出来事とかは詳しくないね」

■ところで最近は調子はいい？

「そうだね、最近の生活はよく変化に富んでいるね、同じ事を何回もするのは性に合わないんだ。飽きっぽい性格だし。半年前は毎日酒ばかり飲んでたけど、その後の３ヶ月は全然飲まなかったり。１月の間ギターを弾かなかったり、２ヶ月間は毎日ギターを弾いていたりね。俺にも生活は予測不可能だね」

■くだらない質問だけど、なんでWB2Dのメンバーはステージでみな目の周りを黒く塗ってるのかな？

「真相は闇の中だね」

■君の新しいバンドの一つであるYOU PEOPLEについて話を聞かせてもらえるかな？他に誰とやっているんだっけ？

「今はもう、YOU PEOPLEという名前は止めようかと思ってるけど、俺はこのバンドでは沢山曲を書いてるよ。今レコーディングの最中なんだけどすでに$1200程使っててさ。まだ半分くらいかな。あともう一人のギターとちょっと揉めが入ってたんだけどさ、俺がほとんどの曲を作ってるので奴も別のバンドを作りたがってて結局、最初に入ったヴォーカルとそのギターは辞めちゃったね。今現在のメンバーはギターが俺でベースがTA、ドラムがTommy Gonzalez(KRUMBUMS)。彼とは15年前にHoustonで一緒にやってたね。新しいヴォーカルには元FINAL CONFLICTのRon Martinezが決まりそ



うだ。それで今新しいバンド名を考えているよ」

■リリースの予定は?

「あるね。何時になるか分からないけど、今度のWB2Dの新作を作る前にはいくつか出したいと思ってる。まだそんなに曲も無いけどね。それより早くSMASH DETOXの 1 stを出したいよ。このプロジェクトをそっちの友達と一緒に行う事が出来てすごくハッピーだしね。ちょっと遅れてるけど(Voを担当する筈だったAshley/SIGNAL LOSTが突然脱退した)。今年中にHG FACTから出したいよね。まあこっちでやってる新しいバンドも８月、９月中には名前も新しくつける予定だけど、まだはっきりした事は決まってないから。Ronにヴォーカルを依頼するのも先週に決めたばかりだからね」

■今後のツアーの予定は?

「今はSLANGのサポートとしてもうすぐWB2DでEast Coastツアーに出るし、俺も新しいバンドで曲を書いてるから、お前の所(UNDER THE SURFACE)で作品をリリースしていつかツアーだよ(笑)。因みにWB2Dは今後そんなにリリースの予定もツアーも入れてなさそうだけど。過去２回のツアーでFORWARD、PAINTBOX、BLOWBACKとのツアーも最高だったからまた日本を訪れて友達に会いたいよね、絶対にね」

■個人的な今後の予定は?

「今後の予定っていうのはあまりないけど、ただ思うのは今迄やって来た事と同じ事をもっとやり続けたいって事。もっと曲作ったり、ライヴしたり。世界中にもっと友達を作ることだね。あとまた学校に戻ろうとも思ってるね。スキルを磨く為にね。最近迄そんな事は夢にも思わなかったけど」

■君はもう既に過去２回のジャパン・ツアーをこなしていて、こっちでも沢山友人も出来たと思うけど、日本のパンク、ハードコア・シーンは君にはどんな感じに映ってるの?好きなバンドは?

「日本のパンク、ハードコア・シーンはすごく好きな場所のうちの一つだ。沢山の素晴らしいバンドが素晴らしいサウンドを奏でてるね。日本は他の国に比べて文化の違いが明白だからカルチャー・ショックがデカイよ。最初に来日した時はもう何がなんだか分からなかったけど、でも2回目に来た時はもうそんな事は殆どなくなってたね。好きなバンドは沢山ありすぎて、少々神経質にならざるを得ないけど、強いて言うならGAUZE、鉄アレイ、PAINTBOX、FORWARD、CRUDE、NIGHTMARE、FRAMTID、BLOWBACK…残念なのはLIP CREAMのリユニオン・ショーに行けない事だよ」

■やっぱりこっちに来ても未だカルチャー・ギャップはあったりする?まあ日本のバンドがそっち行っても同じ様なもんだろうけど。

「確かに日本とここじゃ全く文化、慣習が違うからね。しかも沢山の事柄が翻訳されても微妙にニュアンスが違う事が沢山ある。まあ外国に行くときは何時も地元じゃないんだっていう意識を持つ事が大事だよね。SMASH DETOXのレコーディングでWB2Dのツアーの後にしばらく東京に居た時もさ、言葉の壁で訳が分からないまま物事が進む事にフラストレーションを感じる時もあったけど。沢山の友人に囲まれて皆に世話になってたからそんなに問題はなかったね」

■ありがとう。最後に日本の次世代のパンクス達に一言。

「君達はこの道の先駆者達からより多くの事を学んで下さい。そして俺達も君達から沢山学ぶ事があるから」

※余談だが 5 /25～ 5 /31の間、毎年テキサスはオースティンで行われる巨大パンク・フェス"CHAOS IN TEJAS 2010"にBASTARDの出演の為、メンバー、出演を企画したHG FACT佐藤氏等と共に俺も渡米した。そして滞在中はショーの一部の運営にも関わる事も出来た。そこで遂に日本が誇るハードコア・パンク・バンドであるBASTARDがそこでの大トリを務めるという現実を目の当たりにした訳であるがCROW、SLANGも同様に素晴らしいショーを見せてくれた。予想はしていたが非常に衝撃を受けた。現在、内外に恥を撒き散らす日本の政府が世界の中枢から蚊帳の外に置かれている現状に対し、日本が世界に誇れるモノの一つは確実にハードコア・パンクではないか、世界を変える事の出来るモノではないのかと改めて再認識した次第である。またZacには俺達が滞在中に何かと世話を焼いてくれ、運転等、機材等でも色々働いてくれた事に感謝!

Thanks to : Timmy Hefner, Jack Control, Zac, Fukuko, Jack Barfield, Jill, Laura, Craig, Jenny, Jim Bradford, Jon, Alysha, Tommy, Jasmine, Jason, Ashley, Dan, Chris, Dave, Kevin, Matt, Corey, Wookie, and everyone who supported us at Chaos In Tejas!





MENOS VALIDOS

MONTERREY HARDCORE PUNK

メキシコの現在進行形のハードコア・シーンを牽引しているMENOSVALIDOS。キャッチーなハードコア・パンクから、これぞ南米!な生き急ぐかのガビガビ・デストラクションにD-Beatもあったりと懐も広く、何より曲作りのセンス自体が光っている。スペイン語による女性ヴォーカルもクール!そんなわけで、メキシコの"今"も含め、ベースのGARINが丁寧な回答を寄せてくれた。

■MENOSVALIDOSは英語では"Handicapped(障害者たち)"という意味になりますか?…合ってます?この名前をつけた理由をまず教えてください。

「そう、"Handicapped"はスペイン語にすると"minusvalidos"…言葉遊びをして、英語の"less(より少ない)"にあたる"menos"、それと英語の"value(価値)"にあたる"validos"を当てはめてみたんだ。俺たち自身は、あまり価値がない、または、それほど悪くないというような感じでバンド名をとらえているよ。"Handicapped(障害者たち)"とは関係ないんだ。でもみんな自分が気に入った意味にとってもらってかまわないよ」

■MENOSVALIDOSの結成にはどんなストーリーがあるのですか?

「俺たちが演奏を始めたのは2003年。自分たちの好きなバンドのカヴァーをしたり、それと同時に、演奏のやり方を学んだりする仲間同士だった。みんな音楽の知識が乏しかったからね(笑)。メンバーはLily(ヴォーカル)、Cheque(ギター)、Alonso(ドラム)、Garin(ベース&ヴォーカル)。AlonsoだけはVISION CAOTICA、OPINION PUBLICA、ALCOHOLIC YOUTHってバンドもやっている。他のメンバーはMENOSVALIDOSだけだ。バンドで音楽をぶちかまそうぜって考えから始まり、実行に移した。カヴァーから始めて、だんだんと自分たちの曲を作るようになり、スタイルも確立していったよ。2006年にスタジオに入るチャンスを得て、1st CD『Locura Ordinaria』をレコーディングしたんだ。これは9曲収録で、1曲はANIMALES MUERTOSのカヴァーをやっている。MENOSVALIDOSの結成前から友達だったから、カヴァーするのは簡単だったよ。結成前はまだ誰一人バンドはやっていなかったけど、プレイするのは好きだったし、その頃からパンク/ハードコア・シーンの中にはいたんだよ」

■最初に手本にしたバンドというと?

「最初はLOS CRUDOSを聴いていたな。LOS CRUDOSはラテン・アメリカはもちろん、世界中でも最重要パンク/ハードコア・バンドだろ。CHAOS UKやDISCHARGE、CONFLICTのような古くからのイギリスのバンド、それから、LA POLLA RECORDS、ESKORBURTO、REINCIDENTESなどのスペインのバンド、メキシコのDISOLUCION SOCIAL、MASSACRE 68、CABEZAS PODRIDASも聴いていたよ。今はちょうど、BREAD AND WATER、I OBJECT、LEBENDEN TOTEN、ANARCOLEPSIA、JUVENTUD CRASAなんかを聴いているよ。でもこういうバンドの全てが俺たちのサウンドに影響しているかってい

うと、それはまた別だけどね。でもアティテュードや精神面では影響を受けていると思っている」

■パンク/ハードコア・ミュージックとの出会いは?SOLUCION MORTAL、ATOXXXICOやMASSACRE 68などの80年代のメキシカン・ハードコア・バンドは、あなた方の重要なルーツでしょうか?

「もちろんだよ。メキシコでパンクをプレイした最初のバンドだよね。MASSACRE 68とATOXXXICOは同時代のバンドだし、今でも会ったりプレイしたりしている。最近、俺の街でMASSACRE 68がプレイしたんだよ。再結成し、500人ものパンクスを前にショーをやってくれたぜ」

■80年代のメキシカン・ハードコア・シーンについては少し知っているんですが、メキシコの最近のシーンはよく知らないのです。近頃の状況を教えてもらえますか。素晴らしいバンドはたくさんいますか?

「今はネットで5分も検索すれば、バンドの大半を探し出すのは簡単になったよね。シーンはとにかくデカいよ。コレクティヴ(集合体)がたくさん存在している。ショーを企画する人たちもいるし。ただ批判的なことを言うようだが、バンドの中にはイメージのみに突き進んでいるのや、自作の曲がないバンドもいる。そのくせ、Myspaceをやったり、ステッカーやTシャツを作ったりして、サウンドや歌詞という一番重要な部分をないがしろにしている。現在活動しているいいバンドをあげておくよ。CABEZAS PODRIDAS、DERECHOS HUMANOS(20年間も素晴らしいパンクをやり続けているバンドだ)、FALLAS DELSISTEMA、DISOLUCION SOCIAL、DIAS DERADIO、LOS MARGARITOS」

■あなた方の曲は、少しABUSO SONORO(女性ヴォーカルのアナーコ・ブラジリアン・ハードコア)を思い出させますが。このバンドは知っていますか?

「もちろんABUSO SONOROのことは知っているよ。彼らはブラジルの偉大なバンドのひとつだと思う。でもABUSO SONOROは少し速いし、クラスト色も濃いと思うんだよね。俺は女性ヴォーカル、または女性/男性の混合ヴォーカルも大好きだしね。ABUSO SONOROは無視できないよな!!!」



■"Hoy"という曲は、"Today"という意味ですよね。Oi!パンクをこの曲からは連想しましたが、実際はどうです?

「この曲は言葉のゲームで、メキシコの元大統領"Vicente Fox(ヴィセンテ・フォックス)"と関係している。彼がチアパス州("EZLN=サパティスタ民族解放軍"が活動の中心としているメキシコ南東に位置する州)の問題を解決する際に、質問に対して口にした言葉を取り上げてみたんだ。彼は"hoy, hoy(=today, today)"と繰り返し答えた。それで俺たちはこの言葉を曲に組み込んでみたんだよ。それがOi!を思わせる響きを生んだ。Oi!はパンクスの戦いにおいちゃ、普遍的な叫びだと思う」

■あなた方の曲からはハードコア・パンクの強烈な情熱とエナジーを感じます。実に素晴らしい。

「俺たちの曲はとてもシンプルさ。80年代に作られた音楽と遠いもんではないけど、自分たちのスタイルを持とうと努力している。俺たちにとって最も重要なのは、声で伝えることかな。曲を聴いてくれる人全てに叫び声を理解してもらえるようにすることだね。いくら歌詞が見事で曲が素晴らしくても、ヴォーカルが伝わってこないバンドは好きじゃない。大事なメッセージがノイズに埋もれてしまう。俺たちは母国語のスペイン語で歌っている。英語で歌うことには興味がないんだ。これは自分たち自身に正直である現われのひとつだと思っているよ。英語で歌う理由を、たくさんの人たちにメッセージを届けるためだと言うバンドもいる。でも母国語で歌う必要性を感じているし、より接近し合えると思うんだよな。実際、俺たちはスペイン語で話をしているんだから」

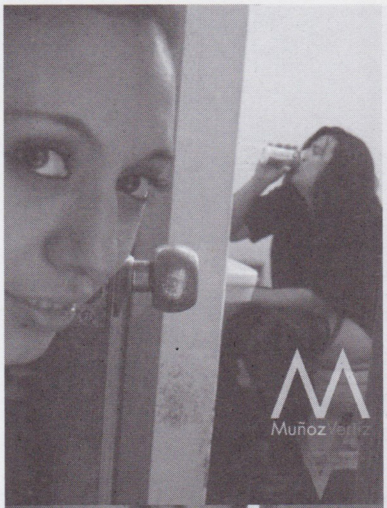
■歌詞についても聞きたいのですが。いくつか内容を紹介してもらえますか?

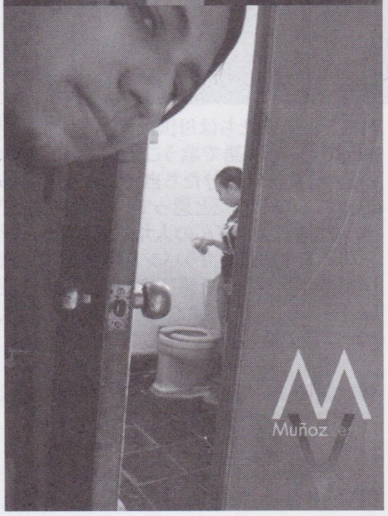
「そうだね、1 stアルバムはプロテスト(主張)が中心の歌詞になっていると言えるな。「Democracia Muerta」(Dead Democracy)という曲は、まるでネズミや寄生虫の巣窟のようなメキシコの政治家どもに対する軽蔑を歌詞にしているよ。「Patrones de Mierda」(Landlords of Shit)は真の悲惨さを強いられる労働者の労働作業を書いている。作家のCharles Bukowski(チャールズ・ブコウスキー)に捧げた「Dog from Hell」って曲もある。俺たち、彼を心から賞賛しているんだ。サウンドは荒削りで、歌詞もむき出しなほうだね。「Tienes Dos Caras」(You Have Two Faces)は陰じゃ悪口を言っているくせに、友達になりたいと近づいてくるやつのことを書いている」











■作詞する際に最も大切なことは何でしょう?

「最も重要なのは、自分たちが感じたり考えたことを正直に書くことだね。メキシコには至るところに不正がはびこっていて、自分たちの周りで起こっていることを歌詞にするのは難しくない。ニュースに目を向けると、時には少し不安を覚えることがあるよ。殺人、自殺、銃撃、貧困など、たくさんの問題に気づかされる。俺たちの書いている歌詞はその全てに影響を受けているよ。歌詞は定期的に書いているな。サウンドも歌詞も手を加えてかたちにしていくが、曲を作るのにそれほど複雑なことはやっていないよ」

■メキシコのシーンでは、女性はシーンで活動しやすい状況にありますか?

「"マッチョ"な行いをするやつは、例外なくメキシコにもパンク/ハードコア・シーンにも、大勢存在している。しかし、モンテレー(メキシコ第三の都市)では、多くの女性がレーベルやバンド、音楽に関わる活動に参加しているよ。いくつかあげると、"Collective M.U.S.A.S"、レーベルでは"Incertidumbre"、"Kutre Productions"、バンドでは"CHTM"、"Konflicto"、"Cocij Yochoo"。パンク/ハードコア界の中で活動している女性が、少しずつ増えてきているように感じているよ」

■あなたの国やその歴史、政治については?EZLNに対してはどのような考えを持っていますか?

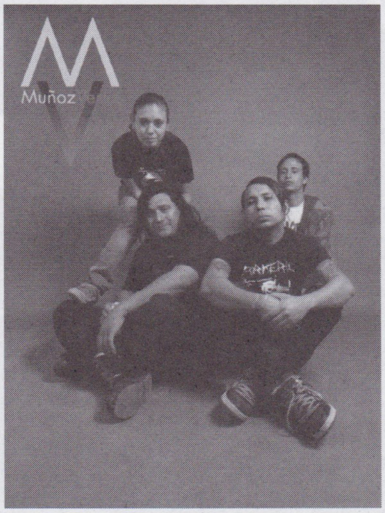
「メキシコは驚くほどに豊かな自然に恵まれた国だけど、略奪の歴史に苦しみ耐えてきた国でもあるんだ。そのひとつをあげるなら、1800年代の中期に領土の半分をアメリカに略奪され失った歴史がある。メキシコの人口は約1億人、主に3大都市に集中している。メキシコ・シティ(2500万人)、グアダラハラ(600万人)、モンテレー(500万人)。人口の半分以上(5800万人)が貧困状態の暮らしを強いられ、1日につき2ドル以下で生活しなくちゃならない。この国の主要な問題は、貧困とドラッグの売買だ。政治家はメキシコに存在する最も卑劣な階級だ。俺たちはネズミよりも悲惨な生活を送っている。政治家は一流国と同じような給料をもらっているんだ。政治家(地方の政治家も)は1ヶ月に12000ドルも得ているのさ。最高裁判所の裁判官は1ヶ月につき35000ドルを得ている。労働者はオーヴァーに言っても、1ヶ月に150ドルしか収入がない。麻薬ビジネスは国中に蔓延し、常に警報が鳴らされているような危機的状態だよ。政府は解決策として、組織的な犯罪と戦うためにストリートに軍隊を送り込んでいる。だけどこの無駄な争いのせいで、年間、1000人以上の人間が亡くなっているんだ。これは政府の失策としか言えないさ。EZLN(サパティスタ民族解放軍)は1994年に武装蜂起した。彼らはいまだにチアパスのジャングルを拠点に活動している。EZLNは自分たちの声をあげるひとつの方法だった。過去、原住民は政府に完全に無視されていた。 今、彼らは声をあげているが、政府の対応はまだ十分じゃないよ」

■では、あなたはメキシコでどんな日常生活をおくっていますか?



「メキシコで暮らしていくのは厳しいなんてもんじゃない。経済危機はひどいもんだ。経済大臣は経済状況を分析して、"少し冷え込んでいる"あるいは"少し風邪気味"と報告を出しているが、この40年もの間、ずっと最悪の危機に瀕しているんだよ。雇用はほとんどないし、賃金は十分じゃない。メキシコのペソはたった1ヶ月でアメリカのドルに対して35%の価値しかなくなっている。生活が厳しいと、経済危機はさらに耐え難いものに変わる。メキシコでCDを作るのは非常に大変なことなんだよ。1000枚のCDを作るのにかかる費用は1000ドルほど。これはそれほど高い金額に思えないかもしれないが、メキシコではとんでもなく難しいことなんだ。ほとんどのパンク・バンドには、良いスタジオに入ってCDを制作するために必要な資金がない。メキシコやラテン・アメリカのパンク・バンドは真摯だと思う。莫大な金がかかるギターやドラム、アンプを買い、スタジオ代やCDの制作費に金を出す。そういう努力をしていないバンドには、熱い気持ちも素晴らしい心も感じられないな。現在、俺(Garin。ベース)は動物病院に勤務している。ヴォーカルのLilyも動物病院で働いている。Alonso(ドラム)は建築業界で電気の仕事をしている。Cheque(ギター)はコンピューターの修理のようなことをしているよ。俺たち誰一人、満足できる仕事じゃない!!!でもこうやって生きている!!!」





■日本についてはどうです?何かバンドは知っていますか?

「数年前、俺の街ではBATTLE OF DISARMやICONOCLASTがよく聴かれていたね。今俺はBANJAXのような女性バンドも好きだし、ROMANTIC GORILLAも好きだな。日本ではクラストがよく聴かれている印象があるんだけど、どうなの？Persona Unknownというレーベルが、JUVENTUD CRASAとMENOSVALIDOSのスプリットをディストリビューションしてくれていると思う。日本のバンド、レーベル、ジン、パンク・カルチャーのことをもっと知りたいよ。CDやEPのトレードもしたいから、ぜひ連絡してくれよな」

■あなたにとってのパンク/ハードコアとは?あなたの人生に何をもたらしましたか?

「実行や行動の真実のかたちだね。俺の人生に大きな影響を与えてくれたものだし、何とかして残りの人生、この道を突き進んで行くつもりだよ。友達のほとんどもパンク/ハードコアに関わっているし、そうじゃなくても、近いところにいるやつらばかりだ。パンクにある団結は、他のものから見つけるのは難しいよね。世界中に友達ができるのも素晴らしいことだ。想像もしていなかった土地のバンド、誠実なバンドをサポートしているインディペンデントなレーベルやジンを知ることもできる。素晴らしいものだと思うんだよな」

■今後の予定や目標も聞かせて下さい。

「国外ツアーもやってみたいな。でも経済的な問題もあって、とても難しい。2010年の終わりには新しい7インチEPヴィニールをレコーディングする予定があるんだ。これから何年先もプレイし続けて、ずっとパンク/ハードコアであり続けるよ」

■最後に日本の読者にメッセージを。どうもありがとう!

「連絡をくれたら嬉しいよ。もっと日本のカルチャーを知りたい。Eメール、Myspace、手紙、ハガキなどで連絡をとってくれ。俺たちの音楽に興味を持ってくれたら、まだ作品は入手できるはずだよ。Kenji、インタヴューをありがとう。メキシコのメントレーから、敬意とハグを。Stay Punks!! Your Friends, MENOSVALIDOS」

"menosvalidos thanks edith vertiz for the pictures"

メキシコで暮らしていくのは厳しいなんてもんじゃない

でもこうやって生きている!!!





End of Seeds

三重を拠点に活動しているEND OF SEEDSがセルフ・タイトルの10曲入りCDアルバムをリリースしている。これが実にパワフルで素晴らしい仕上がりだ。これだよ、これ!!と声を大にして言いたくなるような、ハードコア・パンクの持つ激情、破壊力、焦燥感が一体となった鮮烈極まりない一枚。一聴すれば、血肉沸き踊ること必至です。
ベース・ヴォーカルのAYUMIさんとドラムのHIROTSUNAさんにメールで話しを聞いた。

■まずは結成時のお話を聞きたいのですが、結成自体は2006年ですか?どうしてEND OF SEEDSを始めようと思ったのかなど、当時の心境も教えて頂けますと嬉しいです。

A「そうですね。長男妊娠直前でしたから2006年春頃だと思います。きっかけというものはとくにありませんが、前のバンドが無くなって一から1人で募集して、その間も仲間のライヴとかに顔出して打ち上げまで行って落ちて(笑)、あくまでも自分はステージ側の人間だ!って思ってますから、仲間がいいライヴしていい顔して酒呑んでるのが悔しいし、羨ましかった。なら行かなきゃいいのに、とか思いつつもそりゃ無理な話。Drのヒロツナは CONTRAST ATTITUDEで叩いてたから、よくフラフラ車で走りながらそんな話してて、ならオレがってなって。お互いの好みも分かってますし決まっちゃったら話は早い。メンバーの入れ替わりもありましたけど、このメンツでガッツリやってきますよ。余談ですが、ギターのヒサヨキとボンドはライヴ行く車とかでもなんかやたら仲良くて(笑)、ちょっと気持ちわるい(笑)」

■あと、パンク/ハードコアにのめり込む切っ掛け、みたいなものも聞かせて頂ければ。最初はこういうのを聴いてたけど、そこから変化していって〜、といった嗜好の変化もありましたらお願いします。

A「自分が見る側でいるという意識ははじめからなくて、中学校の入学祝にアコギを貰ってから毎日色んなジャンルのコピーばっかりしていて、あ、初めて弾いたの長渕


RAFAEL YAEKASHI

です(笑)。そのうち最初に組んだのが女の子ばっかりのバンドなんですけど、その中のメンバーと、JAPってどんなの?スキンズ?クラスト??なに?みたいな感じで(笑)。地元の先輩にテープとかCD借りて。で、ライヴがあるらしいよって見に行ったら、もう衝撃そのものでした…。こういうのがやりたかったんや!!!!って。暴力的な見た目と音の渦に乾杯!!!速攻髪の色二人で変えました(笑)。で、そのままもうあとはどっぷりズルズルと」

H「中学の時に、友人宅で聴いたLIP CREAMのアルバム。1曲目が終わった瞬間、「もう、これしかない」と。実際、その場でそう叫んでたらしい(笑)」

■今作を聴かせて頂いて、ヴォーカル・スタイルがとにかく強烈で格好良かったです。ハードコアでもメロディアスに歌ったりと色々なタイプがありますが、今のスタイルになったのは自然な感じですか?それとも意識しているヴォーカリストなどはいますか?

A「ありがとうございます。スタイルと言われるとよく分からないというか決めてるわけじゃないし、誰かを意識してるわけでもないです。まったくもって自然で素の私です。実は、昔から自分の声にコンプレックスあって、ヴォーカルするのトラウマだったんですけど、今END OF SEEDSで歌ってそう言われること増えて、あー、やりたいようにやって素の自分でいいんだって思えて、やっと時代が追い付いたかと(笑)、嘘です(笑)。ありがたいですね」

■歌詞、言葉の乗せ方も、短いセンテンスの中で矢継ぎ早に繰り出される印象があって新鮮です。曲に乗せる時にかなり苦労されているんじゃないかとも思いますが、いかがでしょうか?

A「そうですね。私はB/Voなんですが、ベーシストが歌うヴォーカルの付け方はしたくないっていうのがあって、Bass100%・Vo100%。音源しか聴いたことない人がライヴを見て、「え?!B/Voだったの?!!ヤベ~!!!」くらいのノリを目指してまして(笑)。だから前はギターで曲作ってたんですが、最近ベースで曲作ることが多くて、ついでにヴォーカル・イメージも付いてくるんで、もう自分をコピーしてる状態です。こうつけないと!とかそんなのは全くないし、出来れば毎回違うことやりたい。困った時のフレーズみたいなのとか、ついやっちゃうコード進行みたいな手癖とか、そうゆうのも打破していきたいと常々意識してます」

■歌詞は基本的に日本語ですが、感情を表現するにはやはり日本語が一番、という理由からでしょうか?英語で歌おうというのは全くなかったですか?

A「英語は私がわからないので(笑)というより想いを伝えやすい伝わりやすいのはやはり日本語だと。だってJAPANESEですもの。歌い回しとか語尾とか英語のがスマートにきまるんですけど(笑)。でも、ツアーで来た奴らと英語で細かい会話が出来ないもどかしさはあるんで英語は覚えようかな～なんていいつつ毎回楽しく乗り切れてるからななか…」

■曲作りはどんな風にされていますか?焦燥感にかられるような速い曲がメインですが、全体的にグルーヴ感やロックの要素も感じたりしました。特にギターのフレーズから。曲作りで意識しているポイントとかもありましたら聞かせて下さい。

A「メンバーの今まで聴いてきたものがうまくだせてるかと思ってます。曲作りは、大体私が元を持ってって全員で作る感じです。例えば、ヒロツナと私は夫婦なんで、いきなり「いやー今度こんなリズムの曲がやりたいんです」「なんやて?よし、こんなのどうよ?」みたいな(笑)。で、ヒサヨキがまた好みのいいフレーズ毎回ほっといても被せてくれるんで、細かいニュアンス伝えなくてもいい感じに。意識してるのは、さっきも言いましたが似たり寄ったりは無しの方向で。あとはロックな感じだろうがパンクな感じだろうが、私が歌えばハードコア・パンクになるだろうと(笑)」

■今作、各パートの音のバランスもバッチリに感じました。全パートが前へ前へと出てくる攻撃的な音質ですが、しっかり各々が聴き取れます。レコーディングやミックスで考慮されたのはどんなところでしょうか?

A「ありがとうございます。全体的にまとまりすぎないようには心掛けました。ギターが2本な分、バランスはこれからも課題だと思っています。レコーディングは、基本被せはヴォーカル・コーラスだけで、はまっちゃう前にサクサクと。ミックスはエンジニアのイッペイさんと相談しながらスムーズに…といいたいんですが(笑)ヒロツナとヒサヨキの「あそこをこうしたい」が止まることを知らないもんで(笑)、私は控えめなのでそこは、ね(笑)。納得いくものが出来たと思ってます」

■細かい話しなのですが、「ALIVE OR DEAD」のコーラスで女性の高い声が入っているように聴こえるのですが、…入ってますか?どなたの声でしょう?

A「女は私だけなので私かな?いや、ヒロツナって可能性も(笑)」

■ちなみに2曲目の「T.O.D」は何の略ですか?それと「Reward-10」というのも意味深な曲名に感じたのですが、これはどんな意味でしょうか?

A「"To One Direction"です。造語なんですが、一つの方角・方向を目指すみたいなニュアンスで。"Reward-10"は、自分たちがなんら特別でもない日々の生活を送る上で、例えばエアコンであったり、車であったり、もっと細かく言うと紙やポイ捨てや…。それを使ってしまうことによって起こる出来事





や状況を考えてみたんです。子供と平和〜に遊んでて、ふと怖くなりました。この子達に無事に未来はあるのだろうか?またその先に続くであろう血に何がのこるのか?自分たちの子供の頃の夏休みの宿題に、天気と気温を毎日書く面倒なやつありましたよね?あれに書いてた時、40度なんて数字あったかな?とか。でも、そんな気温でエアコン使わなきゃ部屋でも熱中症でダメになるし、車って便利だし、紙無いと困るし。だから?わかってても目を背けてる自分。いつか報いが来ることを知りながら。10という数字は、いくつかの…ってニュアンスです。でも、その中でも、思い出したとき、少しでも、未来に続く血のことを考えた行動を起こせたら、と伝えたいです」

■コーラスのサンクス欄にPERSEVEREのKomatsuさんの名前もありましたが、これはどういう経緯でしたか?メンバーさんが被っているCONTRAST ATTITUDEやACROSTIXは同じ三重というので分かるのですが、Komatsuさんだけ広島なので、なんでかな?とちょっと思いまして。

H「この音源を出すきっかけをくれた一人で、今回本当に色々協力してくれて助かった。コーラス参加はたまたまお互いその日に大阪にいて実現しました(笑)。この場を借りて、こまっちゃんありがとう!」

■アートワークはメンバーさんによるものですか?ダークだけど色彩も含めて不思議な雰囲気がある絵ですね。もしメンバーさんが描かれているようでしたら、どんな想いを込められたか教えて下さい。

A「はい、私が。あれ実はアルバム全曲の一曲ずつのイメージを描いてるんです。アルバムタイトルはあえて無しにしたんで、何か一つのイメージを描かず、全部ぶち込んだらあんな感じに。また暇な時にでも見てみて下さい(笑)」

■インナーやHPに丸とAとMを組み合わせたようなマークが使われていますが、これはどんな意味なのでしょうか?

H「「MIE ANARCHY」の略。三重HARD CORE PUNKを象徴するマーク」

■物凄く根本的な質問なのですが、音楽だけに限っても無数のジャンル〜対象がある中で、ハードコア・パンクを選ばれたのはどうしてでしょう?曖昧としてますが…。

A「収まりきらない当時の若さがぶつけられる合法的な?暴力性なんでしょうか(笑)、なんだろ(笑)。今になって分かるのは、ハードコア・パンクの門は、マジで続けてかっこいいことやってりゃいつか憧れてCD聴いてたような人達とでもおんなじステージに立って、おつかれさま!って乾杯できちゃう世界なんだってこと。いつか世代交代してやる!なんて思ってても、なかなかまだまだ先輩方は進化する一方ですから(笑)やめられない!」

H「切っ掛けへの答えにも繋がっているけど、その出会いがあまりにも衝撃的過ぎたから。ハードコア・パンク最高過ぎるから」

■最後に、読者さんにメッセージなどありましたらお願いします。

A「偶然は無いと思ってる。ライヴでの出会い、CDを手にとってくれた出会い。ここ最後まで読んでくれてた出会い。自分が女で、母親になって、全ては必然。あと、もっと女の子がガンガン出て欲しい。だから、ライヴ見て、かっこいいこと出来るんだ、って思ってくれたら素晴らしいし。もっともっと必然の種をまきに行きます。そん時は乾杯しましょう!!!」

H「色々あって当たり前。自分次第でこの世も捨てたもんじゃない。考え、行動し、笑顔を忘れず、いい顔して現場で会いましょう」



PHILIPPINES PUNK/HARDCORE 1980 - 2010

フィリピンにおけるパンクの誕生は1980年と言われている。これは周辺の東南アジア諸国に比べかなり早い。欧米と同じく80年代には広くシーンが拡大したようだが、その割にはあまり知られているとは言い難いフィリピンPunk/HCの世界。日本からは沖縄のちょっと先という近さなのにもかかわらず。
本稿では今年の3月に行われた伝説のギグ、BRAVE NEW WORLD 2010のライヴ・レポと、それに先だってフィリピン・シーンの大まかな流れ、そして主要ディスク・レヴューをお届けする。山路氏と資料の翻訳ほか力を貸してくれたWaterslideおにぎり社長に感謝します。
それではサンミゲル片手にどうぞ。氷を浮かべちゃうのがフィリピン流です(笑)。

TEXT:Haponlalaki

THE JERKS～BRAVE NEW WORLD

1980年、マニラのディスコで「NEW WAVE NIGHT」が開催され始める。レギュラーとしてPinoy Rockの重鎮JUAN DE LA CRUZのJoey Smithが出演していたがやがて高額なギャラを要求するようになり、代わりにTHE JERKSが出演するようになった。このTHE JERKSがフィリピン最初のパンク・バンドと言われている。もともとプロテスト色の強いフォークをやっていたChicoy Pura(Vo)によって結成された彼らのサウンドは、フィリピンのパンク・シーン形成に多大な影響を与えたという。

翌1981年にはラジオでTHE JERKSの曲"Romanic Kill"と"Big Deal"がガンガン流れる。当時Howlin' Daveというマニラの有名DJがパンクのレコードを頻繁にオンエアしていた。マーケットにはSEX PISTOLS、CLASH、XTC、THE CARS、THE B-52's、DEVO等のレコードが流通し、テレビや映画でもパンクが取り上げられた。また音楽雑誌でもマニラのパンク・シーンに関する記事が連載され、JERKSはその最初に特集された(筆者もその雑誌をマニラで見せてもらったが、買ってくれればよかった…)。

この年、早くも最初のBRAVE NEW WORLDギグ(BNW)が開催される。当時10代の3人組CHAOS(THIRD WORLD CHAOS)がギグのオーガナイザーTommy Tanchancoに見出される。このギグはオリジナル曲をやっているバンドを集めるという趣旨で開かれていたため、UKパンクのカヴァーが中心だったシーンが次第にオリジナル曲を演奏するようになっていったという。



BETRAYED

PRIVATE STOCK


後に自身がギターでCHAOSに加入し、また伝説のレーベルTWISTED RED CROSSを立ち上げる人物として知られることになるこのTommy Tanchancoだが、彼の父親はマルコス政権下のお偉いさんだったらしく、かなり裕福な層であったことが想像できる。

BNWは継続して開催され、1983年にはZOO、COLLEGE、PRIVATE STOCK等がデビューする。ZOOは後にOCEAN ZOOと改名し、"Animal Party" 7"epをリリースする。このINSECT DANCEレーベルが最初のインディー・レーベルとなる。

TWISTED RED CROSS

1984年、Tommy TanchancoがTWISTED RED CROSS(TRC)というアンダーグラウンド・テープ・レーベルを立ち上げる。TRC最初のリリースはURBAN BANDITS、WUDS、BETRAYEDなどが収録された"Rescue Ladders & Human Barricade"というコンピ・アルバム。翌1985年にリリースされた。

ところでフィリピン最初のパンク・バンドがTHE JERKSなら、最初のハードコア・バンドは何だろうか?アメリカ帰りのメンバーらによるBETRAYEDがフィリピンにハードコアを紹介。彼らがBNWに登場以降、ギグの雰



DEAD ENDS

WUDS



囲気がヴァイオレントになっていったという。彼らは国内最速と呼ばれることになる。

BETRAYEDの母体となるバンドは1980年ニューヨークにて結成。バンド名はSLFの"Rough Trade"からとったという。帰国後他のバンドを経てアルバムをリリース、活動が本格化するも、84年にはメンバーのアメリカ移住により解散。翌年にオリジナル・メンバーはギターのみで再結成する。

この頃シーンに登場した主なバンドについていくつか解説する。

URBAN BANDITSはCOLLEGE解散後、暴れん坊Arnold Moralesにより結成される。Arnoldには暴力的な逸話がいろいろあるが、音はポップなパンク・ロックで、HC要素は少なめ。

WUDSは当初彼等のルーツでもあるフォーク・ロック的な要素のあるパンク・バンドだったらしい（音源ではそういう雰囲気は感じないが…）。90年代もプレイし続けた末、メジャーと契約する。

DEAD ENDSは高校の英語教師だったAl Dimalantaと弟のJayがフロントに立つ3人組。当初メタル・バンドとして練習していたという彼らは、DEAD KENNEDYSへのフィリピンからの回答と言われた。80年代に3枚、90年代にも1枚アルバムをリリースしている。

PHILIPPINE VIOLATORSもこのころ登場。DEAD ENDSと同じく彼らも兄弟がフロントマンだった。Bong EspirituがVo。弟のJesus（Señor）RottenがG。後に80～90年代にかけて5枚のアルバムをリリースする。

80年代も半ばになるとパンク・ファッションはビジネスに成り下がり、ラジオはパンクやNEW WAVEを流さなくなった。JERKSもこの頃解散。また輸入盤のLPやローカルのパンク、NEW WAVEのカセットのブートレグを地下で流通させる海賊盤ディストロがいくつも現れたという。TRCのリリースは元々がかなり安かったそうだが、やはりこのあたりに欧米諸国とは異なるシーンの事情が見える。

一方BNWは恒例となり、G.I.+THE IDIOTSやPHILIPPINE VIOLATORSが出演するようになったが、やがて終焉を迎えることになる。最後のBNWギグは2週間にわたり盛大に行われたという。BNW亡き後はArnold MoralesがY.S.M.(Youth Solidarity Movement)を立ち上げ、その意思を継いだ。

またTRCレーベルも次々とカセット・アルバムをリリースしていく。BETRAYEDのアルバム（当初はTRCからではなかった）は当時のインディー・シーンで異例の売れ行きだったという。

1987年にはURBAN BANDITS、BETRAYED、PRIVATE STOCKが解散。この年I.O.V.、DEAD ENDS、R.D.A.、PHILIPPINE VIOLATORSのアルバムがリリースされる。

また、パンク・ファンジンHerald XがTommy Tanchancoと友人らによって創刊される。それは瞬く間にローカル・アンダーグラウンド・シーンの支持を集めた。

80年代も終わりに近づくとクロスオーヴァーやRiot Grrrlsのムーヴメントが起こり、スケート・コンテストが開かれたり、多くのD.I.Y.ファンジンが作られたりした。

1987年リリースの"Philippines：Where Do We Go From Here?"の時点で、スラッシュメタル色の強いバンドが多く収録されているのが分かる。また89年ごろには地下シーンでフィリピン最初のデスメタル・バンドも産声を上げたという。

こうして80年代の流れをざっと見ていくと、若干のタイムラグはあっても欧米のパンク・シーンの流れはそのままフィリピンのシーンに影響を与えているようだ。

90s～現在

TRC亡き後の90年代は、PHILIPPINE VIOLATORSのEspiritu兄弟がRARE MUSIC DISTRIBUTOR（RMD）レーベルを立ち上げ、彼ら自身のアルバムやいくつかのコンピレーションをリリースしている。また、BAD OMENのメンバーが運営するMIDDLE FINGER PRODUCTIONも多くの作品をリリース、またマニラのRectoではパンク・スケート・ショップも経営している。

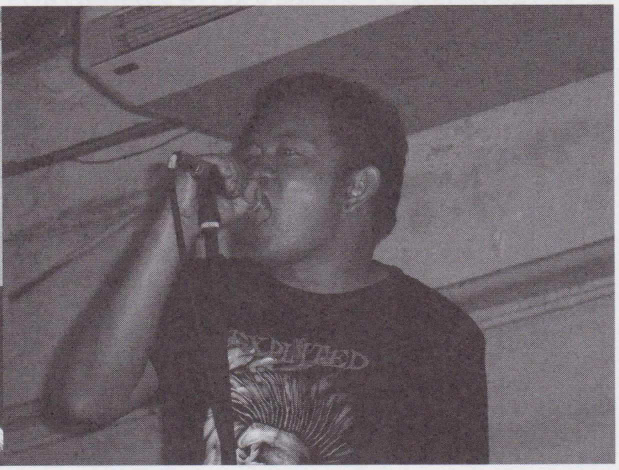
90年代以降のバンドをいくつか挙げると、DEAR DINGO、PUTANG I NAS、BAD OMEN、パンパンガ州サンフェルナンドを拠点とするISTUKAS OVER DISNEYLAND、ASKALS、日本のCARAVANA ANARQUISTAともスプリットEPをリリースしたA.D.A.（AGGRESSIVE DOG ATTACK）などがいる。もっと新しいところではポップ・パンクのT.R.A.、TRAGEDY系ハードコアのKILLRATIO、ニュースクール/メタルコア系ではBYSTORM、SAUNA、全員女性のCHOKE COCOIなど、様々なスタイルのバンドがまだまだ沢山存在する。

また2010年現在、WUDS、PHILIPPINE VIOLATORS、DECEASEDなど80年代のバンドの多くが再結成しており、元DEAD ENDSのメンバーらによるTHROW、元I.O.V.とG.I.+THE IDIOTSのメンバーによるHARD-Kなどもコンスタントに活動中である。

BRAVE NEW WORLD 2010
ライヴ・レポート

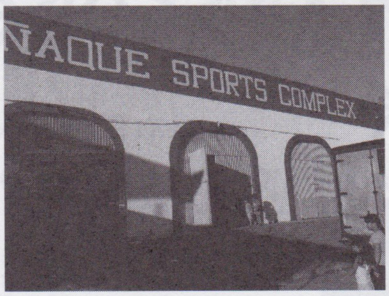
前述のように長い歴史のあるBRAVE NEW WORLDギグだが、数年前あたりからまた年1回位のペースで行われるように





PHILIPPINE VIOLATORS

VENUE & FLYER





なってきているようだ。そして2010年3月、今年の開催と出演者を知る。WUDS、PHILIPPINE VIOLATORS、R.D.A.、HARD-K、DECEASEDにその他多数…。これは何としても観たいと飛行機を手配。

会場はマニラのエルミタ地区からFXという乗り合いバンで南に1時間ほどのParañaque市にあるSports Complex。宿を確保し1時間ほど迷った末到着したそこは、バスケットコートが1つ分入るだけのぼろい体育館。入場料は50ペソ(約100円)。フィリピン基準でもかなり安い。

5時スタートとあり、ちょうどぐらいに到着するとまだ準備中の模様。会場前の未舗装の路上では大勢の子どもたちが元気に遊んでいます(笑)。昔の日本みたい?待てど暮らせど始まる気配はなく、周辺をうろうろしたりして時間を潰すが19時半ごろになって演奏開始は20時というアナウンスが…。

ともあれライヴ開始。はじめのうちは10代くらいの若手のバンドが次々と演奏。2〜3曲くらいしかやらないバンドもあり、また演奏が終わるとすぐ次のバンドが準備を始めるので、あまり間を空けずに進行していく。この辺はストレスを感じなくてよい。最初のうちはガラガラだったので、会場広すぎたんじゃ…と思ったが夜も深まる頃にはバーやライヴハウスでは入りきれないくらいに。客層の特徴は、若い! と言うか若いどころの話じゃなくて小学生パンクスが普通に沢山います(笑)。みなDIY感溢れる思い思いのパンク・ファッションで決めている。青年層ももちろんいるが割合は少ない。ちなみに会場でのマーチャンダイズの販売に期待していたがそれらは一切なく、売ってるのはビールのみだった。

WUDSのドラマーが1バンドごとに前説のようなトークを挟み、進行役を務めている。何を言ってるのかは分からないが。この日はWUDSがヘッドライナーのはずが、なぜか出演キャンセルに。他にもR.D.A.やその他キャンセル多数で、かつ代わりに出演しているバンドもまた多数で、もはやポスターにある出演者リストはあてにならない状態。しかしメイン5つのうちヘッドライナー含む2つキャンセルってどうなんだ…。

最初のピークは90年代から活動を続けるBAD OMEN。キャッチーなサウンドでキッズにもなかなかの人気。だが続いて登場のPHILIPPINE VIOLATORSでフロア大爆発。"School Violence"のイントロからの"Ipako Sa Krus"でスタート。さすが元気の有り余ったキッズはすごい暴れっぷり。ああ、だから体育館なのかと納得(笑)。途中ドラムセットが崩壊というアクシデントがあり中断したものの5曲演奏。ラストは名曲"Sikat Na Si Pedro"。ちなみにこの日はWUDSのドラマーが叩いており、フィリピン・パンク史的にかなり贅沢な構図だった(笑)。

その後HARD-K、DECEASED、DEAR DINGOと次々演奏は続いていく。HARD-Kは硬派な音もルックスもかっこいいのだが、客のキッズは体育座り状態。ところが突如DEAD ENDSの"New Life"を演奏したとたんまたもや凄まじい盛り上がりに。実に正直なオーディエンスだ。

その他印象に残ったバンドは有名Oi!の名曲カヴァー中心にプレイしていたAPK、ネオスカ系のMOBSTER MANILAなど。

PUNKS

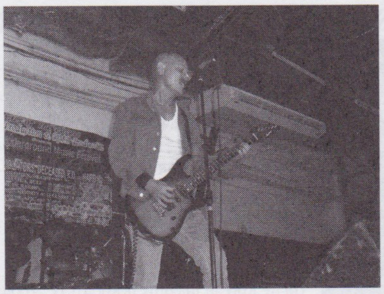


実はこの日会場につくまで知らなかったが、当イベントはオールナイト。トリはASKALSが務めるとのことだったが、午前3時を回った辺りで疲労がピークに達し会場を後に。10時間この場にいたのでそろそろ帰ってもバチは当たらないだろう。観たいのはすべて観たし。いや、WUDS…、R.D.A.…。

ちなみに今回のオーガナイザーは最初のBNWの頃は明らかに生まれていない20代前半くらいの若者たちのグループだった。歴史あるイベント名といっしょに彼らがこれからのフィリピン・パンク・シーンを引き継いでいくのだろう。今日出た多くの無名のバンドの中から後に伝説となる凄いバンドが現れる、かも、しれない。

おまけ:後日談

BNW2010の翌日、通っていたマニラのショップの兄ちゃん(うさんくさい)から、今夜JUAN DE LA CRUZとTHE JERKSのライヴがあるよと知らされる。2日連続でフィリピンRock/Punk史的に重要なバンドを観れるとは運がよすぎるぜ…とその夜タクシー飛ばして会場に。ビッグなバンドならではの広いホールの前に到着するも人気がない。入り口に座っている警備員に聞くと「キャンセルだ」。会場前のどでかい看板でも告知しているのでガセネタ掴まされたわけではなさそう。でもキャンセル。理由は不明だけど、ギャラでもめたのだろうか(笑)。うーん。またしてもやってくれたフィリピン。これをもちまして締めに代えさせて頂きます。



HARD-K

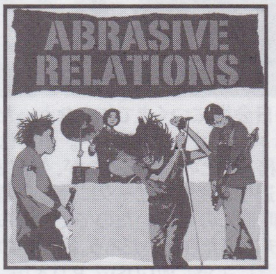


PUNKS

PHILIPPINES PUNK/HARDCORE 1980-2010 DISC GUIDE

TEXT:Haponlalaki

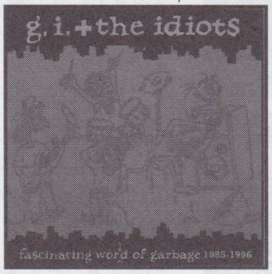
ABRASIVE RELATIONS/st



90年代のオールガールズ・パンク・バンド。当時のフィリピンで全員女性のバンドってのはやはり相当珍しかったのでは。音にも若さ溢れる感じがよく出ている。"Massacre At Mendiola"は、1987年のマニラでの政府によるデモの武力弾圧事件についての歌。Vo/GのTin Garcia嬢は現ALKO HOLOKOST。そちらでのヴォーカルは酸いも甘いも噛み分けたのかやさぐれ度UP。

(Astral Anarchy AASP004)7"EP　2001年

G.I.+THE IDIOTS/Fascinating World Of Garbage 1985-1996



G.I.＝George Imbecileはベーシストの名前。80年代にリリースしたアルバム、コンピ収録曲から90年代の未発表デモまで収録した全曲集。FUNな要素を感じるキャッチーなパンク・ロックから爆走HCまでやっているが、86年のアルバム音源はサイケデリックなスタジオワークが施された曲などもあって面白い。"Spirit of the 80's"でのフィリピン・パンク名曲メドレーに涙々。

(DNC Records DNC2006-07)CD　?年

BAD OMEN/st



結成は'89年。90年代に多くの作品やコンピ収録曲をリリースしているが、本作は彼らの1st。ローカル感溢れるもっさりした味わいのメロディックなパンク・ロックは、B級ポップ・パンク・ファンにおすすめ。2008年には目下の最新作"God Is Everywhere"を発表。そちらは若干洗練された印象でパンクを軸にスカ調やメタリックな曲まで様々なサウンドを聴かせている。現役で活動中。

(Middle Finger Production MFP02)TAPE　1994年

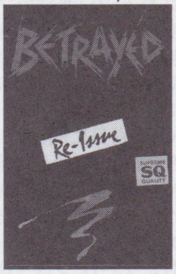
I.O.V./Another Destructive Century



1986～89年の間活動したIntoxication Of Violence。初期UKHC的8ビートの曲で幕を開けるが、激速ナンバーも多数含む17曲入りアルバム(1987年)。プロデューサーにTommy Tanchancoとあるせいか、他の同時期のバンドより音に迫力がある。どこかのレーベルがCDで再発しないものか。ベースのRadzonとG.I.+THE IDIOTSのJun Idiotは後にHARD Kを結成し、現在も活動中。

(Recycled Records&Tapes 番号なし)TAPE　?年 [re-issue]

BETRAYED/st



数十秒のハードコア・ナンバーから泣きのパンク・ロック、果てはレゲエからダムドの"Love Song"カヴァーまでやりたいことは全部やった、という感じの1st。当時国内最速と呼ばれただけに、速い曲の加速感が実にかっこよい。何度目かの再結成後の2nd"Again"でもセルフ・カヴァーされる名曲"Never Meant To Be This Way"収録。オリジナルは1985年にDMZより、翌年TRCより再発。

(UARM 1032)TAPE　1994年 [re-issue]

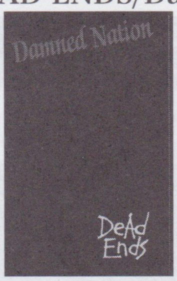
ISTUKAS OVER DISNEYLAND/O Guinu



94年結成。パンパンガ州サンフェルナンド(マニラより車で2時間)を拠点とするバンド。2000年代に多くのCD-Rやコンピ収録曲をリリース。サウンドの方は彼らのmyspaceにある"Catchy mid tempo punk with hints of Oi!"という言葉が実にうまく言い表している。DEAD ENDSの"Won't Fool Me Again"のカヴァーやライヴ音源も収録。

(Cat Food Money Records CFM-1)CD　2005年

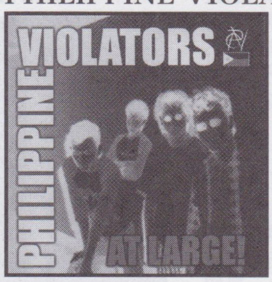
DEAD ENDS/Damned Nation



1stはパンク・ロック、2ndではフックを失わずにスピードアップ、そしてこの87年の3rdアルバムで完全ハードコア・パンク化と着実に進化してきたDEAD ENDS。Al Dimalantaの甲高いヴォーカルが高速ビートに乗って15曲一気に駆け抜ける様は実に爽快。速い中にも随所で小技が効いており、完成度の高いアルバムである。DEAD ENDSは全作品CD化して世界に流通させるべき。

(Twisted Red Cross DE-03)TAPE　?年 [re-issue]

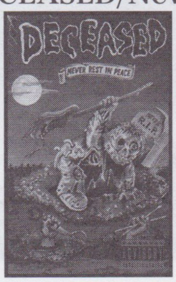
PHILIPPINE VIOLATORS/At Large!



オリジナル・リリースは1987年。天然でポンコツでクソガキでパンクな感じの1st。ヴォーカル、演奏、曲調いずれも後の作品とはだいぶ異なりヤケクソで初期衝動全開。ガリガリしたギターとガキくさいヴォーカルが実にいい味を出している。彼らの作品中唯一全曲英語で歌われているアルバム。CD化にあたり2曲のライヴ・トラックを追加収録。

(Itchy Korean Records IKR005)CD　2005年

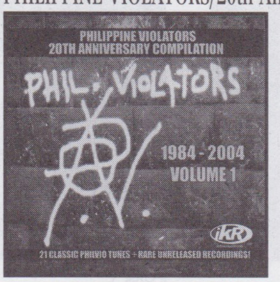
DECEASED/Never Rest In Peace



パンク・ロック寄りのサウンドのバンドが多い印象のフィリピンだが、ツインギターでスラッシュメタル色の濃いハードコアを聴かせるのがこのDECEASED。といいつつB面は若干雰囲気が変わり他のTRCバンドのようなパンク・ナンバーが目立つが、やはりメタリックなギターが活躍してるのがポイント。1995年にはアルバム"Reborn"も発表している。オリジナルはTRC-16、1988年リリース。

(Darkmoon Records DM666-2)TAPE　?年 [re-issue]

PHILIPPINE VIOLATORS/20th Anniversary Compilation 1984-2004 vol.1



こちらは1st"At Large!"以降の4枚のアルバムからのベスト盤。バンドのその後の方向性のように、本来の甘い声質を活かしたポップな曲中心の選曲となっている。年代順には収録されていないが、ダークなハードコア・ナンバーから最高のキラー・パンク・チューン、さらには泣きのピノイ・ロックまで曲により様々な表情を見せ、音楽的成長(?)が伺える。Vol.2は未だリリースされていない模様。

(Itchy Korean Records IKR004)CD　2004年

CDもしくはカセットで再発されているものを優先的に選んだ。古い音源は特に、モダンなサウンドに慣れた人には耐え難いショボさ加減かもしれないし、入手も簡単とはいえないけれど、これがなかなか不思議な魅力のあるフィリピンPunk/HC。手っ取り早く音をチェックするには、myspaceのPHILIPPINES 80's HARDCOREがある。また本稿で取り上げた多くのバンドの貴重な映像がYouTubeにアップされている。こんな映像残ってたのかと驚くようなものまであったりするので、興味があればチェックしてもらいたい。

R.D.A./Brave United In Trust



R.D.A.＝Rapid Deployment and Antidoteだったり後に変わったりするらしい。チープな音で突っ走る崩壊HCは好きな人にはたまらないサウンドのはず。スカスカかつガタガタのバックにナチュラルな声で叫ぶヴォーカルの取り合わせがまたよろし。"SxOxB"のような数秒の曲もプレイ。カセットで再発されている。またコンピ"Up Yours!"で本作未収録の"Be Brave"が聴ける。

(Twisted Red Cross TRC-14)TAPE　1987年

VA/Nightmare vol.1



古くから出回っているブート。このレコードでフィリピンのパンク・シーンの存在を知った人も多いのではないか。PHIL.(PHILIPPINE) VIOLATORS、R.D.A.、URBAN BANDITS、I.O.V.、BETRAYEDの各カセットから収録。ハードコア的視点でコンパイルされており、いずれもラフでチープだが味のあるフィリピンHCを聴かせる。やはりこの中にあってもBETRAYEDの瞬発力は際立っている。

(bootleg) 7"EP　?年

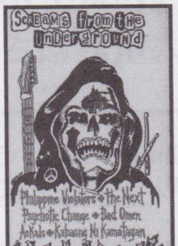
T.S.A/Back To Kindergarten



これは凄い。タイトルに示唆されるように、彼らが子供の頃から聴いて育ったであろう80年代のフィリピンPunk/HCの名曲をカヴァーしまくっている17曲入りアルバム(うち2曲はオリジナル)。のっけからTHIRD WORLD CHAOSのNew Move For Error(!)で幕を開け、80年代TRCバンドの名曲が連射される。Bulakan出身だが、現在はシンガポールを拠点としている。

(Rough Draft Records RDM-03)CD　2010年

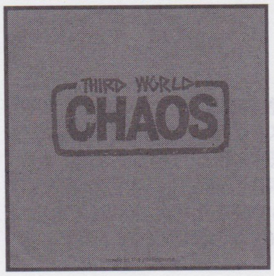
VA/Screams From The Underground



PHILIPPINE VIOLATORSのEspiritu兄弟のレーベルのコンピ。目玉は彼らのアルバム未収録の3曲か。BAD OMENの曲の超初期ver.も。他の収録バンドはTHE NEXT、ASKALS、PSYCHOTIC CHANGE、KABAONG NI KAMATAYAN。ちなみに筆者のテープは途中で音がこもったり途切れたりする。もちろん全部がそうじゃない、と思いたいが…。

(RMD Records 02)TAPE　1992年

THIRD WORLD CHAOS/Made In Philippines



カセットテープによるリリースが多いフィリピンだが、80年代前半には7"をリリースしたバンドがいくつかあった(超入手困難)。本作は90年代に出たブートらしい。CHAOSもしくはTHIRD WORLD CHAOS、後にはEXCOMMUNICATEとも名乗っている彼らの84年のシングルに同年のアルバム"New Move For Error"から2曲追加。内容はKBD系ファン発狂のkiller punk rock。

(Pinatubo Music PMEP0695) 7"EP　1995年

VA/Rescue Ladders & Human Barricade



TWISTED RED CROSSレーベルの記念すべき第1弾(1985)。収録バンドはURBAN BANDITS、WUDS、BETRAYED、PRIVATE STOCK、SEX MILITANTS、PUBLIC SCANDAL、DEAD BEAT。URBAN BANDITSやBETRAYEDのアルバム収録曲のオリジナル・ヴァージョンが聴ける。このコンピ・シリーズは第2弾"Fatal Responce"(1986)、第3弾"3rd Bomba rdment"(1986)と続く。

(No Label 番号なし)TAPE　?年[re-issue]

THROW/Unwavering



ex-DEAD ENDSのVo/G、Al Dimalantaとex-PRIVATE STOCKのDennis Maniegoらによる現在進行形バンドがこのTHROW。本作は2008年リリースの2nd。DEAD ENDS時代から一貫して作品のクオリティは高水準を保っている。例の特徴的なヴォーカルも健在で、本作は速い中にも耳に残る泣きのメロディが特徴か。2010年には3rdアルバム"Believe"を発表と、現在も精力的に活動中。

(Counterflow Records CFR-04)CD　2008年

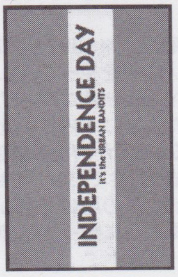
VA/What Do You Want For Christmas?



副題に"Twisted Carols From The Underground"とある、クリスマスをテーマにしたコンピ。全体的にパンク・ロック寄りの音だがメロディックなBAD OMENからHCのA.D.A.、スカ調のCRAZY BEATまでバラエティに富んでいる。他の収録バンドはCANTOOTS、GEN. LUNA、G.I.+THE IDIOTS、DEAD SPERM、CAMOTE CHUNKS、PUTANG I NAS、DRAIN BRAIN。

(Middle Finger Production 番号なし)TAPE　1995年

URBAN BANDITS/Independence Day



Arnold MoralesがCOLLEGEの後に結成したバンドの12曲入りアルバム。速い曲は少なく、ミッドテンポでキャッチーなパンク・ロックが主体。コーラスのせいかOi! punkとも呼ばれるが、曲を聴く限りOi!には聴こえない。"Do You Rebel Rebel"での"And I Know Why"という部分はN-I-NO-Yを意味し、暗殺されたニノイ・アキノ(国際空港の名前にもなっている)への敬意を込めているという。カセット再発あり。

(Twisted Red Cross TRC-04)TAPE　1985年

WUDS/Oplan Kahon



TRCから1985年にリリースの1st"ARMS TALK"(Armies' Reunion for Modern-age Service and Training in Attainment of Love and Knowledge)やコンピ収録曲を再録音し彼ら自身のレーベルより発表したもの。キーボードを導入したりなどアレンジが大きく異なっている曲もあるが、特徴的な甘いヴォーカルは健在。フックの効いたパンク・ロックが詰まっている。名曲Rain(We)収録。

(Criminal Records 番号なし)TAPE　1994年

A.U.K.



お前の神はどこにいる?

ヒロシマとナガサキに原爆が落とされた時、神はどこにもいなかった
ユダヤ人がナチ政権に大量虐殺され、苦痛を与えられていても防いでくれる
神はいなかった

イギリスで活動中の、Iain InfluxとJohnny Punkという兄弟によるアナーコ・パンク・バンド、A.U.K.。
80年代にCRASS RECORDSからのリリースで知られているALTERNATIVEで活動していたりと、長い長い経歴を持つ2人です。
A.U.K.自体、UKアナーコ・パンク直系のサウンドに、曲によっては+αでポスト・パンクやニューウェイヴ、ゴシックなんかの流れも加味したスタイル。派手さこそないですが、燻し銀のこれぞ英国!なモノトーンの音色も魅力です。
話題は哲学的な話しから忠犬ハチ公まで多岐に渡ってますが(妙に日本贔屓)、CRASSに対する思い入れ含め興味深い発言も多々。じっくりとお読み下さい。

■A.U.K.の結成話を聞かせてください。日本の読者にあなた方のヒストリーを紹介してもらえますか?僕は色々と調べてみるまで、あなた方が長いキャリアを持っているなんて全然知りませんでした。

Iain Influx「ガキの頃、スコットランドのいくつかのバンドでギターを弾いていたんだ。ALTERNATIVE(CRASS & Corpus Christi Records)、EXALT、SLAUGHTERHOUSE PSYCHOSだね。バンドを結成するっていう明白な考えを持って、兄弟のJohnと組むことにした。これがA.U.K.の始まりというわけさ」

Johnny Punk「THE SEX PISTOLS、THE CLASH、THE DAMNEDなどが生まれ、イギリスのパンク・エクスプロージョンは始まった。俺は「Riot In The City」とか「Loser」、他には思い出せないんだが、こういうタイトルの曲を書き始めたよ。自宅で友達と作った曲を録音して、カーコーディー(スコットランド南東部)にあるパンクの服屋のスピーカー・システムでそれをぶっ放したぜ。そこは俺たちが住んでいたコールタウン・オブ・バルゴニーっていう小さな村の次にデカい町だったよ。店に来た客がそれを聴いて気に入ってくれてね。それで俺は本腰を入れてやってみるかと決心し、THE EXTROVERT'Sって名で、正式にパンク・バンドを始めたよ。地元のユース・クラブで何度かプレイしたな。残念ながら、うまいことはいかなかったけどね。結局、IainとA.U.K.を結成するまでは休息をとっていた。A.U.K.はCRASSの影響下にあるパンク・バンドを作るというはっきりした意図があったね。"do-it-yourself"というパンクの哲学と、アナーキズムの直接的なポリティカル・イデオロギーとを支持していた」

■A.U.K.という名前をつけたのは?

I「長い年月の間にいくつかの意味と結びついていったよ。でもJohnがもっと詳しい説明をしてくれるだろうよ」

J「SEX PISTOLSの衝撃的な"Anarchy In The UK"ってスローガンには、ただただ頷いたよ。だがCRASSが表現していた"ANARCHY"の強いポリティカルなヴィジョンにインスパイアされちまった。もっと後になって、Dave KingがデザインしたCRASSのシンボルをベースにした、新しいA.U.K.のロゴを考えついたんだ。CRASSのロゴは、進化と革命のシンボルであり、教会と国家、異教徒、反キリスト教などの要素を持つ、頭が2つある蛇がデザインされているよな。A.U.K.という言葉、もしくはフレーズは、アルファベット3文字を含んでいる。俺たちは3つの数字を与えられた。

3つの時間区分…過去、現在、そして未来。
3つの物質界…動物、植物、あるいは鉱物。
人間の才能の総計は3部からなる…思考、言語、実行。
ピタゴラスの定理(三平方の定理)の数値=33。
主なるイエス・キリストの亡くなった歳は33。何人かの著者によると、反キリストに処刑されたキリストが復活した年齢でもある。333と示される時、増加は達成される。オカルト信仰者の用いる333は、強烈な不快感をともなう666を隠すための隠れ蓑である。333の2倍が666なのは明白だ。

これと同じように、A.U.K.のシンボルは666を隠しているんだよ。発明術を通して表現されていて、一続きの円ではないが、独立した部分から作られている。外側のカーブは6つの独立した意義を持っているんだ。6つに仕切る各線は、外側のカーブのぎりぎりまで延びていて、仕切られた部分は6つの独立した意義を含んでいる。俺は過去から未来に続いている、歴史、神話、神智学に、猛烈に興味があってね」

■あなた方はバンド形式でスタートしたと思います。しかし、今は2人だけでプレイしていますね。なぜ変化したのですか?理由を教えてください。

J「そう、1897年の頃はね(※1997年のことだろう)。6人編成のバンドをやっていて、OI POLLOIやI.D. PARADEと一緒にプレイしたな。タフな時代だったよ。バンド内じゃ、地元以外でもギグをやるかどうか何度も議論したな。結局、自然の成り行きでバンドをやっていくことに決めたよ。あの頃はそれが最善の策だった。もしあの日に帰ったら、別の

道を選んだろうけどね。Iainと俺は一緒に「The Earth Dies Screaming」って曲をラフなデモ・トラックとしてレコーディングした。これは、THIS TRIBEという名前で発表したよ。この曲はbogus tapes(BOG 01)から出た14バンド収録の『Blast Of Anger』ってコンピレーション・テープに入っている。UK Resistのベネフィットのために作られた」

I「Johnが言ったように、メンバーそれぞれがバンド全体の考え方から成長していき、バンドを維持していくのは難しくなっていったんだ。NEWTOWN GRUNTSなどのバンドをやるようになったメンバーもいれば、消えていったやつもいる。昨年来、ヴォーカルをやっていたMagilと会っているが、あの当時に戻れて嬉しいよ」

■CRASSの影響は大きいですよね。初めてCRASSを聴いた時の印象を教えてもらえますか。僕は13歳くらいのときに「Nagasaki Nightmare」を聴いて、その日は眠れなくなりましたが…。

J「CRASSの影響はデカいなんてものじゃないよ。『The Feeding Of The 5000』に夢中になっちまってね。大げさに言うようだが、いろいろなレベルに俺の心を開いてくれたよ。突然、"ANARCHY IN THE U.K."という言葉が、全く違う意味を持ち始めた。俺はアナーキズムに関する本を探し始め、アナーキストの哲学者たちを勉強したよ。自分の人生に高い意識が芽生えた。Proudhon(プルードン/フランスの社会思想家)、Bakunin(バクーニン/ロシアの革命家・社会思想家)、Kropotkin(クロポトキン/ロシアの政治思想家)、Malatesta(マラテスタ/イタリアのアナーコ・コミュニスト)、Nietzsche(ニーチェ/ドイツの哲学者)、それからイギリスの哲学者、William Godwin(ウィリアム・ゴドウィン/無政府主義の先駆者)の作品。それはアナーキズムの様々なタイプや伝統、理論やアティテュードに対し、目を開かせてくれたね。俺も俺のようなキッズも、それまではそういう体験をしたことがなかった。CRASSのバンドとしての影響について言うなら、それほどは大きくないな。バンドが言っていることややっていること全てに必ずしも同意しているわけじゃない。CRASSは俺に自由な発想を教えてくれた。彼らは"システム"と"個"の両方から政治権力に挑んだ。今でも俺は、Penny Rimbauld(ペニー・リンボー/CRASS)の急進的な記事や発言を見つけ出すことに魅了されっぱなしだよ」

I「ああ、CRASSは何年にも渡って多くの人たちにインスパイアを与えている。CRASSはUKはもちろん、世界の地図にアナーコ・パンク・シーンを刻みつけたよ。俺が初めてCRASSを聴いたのは、シングル「Reality Asylum」だったな。最初は音楽的になかなか夢中になれなかったが、後になってわかり始めたよ。CRASSはあの当時に活動していた他のバンドのような、ありきたりのことはやっていなかった。CRASSは別物だったよ。他のバンドがキャッチーなパンク・チューンで目を引こうとするのに反し、CRASSは自分たちの歌詞に人々の気持ちを引き込もうとしていた。CRASSが発信するインスピレーションはもの凄い速さで現象となっていったよ。音楽のスタイルも歌詞の内容も、とてもじゃないが無視するのは難しかった。彼らは人々を立ち上がらせ、考えさせ、行動させた。もはやパンクは、スパイキー・ヘアーや革ジャンのファッション・パレードなんかじゃない。それは座り込んで黙ったままでいるつもりなんてない新しい世代の若者たちに、変化をもたらすムーヴメントになったのさ」

■子供の頃から今まで聴いてきたバンドやミュージシャンは何ですか?様々な音楽を聴いてきたとは思うのですが。

I「もうずい分長いこと、違うタイプの様々な音楽を聴いてきているが、ずっと変わらず80年代のアナーコ・バンドが大好きだね。個人的には強烈なインスピレーションをTHE MOBから与えてもらったよ。彼らの音楽は決して古びない。ZOUNDSとFLUX OF PINK INDIANSも素晴らしいバンドだよね。良過ぎて、何年もずっと古いデモ・テープをかけているよ。君も素晴らしい作品だと思うだろ。今でも繰り返し聴く度に素晴らしいと感じるよ。FLUX OF PINK INDIANSがギグで「Feeding Of The 5000」をプレイした時はエクセレントだった。彼らは音楽的に突出しているよ。近年、再びライヴをやってくれたのも嬉しいね。
音楽的にはいろいろなものを聴いているよ。スタイルで判断はせずにね。俺たちが手を伸ばすことができるもので、インスピレーションを与えてもらえる限り、どんな音楽も重要だよ。俺は若い頃から、ANTI SECTやAMEBIXやRUDIMENTARY PENI、ANTI SYSTEM、CHAOS UK、DEVIATED INSTINCT、HELLBASTARD、AXEGRINDER、DISORDERなどの音楽を夢中で楽しんでいたな。このページを埋めてしまうくらい、まだまだバンド名をあげることができるけど、今あげたのが最初の頃にインスピレーションを受けたUKのバンドだね」

J「Iainの発言のように、聴いている音楽のタイプはかなり幅広いよ。今はSATYRICONとCRADLE OF FILTHを聴いているよ。それに、AMEBIX(Rob Millerがベース&ヴォーカル)もだ。俺たちの7"シングルに「RISE」という曲があるが、これはAMEBIXを認めている現われさ…感謝してるぜ!(ガキの頃は新作を聴くのが待ちきれなかったな)。あと、KILLING JOKEもそうだね。最高のバンドの一つだよ。このバンドは年月を経るにつれ、さらに素晴らしくなっているように思う。KILLING JOKEのJaz Colemanは凄ぇやつだね。本物の素晴らしい曲を作れるやつだ。
ちょうど俺のCDプレイヤーに入っているのが、ゴス/エレクトロニック・ダークの女王、IMPINT(UKの女性ソロ・ユニット)のSin D'Rellaだ。彼女のCD『The Wisdom Out Of The Wound』は心に強く刻みつけられ、美しい。背筋がゾクゾクするね。
アナーコ・パンクの面では、CRASS、THE MOB、ANTI SECTは聴き続けているよ。もちろん、BURNT CROSS(※A.U.K.とのスプリットCDをリリースしているバンド)は素晴らしいね。やつらはA.U.K.の刺激剤になってるぜ。いつも感謝しているよ。RobとPaul、ありがとよ」

■歌詞を書く際に最も重要視しているのは?

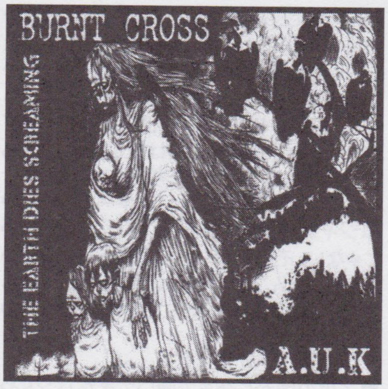
J「最も重要なのはテーマだな。何かにインスパイアされて歌詞を書く場合が多いんだ。時には、実際に起きたことや目を引かれた出来事がアイデアになったり、そこから怒りが生まれたりするよ。それが引き金になって、無我夢中で歌詞を書いたり、もの凄ぇ速さで歌詞が書けることもある。他の場合だと、歌詞を書く主題に対して、より哲学的なアプローチをとり、深く掘り下げていくこともあるな。最近はニュー・シングルもあるし、ちょうど今、新曲を書いているところなんだ。それらの曲はダークなイメージだな。かなり詩的でもあるかな。Peter Bysshe Shelly(※Percy Bysshe Shelleyのことだと思われる。イギリスのロマン派詩人〈1792−1822年〉)やその時代の偉大なる詩人たちによく似た言葉の絵画になっていると思う。H.P. Lovecraft(SF作家)の書く悪夢のシーンでもあり、日本のマンガやAlan Mooreの『V for Vendetta』や『Watchman』の作品に見られるような、ホラーやミステリーやファンタジーとそれほど遠くない。今取り上げているのは、惑星破壊、思想警察、アニキの油断のない目、それから新しい世界体制だね」

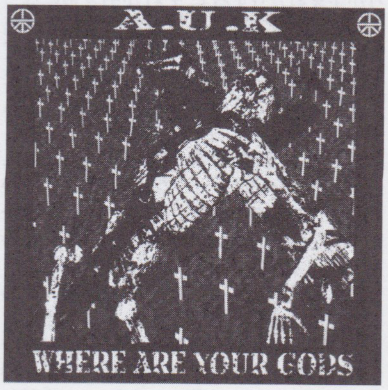
■曲はどのように作りますか?あなた方の曲はダーク・コールド・ウェイヴ・パンクとも言えそうですね。

I「音楽的なことは、人生全てから捜し求めているよ。俺たちのサウンドに様々な要素があるのはそういう理由だと思うよ。人々が楽しむものに対して俺たち自身がバリアをはるべきだとは思っていないが、全員に気に入ってもらう必要もないと思うんだ。全ての人が速くて過激な音楽を楽しんでいるわけではないし、詩的な意味が荒々しいヴォーカルとスクリームの連射に埋もれるのを嫌がる人もいるだろ。たくさんの人たちにインスピレーションを与える曲を作れたら嬉しいし、聴いてくれた人が歌詞をどう捉えてくれているのか考えるのが好きだよ。BURNT CROSSとのスプリットCDや、シングル「Rise」の曲、それから新曲では、これをなかなかうまくやり遂げていると思うな。いつだって俺たちは他の人たちと違っている。俺たちが感じていることはちょうどその時のものであって、音楽的にも歌詞の面でも自分たち自身でバリアをはることはないぜ」

■TADPOLE Recordsからリリースしたのはなぜですか?最初に彼らをどのように知ったのですか。彼らと仕事をしようと決めた理由は?









I「これは全くの偶然なんだよ。最初、Rob(BURNT CROSS)がALTERNATIVEのサイトを通してメールをくれたんだ。俺からはA.U.K.のことは話に出さなかった。Johnは俺たち2人でやっているバンドの短い活動のことや、Johnと俺のTHIS TRIBEってプロジェクトのことも、ただA.U.K.のサイトで情報を知らせればいいと考えていたんだ。Robは俺たちの「The Earth Dies Screaming」という曲のラフ・レコーディングを気に入ってくれていて、今の俺たちの感覚で再レコーディングしたらもっと良くなるだろうと思ってくれてさ。それでやってみたんだよ。Robは俺たちとスプリットCDを作れたら嬉しいというようなことをメールに書いてきたり、匂わせてもいた。俺たちも実現したら素敵だなと思ったよ。A.U.K.としてのリリースもそれまでなかったしね。

Darren(TADPOLE Records)はレーベルをスタートしてからずっと、BURNT CROSSの強力なサポーターだったんだ。他のバンドはもちろん、BURNT CROSSの作品をたくさん出している。Robがスプリットのリリースについて Darrenに話を持ちかけた時、彼は俺たちの曲を聴き、CDにしてリリースするのは良いアイデアだと考え、実際に出してくれたんだ。

スプリットCDの後に、彼はシングルを出してみないか提案してくれたよ。Darrenには心から感謝している。それにRobも俺たちをサポートしてくれた。この偉大な2人がいなかったら、A.U.K.はMyspace以外で曲を発表することはなかったかもしれないね。

シングルにはスプリットCDとは違うサウンドを発見するんじゃないかな。それは俺たちには何の問題もない。同じような古い曲も歌詞も書きまくりたくはないし、2人でレコーディングしていて新鮮味がなくなるなんてのも嫌だしね。俺たちには多種多様な要素があるってところを示していきたい。今はサウンドやスタイルでバンドをラベル付けする人がほとんどだが、これはリスナーが聴くか聴かないかを選択するのに影響していると思うんだよな」

■あなた方にとってA.U.K.とは?活動を続けていくモチベーションは何なのですか?

J「モチベーションはずっと変わらずに同じだよ。不公平、人間性に対する罪、間違った政策、絶え間ない宗教がらみの悪事に対して意見を述べることだ。できれば俺たちの書いた曲を通して、その先のメッセージを受け取ってもらえたらいいね」

I「俺にとってA.U.K.とは表現の方法だな。俺たちが掲げている問題に関して、俺たちがどんなふうに感じているか、他の人たちに知ってもらおうとしている。同時に、音楽も楽しんでもらおうとさ。ただネガティヴでいるのはとても簡単なことだけどさ。そう、人々の意識を高める必要があるとも考えているよ。でも他人からの働きかけも大事だが、それと同時に、個人個人が幸せや自分の人生を生きることも忘れてはいけないよな」

■最近のUKパンク/ハードコア・シーンをどう思いますか?80年代と現在とでは大きな違いはありますか?また、素晴らしいアナーコ・パンク・バンドはいますか?

I「80年代からこれまで長年に渡って、素晴らしいアナーコ・パンク・シーンが存在していると思う。80年代とはバンドもサウンドも変わってはいるが、メッセージは同じだろ?90年代はアナーキズムの旗を掲げ続けたいくつかのバンドや、ACTIVE SLAUGHTERのような80年代のたいまつを燃やし続けるバンドを除けば、衰退に向かっていったような時代だった。当時はシーンにももっと勢いがあったと思うが、めったにバンドは登場しなかった。ACTIVE SLAUGHTERはパンク・バンドという以上にアナーコ・パンク・バンドとしてのほうが突出しているな」

■では、最近のお気に入りバンドを教えてもらえますか?

I「UKのBEGINNING OF AN ENDは本物の素晴らしいバンドだったが、残念ながら解散してしまったよな。全てにおいて尊敬に値するバンドだったよ。本当に残念だ。他には、ブライトンのCONSTANT STATE OF TERRORとBURNT CROSSも素晴らしい。スコットランドのTHE HAPPY SPASTICS、CEASEFIRE、CONSTANT FEARも同様に素晴らしいね。他にはWARCOLLAPSE、WITCH HUNT、SANGRE、BEHIND ENEMY LINESもだ。これじゃ、永遠に名前をあげていくはめになるから、俺が楽しんでいるバンドや名前をあげたいと思うバンドを書き連ねるのはここでやめておくぜ」

J「SATYRICON、CRADLE OF FILTH、RAMMSTEIN、JOACHIM WITT、KILLING JOKE、AMEBIX、EXPLOITED、DISCHARGE、IMPRINT、Lady Ga Gaだな。よう、いつまでだって続けられるぜ」

■UKの政治に対しては何か考えはありますか?

J「民主主義!まさにひどいジョークだ。こんなものは存在しない。俺たちは時の権力者によって、絶えずだまされているんだ。密かに見張られ、ひどい扱いを受け、全てのチャンスに唾を吐かれる始末さ。檻に入れた動物のように支配し、巨大資本の企業はあらゆる場面で俺たちをあざむき、残忍な銀行家に食ってかかることもさせない。君も知っているように、政府が銀行を救済する唯一の理由は、自分のケツを守りたいからさ。国民を救済するなんて微塵も考えちゃいない。1人1人が自分のために立ち上がらなければならないんだ!」

I「宗教!一番怒りが込み上げてくるのは宗教だ。宗教を理由に他の人間の首を力ずくで押さえつけようとするだろ?自分たちの必要性や要求に合うように宗教の信仰のシステムをねじまげ、正当化しちまう。宗教とは神話を通して神を畏れることだ。

お前の神はどこにいる?ヒロシマとナガサキに原爆が落とされた時、神はどこにもいなかった。ユダヤ人がナチ政権に大量虐殺され、苦痛を与えられていても、防いでくれる神はいなかった。宗教は信仰のシステムが持つ本来のもの以上に、この世界では戦争と暴力を作り出す。全ての人間には自分

が正しいと思うものを信じる権利があるが、神は困難に突き当たった時に手を差しのべてくれる、なんてことは俺に言わないでくれ。救済の時はいつまでたってもやってこない。その時計はもう長いことカチカチなり続けているだけさ。宗教は憎しみの炎を燃やすガソリンだ」

■パンク/ハードコア・シーンにおける、DIY、動物の権利、フェミニズムなどのアイデアについてはどう思いますか?

I「これらは全て重要な問題だし、ポジティヴで建設的な方法で扱われるべきだと思う。誰もが議論し合うべきだし、同じステージに立つのが当然の男性と女性の間にある不公平を人々に気づかせるべきだ。なぜ男性が支配する社会は、レイプ、暴力、出産問題に対し、女性の権利を考慮しない評決が通るんだ?男性でも女性でもみんなが平等だ。
俺は動物の苦しみについても非常に強く感じているし、長い時間をかけて技術的な進歩を得てきた男性/女性が、動物にひどい苦痛を与える代わりに、肉の代用品や合成の製品を考えつかないのはどうしてなのか、まるでわからない」

J「動物に対する実験は、ぞっとするほど忌まわしいものだ。PETAやBUAV、THE ALFのような団体や他の動物の権利を守る団体は、みんながサポートする価値があると思う。「Cosmetic Killers」という曲は動物の権利をテーマに書いたが、この極悪非道な犯罪に注目してもらうためにYouTubeで映像を流したよ。
女性の権利の確立も本質的なものだ。誰もが平等であるべきだと俺は考えているよ。歴史を通して女性は、世界中どの国でも大きな不公平に苦しんできた。それはストップしなければならない!アナーコ・パンク・バンドに関しては、Vi Subversa、そして彼女のバンドであるPOISON GIRLS、フェミニズムの精神性を持ったRUBELLA BALLET、X-RAY SPEX、BIKINI KILLのようなバンド、そういうバンドはガールズ・パンク・ムーヴメントの中にいたよな。
DIYについては、DIYや小さなインディペンデント・レーベルは、アナーコ・パンク・バンドにとって核となる中心であり、それはパンクの理想だね。今は手ごろなコンピューターをベースにしたレコーディング・スタジオの時代だよな。言わせてもらえるなら、自分たちの曲をレコーディングするチャンスだし、YouTubeで流すこともできる。Myspaceやインターネットの世界でもあるしね。自分の時間を注いでいる素晴らしい人たち、君のようにファンジンを発行したり、TADPOLE RecordsのDarrenのような人物や、ショーを企画するなど世界中で活動している個人やグループ、全てが途切れずに続いていく。君たちみんなに俺は刺激を受けまくっているよ!」

■日本のバンドやカルチャーについては何か知っていますか?

I「ああ、好きな日本のバンドがいくつかあるよ。ACROSTIXとLIFEは良いバンドだね。日本で発売されたAMEBIXのトリビュート・アルバムをとことん楽しんでいるぜ。S.O.BとWARHEADのようなバンドにも夢中だ。PARASITEは新たな音楽的発見をもたらしてくれたバンドの一つで、彼らをリリースしたTADPOLE Recordsには感謝だ。このバンドは大好きだし、かなり売れているようだよね。
カルチャーに関しては、秋田犬とピカチュー(訳すとピカピカ光るネズミになると思うんだ)を通して知ったのが唯一のことなんだよな。日本の秋田が高く評価されているのは俺は知らなかったんだけど、ハチ公や飼い主である大学教授のウエノ(上野英三郎)、渋谷駅にある銅像についても読んでみたよ。ハチ公って名前がついた理由は、8番目に生まれたことに関係しているという詳細が記されていた。俺はハチ公が3月8日に生まれたというのが名前の由来じゃないかと信じているんだけどね(※3月8日はハチ公の命日。Iainは誤解している気がする…)」

J「PARASITEだね。TADPOLE Recordsからリリースしているね。THE PLASTICS、DEFECTOR、CONFUSEのような昔のバンドも好きなんだよ。今は大阪のGALMETというデスメタル・バンドを気に入っている。彼女たちの1stミニ・アルバム『Love Met』は素晴らしいね。Mikkiのヴォーカルは見事だよ。それからRyuichi Sakamotoのファンでもあるんだ。ブリティッシュ・ポップ/ロック・バンドのJAPANと共演したコンサートを見たことがあるよ。David Sylvianのソロ・プロジェクトとも一緒に作品を作っているよな。もちろんYMO(THE YELLOW MAGIC ORCHESTRA)もね。
まさに日本のカルチャーにメロメロだよ。日本の建築物やピースフル・ガーデン。それから、君の国の豊かで活気のある映画もさ。純粋に楽しんで見ているぜ!
日本のファッションはとても目を引くね。コスプレ、ゴシック・ロリータ、あるいはEGL(エレガント・ゴシック・ロリータ)、インダストリアル、パンク、伝統的なファッションにもそそっているしな。悪いな、野郎ども。でも世界の中でも日本の女性の美しさはトップクラスだぜ…まあ、まあ、このへんで次の質問にいっとこうか!」

■じゃあ、これからの予定や目標を教えてください。

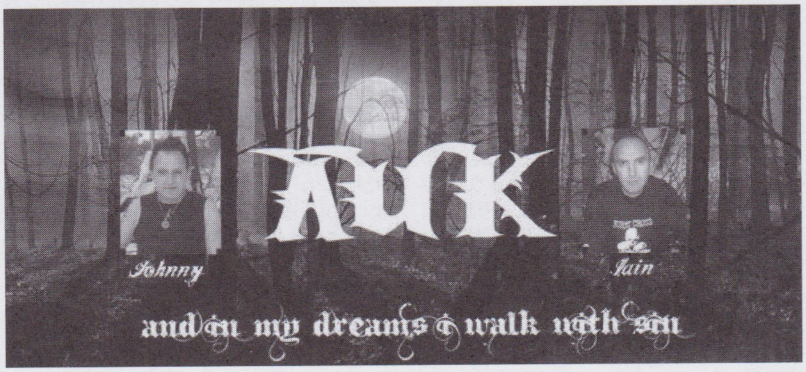
I「今、新しい作品を作っているところだよ。あらゆる点でどこかで聴いたことのあるものとは別の作品になったら素晴らしいだろうね。新しい発想に基づいたアルバムを作ることが、俺たちの今の目標だと思う。でも人々が俺たちの音楽をどれくらい楽しんでくれるかにもよるけど。みんなが俺たちのスタイルに夢中になってくれたら、手にとってもらえるんじゃないかな」

J「今はとても前向きな気持ちを感じているよ。家庭を壊してしまい、これからの人生をかなり孤独に生きていくことになるが、新居も見つかり、悲しみもいくらか薄れつつある。だから今がまさに、新しい曲を作り、A.U.K.が再び転がりだすその時ってことさ。シングルの「Rise/Where Are Your Gods」は表現したかったテイストだな。俺たちのサウンドはメタルとパンクをミックスした真ん中あたりにあるだろう。いくつか書いている曲もあるし、今俺はヴォーカルもやっている。歌詞の修正も終えたところだよ」

■日本に住む読者のみんなにメッセージをお願いします。どうもありがとう!

I「A.U.K.を聴いてくれている日本に住むみんなにお礼を言いたい。また、サイトに嬉しいメッセージをくれたり、サポートしてくれている人たちにもだ。俺たちは日本に住むみんなにとっては比較的新しいバンドだと思うから、俺たちの音楽に対する反応を聞けたら嬉しいな。Kenjiにも感謝したい。ジンにインタヴューを掲載したいと連絡をくれてありがとう。このインタヴューが俺たちの音楽を聴いてくれている人たちにインスパイアを与えることになったらと望んでいる。そして、まだ聴いたことのないみんなにも聴いてもらえることをね」

J「BURNT CROSSとのスプリットCD『The Earth Dies Screaming』やニュー7"シングル『Rise/Where Are Your Gods』を聴いたり、買ってくれたりしたみんなに、心から感謝したいぜ。ダウンロードしたやつにもな!YouTubeでも映像がチェックできるし、ウェブ・ページ(www.myspace.com/aukofficialbandsite)も訪れてみてくれ。それから、Kenji!インタヴューに誘ってくれて本当に感謝しているよ…。ギター&ヴォーカル同士の2人組が、最高のプレイをしていくぜ」





前号に引き続き『DRUNK NACH OSTEN』ジンからの転載で、バルト三国のラトビア、そのシーン・レポート後編をお送りします。ラトビアのパンク/ハードコアに精通、もしくは興味のある人が日本に一体何人いるのか不明ですが、馴染みがあろうとなかろうと(あっちからしたら、日本てどこ?中国の一部?という感じかも)、パンク/ハードコアに情熱を傾けている人間が、日本から遠く離れたラトビアにもいる。そして"パンク/ハードコア"というこのたった1つの共通項のみで、繋がることが可能だというのが素敵だなー。というわけで、お楽しみ頂ければ幸いです。

クルディガのアンダーグラウンドについても記していこう。

クルディガ(ラトビア西部の都市)

リガからクルディガ行きのバスに乗った。あてがないわけでもなかった。この小さな街の音楽的な動きをさらに知りたい、Tornis recordsのJanisにそんな話をしたとき、彼は即座にZABADAKSカルチャー・センターのEdgarsに直接電話をかけてくれて、会えるように手配してくれた。何もかも本当に感謝だ。

クルディガではとても温かい歓迎を受けた。夜はバーで熱いお茶を飲みながら親しくおしゃべりした。昔のレコードを聴いたり、地元のショーや90年代初期のフェスのビデオ・テープを見たりも。

クルディガはとても小さな街だが、90年代初期からたくさんのアンダーグラウンド/パンク・バンドを生んでいる。バンドは多種多様だったが、地元のサウンドと強く結びついていた。それがハードコア・バンドのサウンドに強烈な魅力を与えたんじゃないかと思う(少なくとも僕にとっては)…猛烈なスピードで加速していく、他にはないようなサウンドだった。

この街のシーンの発展はNEKACオーガニゼーションの発達と関係が深い。彼らは自身のウェブサイトにこう記している。"〈クルディガのシーン〉とは、個々のそれぞれの活動のかたちを支えている、この小さな田舎町のアンダーグラウンド・カルチャーと結びついた全ての活動を意味している"と。NEKACの創立者たちは、80年代後期から地元のシーンで活動していた人たちだった。当時、楽器の弾き方を学ぼうと熱心に活動する2人の若者がいた。2人は自分たちで楽器を買い、機材を作ってみたりもした。練習場所を探し、真剣なプロジェクトやバンドを数多く生み出していく。時が経ち、さらに多くの人たちが彼らの活動に加わっていった。その中にはちっぽけな地元のシーンを発展させる力になる者も育っていった。バンドをやるだけじゃなく、ファンジンを出したり、ショーを企画したり、シーンの発達につながる様々な活動を行う者たちが。これらのコンサートの中には、ラトビア国内や国外のバンドがたくさん出演するフェスティバルに発展していったものもある。

これらの全てがアパートメントの部屋や練習室で生み出されたものだが、様々な理由で場所はひんぱんに変わっていった。電気が使えて屋根があるところなら場所はどこでも関係なかった。

アパートメント、保育園、ボイラー室、地下室、開拓者の家、病院の門衛詰め所、川岸に建つ放置された家、工場の物置、ガレージ…。こういう場所は地元のシーンの発展に重要な役割を果たした。特にショーの企画は、積極的に活動する地元の若者にやる気を起こさせた。自分たちでバンドを始め(その中の多くが、今でも活動している)、それによってクルディガは、ラトビアのアンダーグラウンド・シーンにとって重要な場所になっていった。

クルディガのシーンを深く知りたい方はwww.nekac.lvを見てくれ。地元のカルチャー・センターZABADAKSの情報に関しては追い追い紹介していくつもりでいる。このシーンの音楽状況を知るのにもってこいのコンピレーション・テープもあげておこう。
『Kuldiga Underground Compilation 1989－1994』
『Kuldiga Compilation 1994－2002』

クルディガのシーンの存在と成長は、多くの人々のサポートや協力なくしては不可能

だった。たくさんのボランティアの助けもあったが、その他にも地元の議会やオーガナイザーなどからの協力に感謝することで、さらに良い方へと向かっていく。DIYの活動をしているのは事実だが、資金の援助や町議会の協力もあり"対立"ではなくむしろ"協力"の構図だったように思う。
地元シーンの重要バンドを紹介したい。



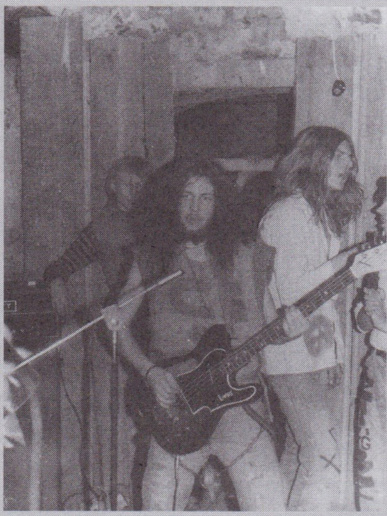
N.D.A.(Nac Dilonit Apsedies)。後の**DILŐNIS**。初のDIYバンドであり、あるときを境にバンド名を短くした。バンドを作ったMarisとEdzhsの2人は近所に住んでいたらしい。初めのうちはアコースティック・ギターで練習をしていた。最初の作品は『Istabas balss』。後にドラムを入れ、保育園のボイラー室で練習を重ねていく。1991年からは病院の門衛詰め所に連練習場所を移し、メンバーはそこで警備員として働いた。
初のショーはIecava(リガの南方40㎞あたり)で開催された"New Rock Musicians"フェスティバル。共演したバンドにはINOKENTIJS MĀRPLSやIR BIJUSI MATI UN IZBIJUSIも名を連ねている。この時代のN.D.A.の忘れられないショーといえば、他のラトビアのバンドと敢行した、リトアニアでのショーだろう。9月1日に開催されたディスコでの学生パーティーに出演したり、Zvigzdu湖で行われたクリスチャンの子供たちのキャンプで演奏したりと、面白いイヴェントに登場している。

音源:
N.D.A.
『Istabas balss』〈1990年〉COOPER STR.
『Tāpēc, ka es uzskrēju』〈1991年〉Tornis records
『Gott mit uns』〈1992年〉ROOTED RAT
DILŐNIS
(強烈なスピードのハードコア/パンク・ロック)
『Beidzam!』(unofficial demo)〈1992年〉Tornis records
『We Love Ewa Braun』〈1992年〉Tornis records
『DRAP』〈1993年〉Tornis records
『Krismas Taim』〈1993年〉FAZĀNS
『Simplementer Fuzz』〈1994年〉PRIEDE/Ö prod
＊国外の様々なコンピレーションにも多数、参加している。

VIHERS(1992－1994)－パンク
1992年にVONS地区で始動。N.D.A.やSPINEと同じ練習場所を使っていたが、そこは"酔っ払いのたまり場"のようなスクワットだった。ラインナップは、Sviests(ヴォーカル/歌詞担当)、Struhs(ベース、バック・ヴォーカル)、Pluto(ギター)、Miskins(ドラム)から成る。ショーは4回やっているが、酔っ払いバンドの役割を地でいくようなステージだった。フロントマンのSviestsの死後、バンドは活動停止。
ライヴ:
〈1992年〉Zviegzdu湖のキャンプ/〈1992年〉Kocis 2/〈1993年〉Mētelītis/〈1993年〉Širmis
音源:
『NETAISIES VIHERS』〈1992年〉Rotten Rat
『VIHERS』〈1992年〉(Netaisies Vihers＋live Kocis 2)

ČAPAJEVS VAGONS(1994－1996)－パンク/ハードコア
1984年の春にDILŐNISが解散した後、ベーシストだったMuitnieksは新しいバンドを作る決意を固める。古くからの友達のPeksをヴォーカルに誘い、Jānis Mūrnieks(ANALIZATORSのギター)をドラムに、Kaspars Šulcsをベースに迎えた。ここでMuitnieksはギターを担当。このラインナップで初のショーをVONSで行う。
彼らはVONOSONOLOPPUSやINOKENTIJS MĀRPLS、SHITHEADS(エストニアのバンド)らと共に、エストニアのパルヌで頻繁に演奏している。しかし、リガのNEXTでやった3回目のショーの後にドラムのJānisが脱退し、Klusais(VONOSONOLOPPUS)がドラムで加入。このラインナップで13曲入りのテープEPをレコーディングする。 彼らのサウンドはミッド・テンポのパンク/ハードコア。しかし、ベースのKasparsがリガで勉学に専念し始め、ドラムのKlusaisがプレイを楽しめなくなると、1996年、ČAPAJEVS VAGONSは解散の道を選ぶ。
音源:









『Live! At Vōns Prez』〈1994年〉7曲収録のカセット/Ō prod
『Vīrietis ar dīvānu』〈1995年〉20分。デモ/De La Muitnieks Tapes
『Odekolons』−『Eau de cologne』〈1995年〉1曲参加。V.A.
『No Pain XII』〈1996年〉コンピレーション・テープ。7曲収録(ライヴ+スタジオ)/No Pain HQ
『Odekolons 95』〈1996年〉1曲参加。V.A.

VONOSONOLOPPUS(1994−1998)−スピードの速い独特なハードコア

EdzhsとStruhsが中心となり1994年の秋にスタート。このバンドのスタイルを表現するのは本当に難しい。あの当時のラトビアのハードコアの中にあっては、強烈な個性を持つ規格外のバンドで、自分たちを"ヘンプコア"と称していた。猛烈な速度、3人のヴォーカル、奇天烈なサウンドが際立っていた。1994年の終盤までにエストニアの1回も含め、ショーは4度経験。11月にファースト・デモ『Puskach』をレコーディングし、Ō prodからリリースする。1995年の頭にショーを2回行っているが、その夏はVONS地区の電力不足のために練習にも限界が生じてしまう。秋に練習を再開し、新しい計画を立て直して、『Emeridos suburbia』というタイトルの作品をレコーディング。レコーディングの間、部屋の温度はなんと、マイナス16℃だった。

その頃、ラトビアのアンダーグラウンド初のヴィニール作品がリリースされる。フランスのレーベルDARBOUKAが出したVONOSONOLOPPUSと33−LETNY PODONOKのスプリット7"がそれだ。しかしこのレコードはリリースまでに長い期間がかかったし、アートワークもバンドの雰囲気には似合わないものだった。ちなみにこの当時、リガのMAD MIXカフェが人気のライヴ・スポットとして注目されている。

スプリットを出したVONOSONOLOPPUSと33−LETNY PODONOKだが、33−LETNY PODONOKは解散し、VONOSONOLOPPUSのほうはギターのKoneが4 ZASUSHENNIH GAMBURGERAというレゲエをプレイする新しいバンドを始める。残ったVONOSONOLOPPUSのメンバーはアコースティック・セットでやっていくことを決意。2週間のリハーサルを経て、新しいサウンドと昔の曲をうまくアレンジしたステージを披露し、観客の度肝を抜いた。

VONOSONOLOPPUSは新しいサウンドを貫き、誕生パーティーや結婚式で演奏し成功を収める。そうしている中、MAD MIXカフェで行った2回のショーをレコーディング、後にCD化し『Nunca Sue』というタイトルでリリースする。彼らのラスト・ショーは1997年と1998年の『Odekolons』コンピレーションに収められている。

音源:
『Puskach』〈1994年〉デモ・テープ。15分/Ō prod
『Emeridos suburbia』〈1995年〉デモ・テープ。15分/Ō prod
『VONOSONOLOPPUS/33−LETNY PODONOK "LETNIJ PODONOK"』〈1995年〉スプリット7"/DARBOUKA REC.(フランス)
『VONOSONOLOPPUS/ 4 ZASUSHENNIH GAMBURGERA』〈1996年〉スプリット・テープ。60分/Ō prod
『VONOSONOLOPPUS live in MAD MIX』〈2002年〉CD/NEKACディストリビューション
*他にも様々な国外のコンピレーションにも参加している。

最後にクルディガで活動する最近のバンドも紹介しておこう。前述したバンドのメンバーや地元のシーンで積極的に動いている人たちが結成したバンドだ。

GRUPA VILNIS−ジャズ/パンク/ポスト・ハードコア

1999年に自然発生的に生まれたバンド。GRUPA VILNISの始まりは、終焉に突入したVONOSONOLOPPUSのリハーサルの最中に作られた作品にある。これは後に『Kas nekaiš grupā vilnī būt』(1999年)とタイトルされリリースされる。この時のラインナップは、Struhs(ギター)、Klusais(ベース)、Edzh(ドラム)。



2001年8月18日にリガを拠点とする2バンドで、DIYハウスのZABADAKSでショーを企画する。が、会場に来られないメンバーがいたせいで、Kaki(ドラム)とEdzh(ベース)の2人で即興演奏することになってしまった。しかし、その演奏が観客にGRUPA VILNISの存在を知らしめることになり、ここからバンドの歴史がスタートすることになる。

2001年の秋、EdzhとKakiの2人は本格的に練習に取り組み始める。2001年12月31日にZABADAKSで催されたカーニバルへの出演が、彼らの正式な初のショーとなった。2004年までこのアンビエントなパンク的ドラムンベース・デュオは、DIYの野外フェス"TABUNS"やリトアニアのヴィリニュスにあるGreen Clubなどへの出演も含め、数々の会場で演奏している。半年間ほど休止していたこともあったが、2人は組んだまま、ショーを企画したり、時たまジャムったりしていた。

2006年には『Kas nekaiš grupā vilnī būt』の録音にも参加したStruhs(ex-VONOSO NOLOPPUS)がギターで加入。GRUPA VILNISは3ピースとして新たな時代を迎えることになった。彼らは2007年と2008年にスロバキアのブラティスラバにあるガレージで演奏している。どちらも素晴らしいイヴェントだった。

彼らはこう述べている。"俺たちは常に主張してきた。音楽はビジネスなんかじゃねぇ。一番大事なのはプレイヤーと観客、リスナーとの間で湧きあがる、音楽のバイヴと感情だ"。

言っておかなければならないことがある。GRUPA VILNISの存在はクルディガにあるDIYカルチャー・スペース、ZABADAKSと



の密接な結びつきが不可欠だ。ZABADAKSという奇天烈な名前は80年代のドイツのバンド、SARAGOSSA BANDの曲からいただいたらしい。

ZABADAKSの所在地：
Vijolišu 24, Kuldiga, LV－3300, Latvia
Eメール：zabadaks@gmail.com.

ショーをやるには素晴らしい会場だ。この地域で演奏したいと思っているバンドなら、連絡をとってみるといいと思う。

前にも少し紹介したが、NEKACオーガニゼーションについても書いておきたい。ここは元々、半分倒壊した建物だった。向こう30年間、街から借り受けている。将来の目的を成し遂げるために、建物の改築を目指し、地元のシーンの人間たちの手によって改修されてきた。長い時間かかって屋内外の環境を整え、見違えるほど立派に改築されてきている。2001年までは、入り口で入場料を出してもらったり、寄付や会費などを募って、修理のための資金を集めていたようだ。

2001年、NEKACオーガニゼーションは仲間と共に、Queen Julian Foundationのプロジェクトを提案する。プロジェクトの目的は、カルチャーをサポートし、若者の社会的な交流の場を作ることだったらしい。そのためには何枚も書類を用意するような面倒なこともあったが、彼らの目的を少しでも前へ進める助けとなる資金を獲得できたらしい。NEKACは会場の改修を続け、様々なプロジェクトも立ち上げ続けている。2年前に僕がそこを訪れたときは、ほとんど改築は終わっているように見えた。バー、ライヴのスペース、練習スタジオが備わり、ワークショップやプロジェクト、ライヴなどの運営も勢力的に進めていた。ここは絶対に訪ねていく価値がある。

クルディガでは"TABUNS"という野外フェスティバルが2回ほど開催されたことがある。1年目は2002年に行われ、バンド以外にも、アーティストのパフォーマンスやDJ、エキシビション、スポーツ活動、子供達の活動など盛り込まれた総合的なフェスとなった。フェスの主旨はオルタナティヴなカルチャーの強さを紹介すること、自分自身でやることから生まれる可能性を示すこと、それをメディアとは関係せず独立した動きで行い、人々の意欲を駆り立てること、のようだ。しかし、フェスティバルが最初に掲げていた主旨は、アルコールにまみれ、ティーンネイジャーがやりたい放題に無茶苦茶やるフェスへと変貌してしまう。結局、このフェスは終わってしまった。

地元シーンの発展に大きな役割を果たしている、２つの重要なディストリビューションのことも忘れちゃいけない。

O PRODUKCIA

Edgars Embers（Edghzsとしてのほうが知られているかな）が運営…90年代初期からとにかく勢力的に活動している人で、地元のバンドでもプレイしている。最近ではGRUPA VILNISでベースを担当。

Ō PRODUKCIJA/MAKGAIVERA SERVISS
（音源&ディストリビューション　1993-2002）
『SONS OF A BITCH－２』…ラトビアのコンピレーション・テープ。
DILŌNIS『Simplemente Fuzz』/PRIEDE REC.リリース。
DILŌNIS『Krismas Taim 1993』/FAZĀNS REC.リリース。
『VONS PRESENTATION LIVE』…3バンド収録。テープ。
VONOSONOLOPPUS『Puskach』…テープ。
VONOSONOLOPPUS『Emeridos Su Burbia』…テープ。
『PEACEDIES DEATHSUCKS 1,2,3』…世界各国のDIYハードコア/パンク・コンピレーション・テープ。
『SAMTREST』…旧ソビエト連邦のバンドを収録したコンピレーション・テープ。
VONOSONOLOPPUS『Nunca Sue, Live 1996』…CD。
『KULDIGA COMPILATION 1994-2002』…テープ。

DE LA MUITNIEKS TAPES

（音源＆ディストリビューション）

Maris Muitnieksが運営。ある時期まで勢力的に活動しており、面白いコンピレーション・テープをリリースしていた。

DLM 001　『THREE YEARS OLD CHILD COMP.』…テープ。
DLM 002　『KULDĪGAS IZLASE 1989-1994』…テープ。
DLM 003　ČAPAJEVS VAGONS『Vīrietis ar Dīvānu』〈1995〉…カセット/PRIEDE REC.リリース。
DLM 004　『ANNA VANNĀ KĀPĒC』〈198?〉…テープ。ブートレグ。
DLM 005　ZVAIGŽŅU BALSIS『Live at Vons 5, oct. 96.』…テープ。
DLM 006　RIBAMEČ SVOLOČ OBIKNOVENNAJA＋ALAHADUPAKS…スプリット・テープ。
DLM 007　D.U.R.A.K.〈1997〉…テープ/PRIEDE REC.リリース。
DLM 008　『SABRAUKTĀ MANOJĒZE－Live Comp』〈1997〉…テープ。
DLM 009　FORCA MACABRA＋WIND OF PAIN（Live 97）…スプリット・テープ。
DLM 010　『TRATTRATRATARAT vol.1』…4wayテープ。
DLM 011　『TRATTRATRATARAT vol.2』…4wayテープ。
DLM 012　『TRATTRATRATARAT vol.3』…4wayテープ。

また、重要なジンも扱っている。
『WILKS』（O PRODUKCIA発行）。
『SOS IN BIG』（MUITNIEKS発行）。
『TRATTRATRATARAT』（MUITNIEKS発行）。この1～4号はラトビア語でラトビア・シーンのレポートを掲載。5号目はラトビア語、ロシア語、英語の３カ国語で書かれている。
『RIO RAIO』（NEKAC発行。ラトビア語）。

ラトビアのバルミエラ市にも活発なローカル・シーンが存在した。ここにオーストラリア人のSimon Butcherという人物が住んでいた。彼はディストロを運営するだけでなく、ショーの企画やバンドをやったり、自分のレーベル、Beard Is Weirdからラトビアのバンドを収録した３枚のコンピレーションもリリースしている。

音源：
V.A.『PEASANTS WITH PITCHFORKS』〈1995年〉…LP/Beard Is Weird。
V.A.『LET THEM EAT BUTTERFLIES』〈1998年〉…7"/Beard Is Weird。
V.A.『WEIRD SYSTEM』〈1999年〉…7"/Beard Is Weird。

この地方では地元のハードコア・バンドの中でも古株の１つ、NON-SKIDが活動していた。他にはファストなハードコアのD.O.D.（DANGER OF DEATH）。そして、NYHCに影響を受けた個性の強いハードコア・バンドのSAUMIGIE RUKISI。このバンドは猛烈なスピードと荒れ狂ったサウンドが特徴だ。Simon Butcherともプレイしたことがあるらしい。ファストなパンク/オルタナティヴなハードコア・バンドのHUGO（クルディガのバンド）ともスプリット・テープを出しており、これがまた素晴らしい。

僕が書けることは以上だ。ラトビアの全てを網羅できてもいないし、僕は全部を知っていたわけでもなかった。特に最近のバンドに関しては抜けてしまっている。もっとラトビアの昔のことや僕の受けた印象などにもついて書いてみたかったが、ラトビア・シーンの今の状況（もっとハードでエクストリームなジャンルの現状）を手に入れることができたなら、またみんなに伝えたいと思っている。時間と興味をこの原稿に傾けてくれて本当にありがとう。　TEXT:Miso

ヘイ　ガールズ、ヘイ　ボーイズ
髪をモヒカンにしろ
ヘイ　ガールズ、ヘイ　ボーイズ
汚れたコートで着飾れ
ジーンズを引き裂け
ヘイ　ガールズ、ヘイ　ボーイズ
汚い言葉を使うんだ

33-LETNY PODONOK/33 YEAR OLD VAGABOND『Dedicated to 77』から



OPEC (O) x SAKATARUIDE (SR)



サカタルイードの「とびっきり対談・モテる男子は血まみれ編」

当たり前のハナシだが自分にとって自分は特別なワケです。誰しもがそうあるべきなのです。今回のゲストはCIDER77のヴォーカル、OPEC氏です。「特別」なボクを持ってしてもこのヒトは「特殊」です(笑)。…構わんぜ!「本気」と書いて『ポンゲ』で行くぜ!浜松902のオゼキ大統領(Ba)引き連れ、静岡県民には信じがたい「雪の残るサービスエリア」を抜け、日本一HOTな(それは昔のウッディか?アサリさんお世話になってます)パンク・ロック・シーンの新潟へ。読者諸君…何色に見える?!

SR「えっと、じゃあ…今回何て呼ぼうかな?『船長』?『師匠』?やっぱ普通に『オペックさん』か(笑)」

O「『オペック』でいいよ。何で?」

SR「いや、読者に『生意気なヤツ』って思われたく無いから(笑)」

O「バレてるよ、み～んな知ってるって(笑)」

SR「んじゃ『オペックさん』ね(笑)。小さい頃はどんな子供だったですか?」

O「おぅ、野球少年だったね～。小、中学生ね」

SR「…ツッパリですか(笑)?」

O「ツッパリでしたネ～(笑)。『横浜銀蝿』とかね」

SR「あ、そっか～」

O「やっぱほら、先輩なんかがね、アナーキーとか好きだったからさ。中学んトキだね」

SR「元々この辺のヒト?」

O「うん。ず～っと新潟」

SR「町っ子なの?」

O「町っ子だね(笑)」

SR「バンドってさ、そ～いう音楽で、最初に自分で意識して聴いたのって何?」

O「あ～…何だろな～…パンクで言ったらラフィンノーズかなぁ」

SR「それは『先輩の影響』とかで?」

O「つ～か、一番最初に演ったのがラフィンノーズのコピー・バンドだったんだ。周りにはボウイとか演ってるヒトも居てね～。オレもそうなりたかったんだけどさ!まさか…パンクになっちゃってさ(笑)」

SR「(笑)!他に聴いたの、何?」

O「…他に…は…ね～」

SR「そっから直ぐオリジナル演ったの?ラフィンの他にコピーは?」

O「…ケンヂ(アンド・ザ・トリップス)とか…モブスとかも演ったしねぇ」

SR「んで一番最初のちゃんとしたバンドはラスティック(トップドッグス)?」

O「ん?『OPEC』!」

SR「え!そうなの(笑)?それでオペックさんは『オペック』なの?!」

O「そ～なんだよ」

SR「…良かった、今回対談して」

O「アッハッハ、そう(笑)?」

SR「うん。今更ながら聞けんくて困ってた(笑)。言ったらパイン(ブロウバック)とかに馬鹿にされそうで(笑)。んでラスティックやって?」

O「そんでね～…半年くらい一番最初のラスティックやって…またオレひとりになってさ」

SR「そうなの?『やめた』ってコト?」

O「ん、まあ…仲悪くなったんだろうね。…それからバンド組み直して、ブラインドアレイズっていうのを。…ん～で、またラスティックやって…そっからサイダー77か」

SR「うんうん。ラスティックの頃さ、対バンしてたバンドは…どの辺?」

O「やっぱそれは『バーニングスピリッツ』とかさ、ZONE、ラスラー…あとスウィンドルビッチもあったしさ。…とにかくオレ始めた頃ね、新潟って…シーンがあんま無かったんだよね」

SR「AGEのヒト達は?シーンとしてずっと近くには居たの?」

O「うん…アサリちゃんとは彼がHAKUCHIやってた頃から一緒でね、彼らはまた独自のやり方だし。最近スゴく仲がイイんだけど…。オレはやっぱりAGEとかブロウバックとか認めてるからさ」

SR「うん。ツアーとか行ってさ、『スゲぇな!』って思ったトコロ、ある?」

O「最初はさ、静岡ってやっぱスゴくて。あんな街にしたいな～、って」

SR「モヒカンだらけの?」

O「そ～そ～。行くのは好きだけど、プレッシャーは…あるよね」

SR「今サイダーでさ『この土地は好きだな～』とか『やたら盛り上がるな～』ってトコは?」

O「…あんまり、でも…区別は無いけど…。言い訳出来ねぇじゃん?そ～いうのは気をつけてる…」

SR「例えば大阪と東京だとさ、同じようにお客さん入っても雰囲気ぜんぜん違うじゃん?」

O「だけど…やっぱり…ドコ行っても…自分らがやるコト、だしさ。オレはオレのチカラでしか…出来ないし…何つ～か、なぁ」

SR「じゃあさ、他の土地で、『このバンド初めて見たけどスゲぇな!』と思ったのとかある?」

O「あ～…そりゃ～…みんなそうだね～」

SR「(笑)!それじゃ困るんだよな～オペックさん(笑)!その名前を教えてほしいのっ!」

O「アッハッハ(←ひきつっている)、そうかそうか(笑)。だったら～…会津かな?」

SR「『会津』?」

O「そう。『会津若松』福島!」

SR「誰がいるの?」

O「己是、か。一生懸命だしな!距離的にも(新潟から)近いしね～」

SR「イイね～。…オペックさん、最近ど～いう音楽聴いてますか?」

O「あ～…何だろう…最近……(苦笑)。」

SR「(笑)!聴かないの?」

O「う～…ん、あんまり変わってないんだよね、ローテーションがね…」

SR「それは何?」

O「…ん、やっぱり～……」

SR「ハードコア?」

O「…ハードコア…だよ、な～(苦笑)」

SR「何か言ってくんなきゃ(笑)!」

O「くっふっふ(笑)」

SR「例えば?」

O「例えば…『セルナンバー８』とかね」

SR「ホントに?」

O「ん～…。今の、あんまり…聴かないんだよ…ね～」

SR「あぁ(汗)。オペックさん、普段は何してますか?」

O「ん?酒のんでるよ!」

SR「ハハハハハ!酒のんで?スタジオ入って?」

O「ん～。酒のんで、恋をして(笑)!」

SR「お?!来た。オペックさん失恋したん?」

O「おぅ。…新しい恋をね…そろそろ始めようかと思って」

SR「居るの?『目ぼしい娘』」

O「(親指を立てて今日イチのカッコいいカオ!)サカタがさ～…前に言ってた通りだよ、オレも。『恋をして、カッコつけて、バンドやって』…」

SR「まぁオレと違うのは『常に酒のんでる』トコロだよね(笑)」

O「そ～だな!アッハッハ(笑)!」

SR「オペックさんはさ『もっとこうなりたい』みたいな願望…理想?あんの?」

O「う～ん…『ワールドワイド』に行きたいねぇ!」

SR「あ、イイね～!…最近はさ、コッチだと誰と遊んでんの?」

O「ツジ!AGEのギターの、アイツのせいでオレぁまた…だんだん…おかしくなってきたよ(笑)」

SR「カラダ?」

O「アタマっ(笑)!」

SR「(笑)!オペックさん、もしかしてまだ緊張してる?」

O「…う～ん。オレはさぁ…何か『説教くさいコト』言いたくないんだよね～…。『こうであるべきだ』とかさ…」

SR「うん。分かんない、そう言ってほしいヒトも居るかも。取るのは向こう(読者)だから」

O「要は…」
SR「『オレのやり方を見ろ!』と?」
O「…うん。別にコレといって…言いたいコトは無いんだよ…」
SR「え～っ(笑)?!」
O「みんながさ、それぞれっつ～か…何つ～か」
SR「あえて『言うコトは無い!』と?」
O「ん～…無いね～」
SR「もう『神』みたいになっちゃったね(笑)」
O「オレはオレで頑張る…からさ～」
SR「オペックさんて彼女出来ると『合わせちゃう』ヒト?」
O「オレ?…バリバリ『合わせる!』かも(笑)」
SR「合わせるんじゃん(笑)!」
O「モテるからさ、大丈夫っ(笑)!」
SR「あのさ、今回内容がペラペラだから『半ページ』だったらゴメンね(笑)」
O「アハハ(笑)寂しいよ、それは。その辺サカタの実力でさ、カッコ良く『チョイチョイ』っとね!頼むよ～」
SR「アハハハ…(ムリです)…」
O「あの、オレはさ～…自分の『伝説』とか『武勇伝』?なんて話したくないんだよ～」
SR「イイんじゃん?言いたくないコトはさ。とりあえずコレでOKよ」
O「あ…あの、お薦めバンドは『チンピラロッカーズ』です」
SR「(笑)!思い出したの?」
O「うん、そ～んなトコかなぁ」

…対談はここで終了。しかしボクは後から思った。オペックさんの伝説&武勇伝っ!気になるぜっ!…というワケでチョ～HOTな(それは昔のウッディか?アサリさん、こないだも楽しかったデス)新潟パンクス達にメールでインタヴュー!…つ～かせっかく行ったのに、ね(笑)。

HIDE (CIDER77/KLAXONS)

オペック氏がラスティックトップドックスをやってた頃の話だけど、とにかく過激でカッコ良くていつもライヴ観に行ってたんだよね。ある時ライヴ中に興奮したオペック氏がバスドラの上に上がって歌いだし、客も盛り上がってきて最高潮に達した時、足を広げておもいっきりジャンプをしたまではよかったがウッディの天井を突き破りそして転落!あれはかなりの衝撃だったと思う。それでも立ち上がったオペック氏は脳しんとうなのかちょっとフラフラしてて血を流しながらもまた歌い続けていたよ!あの時オペック氏を観てスゲぇ強さを感じたね～!アレから何年か経って今一緒にCIDER77やるようになって。3年くらい前かな?ライヴ中に興奮したオペック氏がまたバスドラの上に登ったからオレはドラムを叩きながらもしかして…!なんて思った。今のウッディはわりと天井が低いから(ジャンプは無理かな)なんて考えながらたくましいその背中を見ていた…。が!直ぐにその時はやってきたっ!チカラ強く拳を挙げてジャンプするかと思いきやバランスを崩して俺の上に落ちてきた(笑)!!ハイハットは曲がりスネアは倒れ、そして気づいたらオレは彼を抱っこしていたよ(笑)。今までいろんなライヴしてきたけどいつもオペック氏にはチカラ・勇気・刺激・そして笑いをいただいてます!いつかまた最高なジャンプが見たいですね～(笑)。ボス!これからもヨロシクっ!

TSUZY (AGE)

まだオペックさんと俺が20代の頃、二人でナンパしに新潟市の繁華街(古町)へ行ったんだ。辺りを物色してたら、目の前から身長およそ170cm、スタイル抜群の女の子が歩いて来たから、これは運命の人が現れたみたいな勢いで、猛アタック!ラッキーな事に商談成立で、三人でドライブ・デートがスタート。車内ではオペックさんと俺がヒートアップして口説きまくり。聞くとドイツとフィリピンのハーフで、名前は「ラブちゃん」(なんて可愛い名前なんだ!と二人)。何だか分からないけど、その名前で更に二人はヒートアップ!ドライブ・デートも小一時間が過ぎる頃、何だか得体の知れない違和感が二人を包み込んだ瞬間、彼女から「私、ニューハーフだよ」と突然の告白…。まぁ、何となくその結果は予想はしてたけど、そこで引き下がるオペックおじさんじゃないよね。口説き方が更にヒートアップ!そのオペックおじさんにつられる様に俺もヒートアップ!最終的に、男二人が男を真剣に口説いたという、チャレンジャーです、オペックさんという人は。でも、そういうノリのよさというか、サービス精神が旺盛で、何をやるにしても華が有るというか目立つ存在で、きっとステージのギラギラした感じは、作り物ではなく、オペックさんの本質な気がします。そういう意味も含め、後輩の俺達はずっとオペックさんに憧れています。

WASHIO (WOODY)

移転して最初の年末ライヴでCIDER77の出来事。最前に居た客の一升瓶を受け取り一気に飲んだと思ったら、頭で叩き割る行動に!オペックさんは大流血…真後ろのドラムのヒデさんは飛んでくる大小の破片に恐怖っ(かなり危険な欠片もありました!)…そしてウッディには大量の破片の片付けが待ってました…。ただフロアは大盛り上がりでした(笑)!(CIDER77の)早い復活と圧倒的なライヴ・パフォーマンスに期待してます!!

NAOKI KLAXON (KLAXONS)

去年の話、オペックさんがぶっ倒れて入院した!って聞いて見舞いに行ったらベッドでパンツ一丁で着替えてる最中。わりと元気そうに「おぉ、大丈夫だぜ」って。その後、SUGIチャンに聞いたらボクが見舞いに行く前にSUGIチャン達がエロ本持って見舞いに行ったんだって…あの時のパンツ一丁の元気の良さはそれかぁって!!本人は違うって言ってたけど、お邪魔したかなぁって思ったよ(笑)。そんな頼れるボスですよ!

SUGI (CIDER77/BLOWBACK)

昔ね、海水浴に行ったトキの話なんだけど。何かやたら海が荒れてる日でさ、オレ達は5人で「ヤバいヤバい!」って言いながらも泳いでて、「ここから先はさすがにコワイな」って思ってテトラポットの上に登ったの。そしたら突然バカでかい波がオレ達を飲み込んで、バッシャ～ッって波が引いてみたら確実にひとり足りなくなってて!「ヤベぇ!さらわれたっ!」もう全員真っ青になってアタフタしてたらさ、テトラポットの隙間から「いや～、危ねかった～っ!」って血まみれのオペックさんが上がってきて(汗)。全く無事だったから今は笑えるけどさ～、あん時ゃホント心臓止まりかけたよ(笑)。いつも何かやらかしてくれるヒトだけどCIDER77で日々勉強させてもらってま～す!

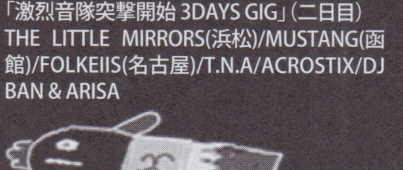
YOSHI (AGE)

オペックさんとカラスの話。子供のカラスが事故にあったのを近くで目撃したオペックさんは、親カラスに犯人だと思われて、剃りたてのモヒカンをくちばしで襲撃され、その時オペックさんは「俺じゃねーよ!!」って叫んだらしいです(笑)。誰からも愛されるオペックさん、これからも闘っていきましょう!!

うぅ…、文頭で「ポンゲ」だとか言ってしまってご免なさい(涙)。だってオペックさん何も言ってくれないんだもん、途中までは良かったのにな～。対談中も終始眉間にシワ寄せて「カッコいい表情」&ささやく様に低く吐き出す「シブい声」…。ボクが「あの…これ活字になるんだからさ、そんなコトしても意味ナイよ」とアドバイスしても「おぉ、そうかそうか」とカッコいい顔のまま(笑)。なのに「写真1枚お願いします」と言われると焦ってサングラスをかける始末…。パイルドライバーが「MYBC(ミナトヨコハマバーニングコア)」ならオペックさんはさしずめ「TCK(トンチンカン)」といったトコロでしょうか。対談後も「高島彩!アレはパンクだね～」(局アナです)、「ヒゲ剃りシェーバー持ち歩いてんだ!」(写真は撮り終えました)なんて会話をしながら居酒屋「赤たぬき」へ。クラクションズ、サイダー、イヴ、AGEのメンバーが集まり自然と反省会(?)的な流れになりまして「サカタ!この場で録音すれば良かったんだよ～!(←もうカッコいい表情はやめている)」と言うので「はぁ…(何か使える面白いハナシしてくれるのかなぁ)」。半ば諦めつつオペックさん&ツジくん(AGE)の会話を聞いていると…矢の様に飛び交う音楽業界専門用語!ザ～〇ン!ボ〇キ!潮〇き!!何十分待ってもこのふたりは下ネタしか言わないのデシタ(涙)。

WOODYライヴ・スケジュール
7/18(日)19(祝)に毎年夏恒例BLOWBACKプレゼンツNiigata City HARDCORE PUNK ROCKERS[百鬼夜行]があります。新潟バンドのみ15～18バンド出演予定です。

7月3日(土) 四日市CLUB CHAOS
「激烈音隊突撃開始 3DAYS GIG」(二日目)
THE LITTLE MIRRORS(浜松)/MUSTANG(函館)/FOLKEIIS(名古屋)/T.N.A/ACROSTIX/DJ BAN & ARISA



次回もお楽しみに。

WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING Vol.6 Germany

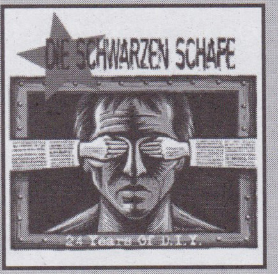
TEXT:
Yuki SP(Y)/WSオニギリ(O)

BACKWOOD CREATURES/I'VE GOT A GIRLFRIEND NOW



このタイトル、インナーに載ってるメンバーの写真。女の子にモテるためにバンドをはじめたのが丸わかりの5人組による1stシングル。これが曲もバツグン、音質もバツグン、水着のお姉ちゃんが目の前に現われそうなノリノリビーチPOP PUNKで非常に楽しませてくれます。このEPの後にリリースされたSCREAMING APPLEからの1stフルレングスでここ日本でも話題となり日本盤も出てました。(Y)
(CLASH CITY/品番不明)7" 1999年

DIE SCHWARZEN SCHAFE/24 YEARS OF D.I.Y.



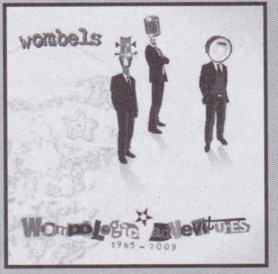
デュッセルドルフのベテラン・バンド、ディ・シュバルツェン・シャーフ、通称DSSの日本編集盤をSPが誰に言われるでもなくリリースしちゃった1枚。飲みすぎでノドがやられちゃってそうなヴォーカルに、初対面なのにやけにフレンドリーなメロディーはまさにドイツ！と言わんばかり。老舗Incognitoからもリリースされていたシングル曲もバッチリ収録で全国の星の数ほどいる(?)DSSファンは歓喜間違いなし！(Y)
(SP/SP-008)CD 2009年

BAM BAMS/YOU & THE SUMMER



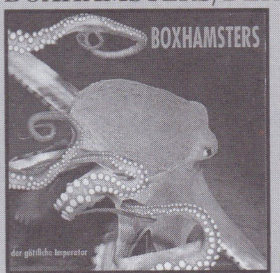
極々一部で「こんバムバムわ！」の流行語も産んだドイツの女性ヴォーカルPOP PUNKバンドの代表作。かなりしっかりした演奏と、芯の通った伸びのあるYVY嬢の極上ヴォーカルが見事に絡み合い、キャッチーで一度聴いたら口ずさんでしまうようなメロディーに乗せてやってくるPOP PUNKビック・ウェーブ。イタリア・ツアー用に同タイトルをイタリア語に代えてGonna PukeからもEPをリリースしていました。(Y)
(INCOGNITO/INC092)7" 1996年

DIE WOMBELS/WOMPOLOGIC ADVENTURES



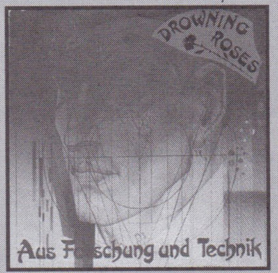
オリジナル音源の入手困難度は結構高い。85年に結成され、90年代前半まで活動。SECTやBIG DRILL CARなどともライヴを共にしていました。特に初期の音源はへっぽこだけど胸をキュンとさせる70'sパンク・ロック・サウンドでPOP PUNKファンを軒並み虜にしています。75枚のみしか存在しない激レア1stアルバムも大名盤1st 7"も収録の驚きの日本盤がリリースされています。INCOGNITOからリリースされていたのでパンク・ロック好きな人だったら聴いてみて欲しい。(O)
(SP/SP-009)CD 2010年

BOXHAMSTERS/DER GOTTICHE IMPERATOR



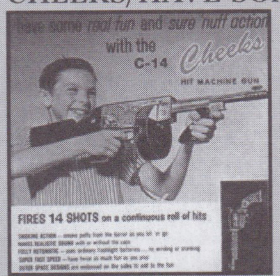
1980年代後半から活動しているベテラン・メロディック・パンク・バンドの初期作品2ndアルバム。かなりの音源をリリースしており、同じドイツのWIZOやEA80なんかと親交も深いようですが全くもって鳴かず飛ばずなのは、母国語の歌詞とメンバーの引っ込み思案な性格がにじみ出ているダークネスなサウンドがなせる業でしょうか。フィンランドのAMAZING TAILSとか好きな人は気に入ると思いますよ。(Y)
(BAD MOON/BAD002)CD 1990年

DROWNING ROSES/AUS FORSCHUNG UND TECHNIK



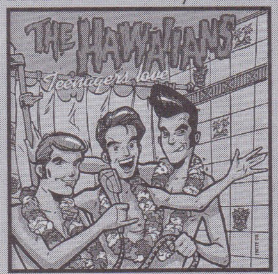
ファスト・メロディック・ハードコア！トラル・パンクにも通じる民謡的メロディーがかっこいい！NOFXとのスプリット・シングルで存在を知ったのだけれども、そのスプリットでは完全にNOFXに負けていたけどこの単独はなかなかどうして。掛け合いヴォーカルでサビは合唱！ASTA KASK好きな人にも受け入れられるサウンドだと思います。当時本国では結構人気があったそうだ。2008年に突如復活してまだやってるみたい。別に見たくはない(笑)。(O)
(自主/WKS771)7" 1987年

CHEEKS/HAVE SOME REAL FUN



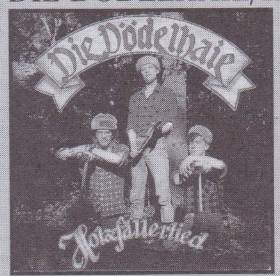
ドイツの最上級ポップ/モッド・パンク/パワーポップ・バンドの1stアルバム。なんとMODERNETTESの「CONFIDENTIAL」にCARPETTESの「NOTHING EVER CHANGES」のカヴァーもありで最高のグッドメロディー・アルバムに仕上がっています。70'sのバンドからの影響が随所に見られる徹底振りも洗練されていてセンスありです。2ndアルバム以降ぐっと大人っぽくスローダウンしていってしまいますが、このアルバムは疾走感もばっちり！ジャケもいいですね。(O)
(SCREAMING APPLE/SCALP117)LP/CD 1997年

HAWAIIANS/TEENAGERS LOVE



アロハシャツを身に纏いラモーンズのように足を大きく広げた、見るからにそっち(バブルガム・ポップ・パンク)方面の3人組による1stアルバム。古き良きオールディーズ・サウンドを取り入れながらも、古臭さは一切感じさせないゴキゲンノリノリなバブルガム・サーフポップ・パンクの応酬。SONIC SURF CITY、初期TRAVOLTASファンは要チェック。2007年リリースの2ndもブレの無い同路線で素晴らしいです。(Y)
(KAMIKAZE/KK-CD 015)CD 2002年

DIE DÖDELHAIE/HOLZFÄLLERLIES



現在も元気に活動中の人気バンド(日本では全く人気無し)によるフルレングスに続いてリリースされた1stシングル。メンバーが木こりに扮したジャケット、まさかのモンティーパイソンの「木こりの歌」を倍速パンク・ロック・カヴァー。B面はロシア民謡・カチューシャのカヴァーと来たものです。極初期にこんなリリースをしちゃうなんて…大好きです。フィンランドのKLAMYDIAとか好きな人は是非。(Y)
(MMC/INPACT/IR003)7" 1991年

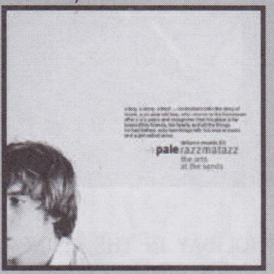
MÄDELS NO MÄDELS/333 x up & down



誰も見向きもしない所から良質のバンドを発掘することに恐らく命を注いでいたINCOGNITOが地元から掘り上げてきた70'sパンク・ロック直系のバンド。2ndシングル、とぼけた感じのヴォーカルにやる気の感じられないコーラスワークの絡みが絶品で、全ての悩みがどうでもよくなるかのようなユーモラスなポップ感が心地よい。"My Dad Took Acid"なんていうタイトル曲もあり、BACK TO FRONTに収録されているTITSの"Daddy Is My Pusher"へのアンサー・ソングなのでは?!んなわけない。(O)
(INCOGNITO/INC026)7" 1992年

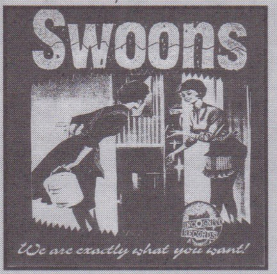
はい、今号は宣言した通りに前回の続きとなるドイツ編第二弾をソーセージ食いながらお届けさせていただきます！正直、この国のバンドをピックアップするのはかなり困難です。ドイツという国はかなりの音楽大国でもあり無名のバンドを探していくと、きりがなさすぎます（汗）。そして新旧問わず多くの海外のバンドがヨーロッパ・ツアーでは必ず訪れる国だけど、名前は明かせないけどこのバンドまだやってたのかよと日本人だったら思ってしまうバンドが、信じられないくらいの数のオーディエンスを集客していたりするから不思議な国ですね。現在進行形でも良質なレーベルが元気良く活動しているので、ぜひぜひドイツにも注目をしてください。

PALE/RAZZMATAZZ



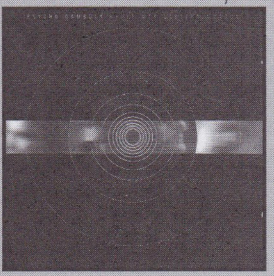
ドイツのエモーショナル・メロディック・バンド、2000年にリリースされたアルバム。前作も名盤でしたが、今作も素敵な作品に仕上がってます。そしてJAMの"Town called Malice"のカヴァーがおしゃれに仕上がっていてこれがいいんです。PROMISE RING的な軽快なリズムにSTARMARKETっぽい哀愁メロディーがのっかる彼等のメロディー、EMO/MELODICファンだったら聴いてもらいたいです。少し擦れ気味な声質もポイント高し。(O)
(DEFIANCE/DEFIANCE13)LP/CD 2000年

SWOONS/WE ARE EXACTLY WHAT YOU WANT!



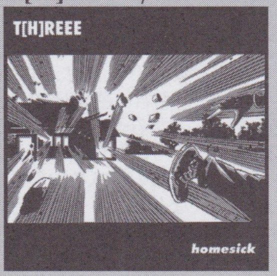
日本盤もリリースされていた人気女性ヴォーカル・バンドの記念すべき1stリリースはINCOGNITOの名シリーズ333 x UP & DOWNシングル。後期のようなはじけるようなキュートさはこの頃にはまだ開花しておらず、かわいさを意識していない女性ヴォーカルとSO MUCH HATEな男性ヴォーカルがヨーロッパ独特の暗さをタップリ蓄えたキレッキレなサウンドにのせて裏でこそこそと押し寄せてきます。そんな初期も非常に趣きあり。(Y)
(INCOGNITO/INC030)7" 1992年

PSYCHO GAMBOLA/HEUTE WAR GESTERN MORGEN



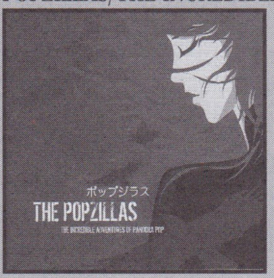
ドイツのLEATHERFACEの異名を持つSWOONSのリーダーSTEFAN在籍バンドの3rd作品。今や絶滅危惧種の古き良きUKメロディックど真ん中の湿り気サウンドに、ヨーロッパ特有の物悲しさが加わって全国のSAD PUNKS諸君は枕を濡らす羽目になると思います。この作品の疾走感が倍速LEATHERFACEってな具合でベスト。メンバーはこのあとPOPZILLASにて活動。(Y)
(VITAMINEPILLEN/VP092)CD 2001年

T[H]REEE/HOMESICK



片田舎の４人組による誰にも知られずにひっそりとリリースされていた４曲入り2ndシングル。いい意味でドイツっぽさがほとんどないサウンドは2 LINE FILLERやGANを彷彿とさせており非常に希少価値が高いです。メロディック・ファンは一聴の価値あり。1st EPもジャケット・内容共に高得点。(Y)
(BLURR/BLURRR 007)7" 1996年

POPZILLAS/THE INCREDIBLE ADVENTURES OF PANDORA POP



BAM BAMSのヴォーカルだったYVY嬢にSWOONS～PSYCHO GAMBOLAのギターを務めていたメンバーが集まって結成されたその筋の人にはオールスター的バンド。なぜか日本に感化されまくっており、ジャケットやブックレットにはカタカナ表記もあり、PVは日本語飛び交いまくりのジャパニメーションです。サウンドはかなりメジャー寄りであまり面白みはありません。(Y)
(WOLVERRINE/WR122)CD 2006年

Y-FRONTS/ST



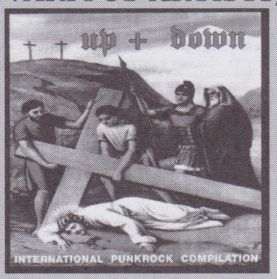
当時叩き売り状態で売られていたこの7"を救出して針を落とした時にはガッツポーズ！まさにB級メロディックといった感じのサウンドはナイス！BIG DRILL CARミーツDAG NASTYといった感じの流れるメロディーが秀逸。哀愁ありのキャッチーなメロディックはエモーショナル度もあっていい。若干YOUTH BRIGADEを思わせてくれる。しかしなんなんだろねこのジャケは。NASTY VINYLじゃなかったらパスしただろうな（笑）。多分唯一の音源だと思う（汗）。(O)
(NASTY VINYL/S-14)7" 1992年

RASTA KNAST/PROBEGEPOGT



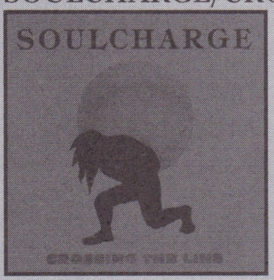
最早伝説のPISSED SPITZELSでマイクを取っていたHOHNIE(HOHNIE RECORDSも運営)が結成したことで結成当初から注目を集めるが、そのロゴからサウンドまで完全にASTA KASKに心酔したスタイルは、この塩化ヴィニール盤に針を落とした世のASTA KASKファンを一瞬のうちに虜にしたはず！RASTA KNAST登場時にはすでにASTA KASKは解散していただけに心ウキウキになりました！初期の音は特にトラコア色全開なんでオススメ！(O)
(HOHNIE RECORDS/HO32)7" 1997年

VARIOUS ARTISTS/UP & DOWN



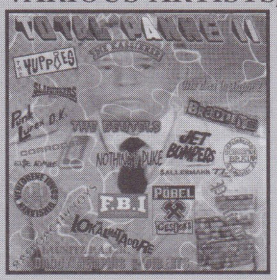
はい、INCOGNITOものです。333枚限定のUP & DOWNシリーズの7"の93年までのリリース作品の一部を収録した19バンド30曲のCD。7"を全部持ってたら必要ないけど、INCOGNITOということで押さえるでしょ。泥臭いパンク・ロックからポップ・パンク、メロディックまで知名度関係なしに自分達が好きなバンドをリリースするぜっていう姿勢も含めて好きなレーベル。ZAKONAS, MADELS NO MADELS, BROKEN TOYS, SWOONS, DIRTY SCUMS, ZONA A, MARIONETTESにSECTまで収録、WAT TYLERまでリリースしてるのは凄い。(O)
(INCOGNITO/INC050)CD 1993年

SOULCHARGE/CROSSING THE LINE



ずっと探してた7"をようやく入手出来たので。しかもアメリカで。かっこいい80年代後期から90年代初頭のメロディック・パンク・バンドのルックスの定番でもあるドレッドヘアーのメンバーも在籍のこのバンドはASEXUALS～DOUGHBOYS、SAMIAM、SHADES APARTなどを思わせる哀愁のメロディックに涙。US、UKで同時進行的に誕生したメロディック・シーンに追従していたドイツのバンドはかなり良質のバンドがたくさん眠っているに違いないのでまだまだ探検はやめられない。(O)
(FORTY TWO/42 6)7" 1992年

VARIOUS ARTISTS/TOTAL PANNE II



当時のドイツ・シーンの70's スタイル・パンク・ロック、ストリート・パンク、スカ・バンド総勢25バンドを収録したアルバム（一部ドイツ以外の国のバンドを含む。ちなみにフィンランドのPUNK LUREX O.K.目当てで購入した）。無名のバンドが多く収録されているのでなかなか面白い。PUBLIC TOYSのRAMONESの"BLITZKRIEG BOP"のドイツ語カヴァーはなしだろ（笑）。余談だけどおれのLPは針飛びが酷い…。しかし、なんでドイツのコンピはジャケが酷いのが多いのか。(O)
(ZIEGENKOPF/ZKO-017)LP 1997年

GIVE THE ANARCHIST A CIGARETTE

GIVE THE ANARCHIST A CIGARETTE SPECIAL

第四回

TEXT:PAINTBOX 宗



先月号等で募集した、俺の居ない間のPAINTBOXのライヴの情報ですが、多くの協力を得ることが出来まして、さすがに100%とはいきませんが9割以上の完成度のライヴ・スケジュールを作れそうです!
皆さん、ありがとう!楽しみにしていて下さい!

PAINTBOXの歴史と自分の歴史を重ねて、色々思い出しながら楽しんでくれたらいいですね!年表ってノスタルジック。
残念、無念ですが俺がいない間は、ライヴも少なくバッチリ活動出来た訳じゃないけど(ごめんなさい!)大体11年分、ライヴ300本くらい!
頑張って、慣れないパソコンで打ちましたよ、償いも込めて。

それとついでに募集しますが、2002年に横浜BAY HALLで行われたイベント「HOLIDAY IN THE RISING SUN」の模様をスカパーで放送したんですが、綺麗な映像で持っている方いませんか?DVDで使いたいのでお願いします!
しかしあの日は凄かったな。2002年、「HOLIDAY IN THE RISING SUN」。
会場入りしたら、状況がUK/DKかと思ったもん(2日間の出演 ADICTS、ANTI NOWHERE LEAGUE、COCKNEY REJECTS、THE EXPLOITED、THE BUSINESS、RED ALERT、THE LURKERS、DEMOB、THE CRACK、GRIFFIN、SANDIEST、鉄アレイ、BATTLE OF NINJAMANZ、PAINTBOX、EXTINCT GOVERNMENT他)。
同じビラに載っている時点で興奮物ですよ。企画者や呼んだバンドがハードコアってより、パンク・ロック、スキンズ系だったからハードコアがほとんど無かったけど、いいです、全然OKです!
誰よりも先にチェルシーと「あれ、UK/DKで喋ってるおっさんじゃねえ??」と変な所に感動する俺たち。有名な人なんだろうけど名前分からない(笑)。
「今日の対バン?ADICTSとANTI NOWHERE LEAGUEとCOCKNEY REJECTS」なんて、一生あり得なくない?(先日DISCHARGE、EXPLOITED、GBHが一緒に来ましたが…)。しかも日本に居つつだからね。

翌日にはTHE EXPLOITED、THE BUSINESS、RED ALERTも出演!

ANGELIC UPSTARTSが予定通り来てたら完璧だったけどな。チェルシーも俺も「Women In Disguise」で泣く準備は出来てたのに!チェルシーはANGELIC UPSTARTS来日中止で、マジ切れしてました(笑)。
しかし企画者、ならびに俺らのわがままを聞いてくれたEXTINCT GOVERNMENTリキ君に感謝!夢の様な2日間でした!!
なるべく沢山の知り合いを入れてあげたかったから主催者に頼み込んで、かなりの人数のパスを出して貰った。バックステージなんてスゲーよ、だって。2日間で出たバンド・メンバーみんないるんだから。

いくつかある内の一つの楽屋のドア開けたらアニマル(ANTI NOWHERE LEAGUE)が一人で瞑想してるし(笑)。
写真撮ってと頼んだら俺だけ、ベロッと舐められるし…(モーホー)。
EXPLOITEDワッティとBUSINESSのメンバーが仲良く喋ってたり、もう日本の景色じゃなかった。
COCKNEY REJECTSのヴォーカルはガタイが凄くなってて、もうイケイケで、THE CRACKのメンバーをぶん殴ってた(笑)。日本来てまで内輪喧嘩すんなよ。
まあ、一番ライヴが良かったのはADICTSかな。さすが現役。BUSINESSも良かったけど、やっぱり現役はいいね。いまだにツアー回ってるんでしょ?さすがでした。昔はポップ・パンクなんて言われてたし、ある時期までADICTSは聴かなかったけど、センスいい曲書きますよ!VIVA!!!

何よりも快挙だったのはスカパーで放送した時にADICTSのモンキーの後ろを横切る、静岡はUNDER THE SUN(R.I.P)みっつーの全裸姿!(笑)何気に放送コードぶっちぎってます。全国ネットで披露した全裸を今度はDVDで世界流通させようかと思ってます。
そんな中、なんだかんだおいしいチェルシー先生は、ワッティーから「Great!」とお褒めの言葉。昔DISCHARGEとやった時は、ヴォーカルのCALに「Japanese captain sensible!」って言われたんだって威張ってました。いいなあ。

しかし振り返ってみれば、素人同然だった俺が、随分とあこがれの海外のバンドとやらせて貰いました。

先に書いた「HOLIDAY IN THE RISING SUN」の面々に、G.B.H、DISORDER、VARUKERS、POISON IDEA、CASUALTIES、今や世界のTRAGEDY他、色々…。
チェルシーに至っては、DISCHARGE、E.N.T、CHAOS U.Kもやってるみたい。ほぼイギリス制覇じゃん。いいパンク人生なのかもしれませんね。DISCHARGEの時は、ヤバイ曲もあり、う～ん…って感じだったそうですが、なんだかんだ往年の曲をやられたら、自然と体が動いて止められなかったそうです。

しかし、今や恒例となっている「CHAOS IN TEJAS」。テキサスね。凄い!!
首謀者ティミーは俺より全然年下。やるねえ。今年は勿論BASTARDが再結成しますが、去年はホント凄かった。日本からはJUDGEMENT、CRUDE、悪意が出たそうですが、他の出演がAMEBIX!COCK SPARRER、CRO-MAGS、BUSINESS。もうこの時点で異常。どんなメンツなんだ!!
しかし、一言言っておきましょう。このイベントの発端となったテキサスのイベント、いやテキサスに最初に行った日本のバンドは誰あろうPAINTBOXなんだぞ!

2004年のPRANK RECORDS FES.でした。当時はまだ今みたいに規模がでかくなくって、俺らがトリ。日本から初めて来たバンドってのが目玉だった。出演もほぼアメリカ勢で、DROPDEAD、WORLD BURNS TO DEATH、等…。客全員が知らない外人の前でライヴするのは、かなりエキサイティングで楽しかったけど、今の規模だったら…とちょっとジェラシー。

ZIGYAKU先生なんか、去年JUDGEMENTで行って「レジェンド!」。今年なんかBASTARDだって。もっと「レジェンド!!!」。どんだけ神々しいんだろうか。
外人さんのフェイバリットはDEATH SIDEも多いけど、BASTARD多いもんなあ。我らがチェルシーも、海外ツアーだからってやっぱりギター持って行かなかった(のかなあ…?)んだけど、テキサスでは「是非チェルシーはこれで弾いてくれ」ってな感じで白いフライングVが用意されているという、何ともVIPな扱いでした。

まあ、実際の話、前回も書きましたが日本

のハードコアは日本で唯一、世界に通用する、もしくは天下を取る事の出来うるジャンルだと俺は思います。もちろんパワーも演奏力も確かにTRAGEDYとかは凄いけど、トータル的に見てレベルは日本の方が高いと感じるのは俺だけじゃないはず。

体力的に言ったって日本には函館が世界に誇るCRUDEがいるじゃないですか。前回の極寒ツアーに少し同行しまして、MUSTANGを見てトリオなのに凄いパワーを見せつけられ、最強のトリオだ!と思い、MUSTANGに伝えた所、が「いやあ〜、CRUDE見てないでしょ?スゲーから」と言っていたので、どんな事になってるのか早く見たいですな!函館はすでに日本では無いのかもしれんね…。

話は打って変わって告知ですが、全くの予定外ですが、なんとあの「R/A/P/E/S」でベースを弾くことになりました(チェルシーがヘルプでベースを弾いた事があった縁で)。久々のバンド復帰は、ヴォーカルではなくベースになりました。

元ベース出身なので、原点回帰、気楽に…と言ってるよーな余裕をもってちゃいけないバンドでした。なんせ、R/A/P/E/Sですよ!R/A/P/E/S!

全く気軽じゃない(笑)。初めてのヘルプにしては困難な道を選んでしまったみたいですね。言わなくても皆さん知ってる通り、危険な、暴力的な噂、伝説が絶えない、触れちゃいけないイメージのバンド。

昔QUICK JAPANて雑誌に1997年頃、恐ろしい噂が載り、それを撤回、釈明するために次号で行われた、レイプスの全貌ってインタヴューが掲載され話題になりました。言ってみれば雑誌側の謝罪でもある。

表紙はなんとヴォーカルの新谷君。

おそらく、ほぼ噂や証言どおりであろう事を、ことごとく否定するメンバー。笑っちゃったよ、否定しすぎで(笑)。なんとか事実を一つでも認めてもらいたい雑誌側も必死だけど、「鼻ってどうやったら折れるんやろ」なんて言われたらうそ付け!なんて言えないし、多分怖いの分かってるから余計言えないだろうな。だって事実無根ならもっと怒ってもよさそうなのに、淡々と否定するだけ。違う意味で、怖いよ(笑)。

まあ、そんな過激な伝説を残しているような暴力の香りたっぷりなバンドで草食系の俺がどう見えるのか…非常に楽しみです。

初めてレイプスと遭遇した15年位前では絶対に考えられないし、いまでもまだ、俺がR/A/P/E/S??と不思議な感じでありますす。やるからには、やりがいたっぷりすぎるバンドなのでがんばりますよ〜!!

今のところ決まっているライヴは6本。この号が出るころには大体、終わってるのかな…?一応全て書いておきます。

・6月6日　新宿ANTIKNOCK「BURNING SPIRITS 666」
(w/THE　TRASH、ガンフロンティア、WORM'S MEAT、九狼吽、FIGHTBACK、NO PROBLEM、PILE DRIVER、P.I.M.P)

・6月13日　COLOR Marry追悼
HOLIDAY OSAKA

・6月15日　同上　HOLIDAY　SHINJUKU

・8月17日　ISHIYA企画　チェルシーの日
新宿LOFT(w/CRUDE、MUSTANG、鉄アレイ、PAINTBOX、FORWARD、π(パイ)他…)

・8月28日　横浜7th AVENUE
(w/JOLLY PICKLES…)

・9月22日　(w/ゲンドウミサイル、ザ・ペラーズ…)

チェルシーの日は勿論、1年ぶりに復活してPAINTBOXも出るので、どんなメンバーで復活するか期待してて下さい!ちなみにベース募集中です!

R/A/P/E/Sも7月に1本入るとバランスいいけどね。R/A/P/E/Sだという事だけでなく、久々の楽器担当という事で、楽しみではあるけど、神経を使いそうです。まあ、なかなか出来ない体験なんで、ヘルプとはいえ、気合入れてやろうかな、と思う次第です。

現在他誌ですが、HG　FACT発行の「ADVERSE」に今更ながら去年のチェルシー追悼ツアー・レポートを書かせて貰います。時間が経ってるのと強行スケジュールだったので記憶が薄いですが、なんとか頑張りますので、読んで下さいね。

ツアーって言うと思い出すのはやはりチェルシー生前のツアーでの出来事だな。彼のおかげでツアーは非常に困難になり、ただでさえキツいツアーが地獄のようなツアーにグレードアップするのです。でも達成感はハンパないし、楽しさも、他のツアーに絶対負けない自信がある位の盛り上がりでしたよ。だから記憶にも深く残るのです。だって前回のツアー、ビックリする位楽だったもん。彼がいなかったから。

ツアーでの色々な出来事は、次号で書こうかと思っております。どこまで書いていいのやら……まあお楽しみに!

あと個人でCDの通販始めました。扱っているCDは

・Singing,Shouting,Crying
(15曲収録　2000円)

・Earthball Sports Tournament
(14曲収録　2000円)

・Trip,Trance & Travelling
(16＋α曲収録　2700円)

・Relicts-singles collection-
(20曲収録　2000円)

・Cry of the Sheeps
(3曲＋α収録　1000円)

HG FACT同様、送料は頂きません。すでに持っている方もプレゼントにどうぞ!(笑)

俺から買うとちょっとしたオマケ付けます!気軽に連絡下さい!!

E-MAIL
travellingmoth@hotmail.co.jpまで!

あとブログやってみました。良く分かっていませんが。

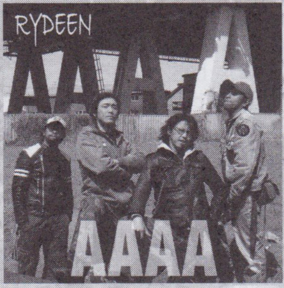
Alternative FUTURE
http://box0687.at.webry.info/

ではまた、次号で。

今月の良く回った盤



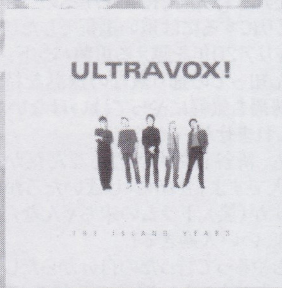
RAPES「Fly Again」



RYDEEN「A.A.A.A」



TURTLE ISLAND「ズナマ」



ULTRAVOX!「THE ISLAND YEARS」

GIVE THE ANARCHIST A CIGARETTE

GIVE THE ANARCHIST A CIGARETTE SPECIAL



第五回

TEXT:PAINTBOX 宗

さて、この号が出ている頃には、やりましたか?LIP CREAM!!!
早朝からチケット並んだらしいもんね。初めに並んだのは朝5時だって(ちなみに1番はLIFEのアベちゃん(笑))。リップどんだけ凄いんだYO!!
しかし俺は、あえて買わなかった…。
って嘘です!発売日に気付いて、買わなくちゃ!と思ったら財布内が悲しい事に…。俺は金が無いって理由で行けないのか…。
そもそも、そんな朝から並ぶなんて無理でした。後悔するのは分かっております!こうなったら名古屋か大阪に絶対行ってやる!
いや、ちゃんと金払うから見せて下さい。悔しい思いをした、買い逃した、地方のパンクス諸君!またリップやってとお願いしま…………あきらめましょう…。
と、すっかり諦めていた所に朗報が!!友人の友人が1枚余ったと!!てなわけで日ごろの行いが良いといいことがたまにはある物です。
さて、僕は見れたのでしょうか、LIP CREAM!NO WAR!MAKE LOVE WITH YOU!!

気を取り直して今回も頑張っていきましょう。
前号でツアーについて書きますと言いましたが、また今度にします(笑)。適当なんです。俺、嘘つきだぜ~(by:SAMURAI)。
で、何を書くかというとライヴです!連載5回目にして、やっと自分のライヴの事が書けます!!
6月6日に約10カ月ぶりくらいかなあ、ライヴしました。しました!

BURNING SPIRITS 666(久しぶりの響きだ…)新宿ANTIKNOCK。
皆さんご存知の、R/A/P/E/Sのベースで。リハビリにするには重い選択でした(笑)。
キャリア20年を越える重鎮バンド、そして皆さん知っての通り数々の逸話を持つ、ある意味最も気軽にやってはいけないバンドかもしれません。
でも、新谷君も大坪君もなんだかんだ、いい人ですよ。会話に「しばいたろか」が多いですが(笑)。ドラムの米ちゃんなんて、聖人だよ、いい人過ぎて!
でもやるって言ったの自分からだしね。
こんなにトントン拍子で話が進むとは思わなかったけど。

最後のチェルシーのライヴがR/A/P/E/Sのベースだったってのがでかくて。
しかしベースだけのライヴは10年以上ぶりだってのに、リハ無いし、R/A/P/E/Sだしで、大丈夫か俺!って感じでしたが……。
どうなったのか!とその前に…。

いつか何かに書いたと思いますが普段は小心者の俺ですが、ことライヴとなると全くもって緊張しないという特異体質なのでした。
が、しかしヴォーカルではなくベース、しかも10数年ぶりで、ステージ自体も10ヶ月ぶりのブランクがあるので、今回ばかりは不安でいっぱいです。イマイチ戻らないベースの勘に、イラつく俺。
何しろ多少歌詞を間違えても大したことはありませんが(と思う)楽器はそうはいきません。要するに完全に弾かなければ失敗は不協和音として目立つ訳で1フレットのミスが、バレてしまえばハッキリとした結果につながるのです。
楽器という物がどれほど大変なものか、皆がどれだけ気を入れて弾いているか、改めて気づかされた、フナバシ四十路マエ、独身。
ライヴは緊張した方が上手くいくなんて説を聞きますが、だったら俺は良いライヴをした事が無いって事になる訳で、なんとしてもその説が間違いである事にして貰わないといかんのです。
俺は一体、いつからライヴで緊張しなくなったのか、それは全く分かりません。演奏、楽器の頃はそれなりに緊張していたのか…。記憶力には自信のある俺ですが、全く思い出せません。

多分、ペイントボックスと言うか、チェルシー先生と活動するには大変な事が多すぎて、ライヴで緊張していては他の何かが勃発した時に対処しきれない…って感じで、いつしかライヴで緊張している場合じゃないと思ったのがあるような気がします。
緊張していてはトラブルに迅速に対処出来ないでしょ?開き直りというか、慣れというか…そんな気がします。

大昔、某バンドのヴォーカルの方が出番前に楽屋で角材を片手に、死ぬほど緊張しているのを見た事があります。
それは一体、何に対する緊張なのか考えたのですが、普通でも緊張するタイプなのに、角材を振り回し客席に突っ込むオープニングに決めてしまうもんで、もしかしたら大怪我を負わせてしまうかもしれないという不安が相まって、緊張はいつしか「マックス」に…。だと思いますが、どうでしょう。
多分その人の性格的に(実は凄くいい人なんですよ)合っていると思います。

だったら元々音楽に角材は関係ないんだからやめればいいじゃん!!と僕は思いましたが(笑)。九狼吽のバットしかり。
しかしそれが彼の表現方法、テンションのあげ方、ハードコアの形なのでしょうから仕方が無い、いや、いいのではないでしょうかね。客としては勘弁して欲しいけど。

緊張＝暴力＝ハードコア。緊張＝暴力＝喧嘩。

なんだか大変なジャンルですな。
でも実際に喧嘩をしてしまうと(ほとんどしたこと無いです。草食ですから)いつしか脳内にアドレナリンが分泌しまして、集中力が高まり緊張感もあり、痛みもそれほど感じなくなるという状態になった事があると思います。
ですからポーンとライヴに出て暴れてしまえば、脳内麻薬が出まくって緊張は飛び、いつしか快感、カタルシスを感じる…。
そう考えると、なんだかんだ言ってハードコアって暴力にもっとも近いジャンルなんだな、なんて思ったりしてしまいました。

まあ、日本の初期ハードコアの影響は大きいと思いますが、その緊張感に惹かれたのも事実。怖かったけどね。俺がガキの頃も十分。
チェルシー達の話を聞くと……そん時生まれなくて良かった…になってしまいますが。
それにしてもハードコアに、どうしてああまで恐ろしい人が集まったのだろう…と不思議に思いますね。半端じゃないんだもん。怖い、強い。

で、話を戻して、そうなると全く緊張しない俺は、緊張するタイプよりもライヴの時に快感の感じ方が少ないかもしれないです。多分、ホントだろうな。
冷静でさめた人よりも、熱くて我を忘れる

くらいの人の方が(例えばチェルシー)感情の動き、感動の感じ方はでかいのでしょう。
いつも最悪の状況を考えつつ動くような俺みたいなつまらないやり方は、皆さんしないほうがいいですよ。でも失敗するけど(笑)。無表情で冷静な人間より喜怒哀楽のある感情豊かである方が、正直だし、気持ちも相手に伝わりやすいです。音楽をやる人間、特にハードコアとしては絶対そのほうがいいと思うし、自分も得です。

で、6・6のレイプス初ライヴに戻りますが、やはり久しぶりの楽器でのライヴってのと練習不足での緊張(まあ、それでもちょっとなんですが)、そして前日までの個人的な悩みのための寝不足、若干の自分に対しての物足りなさはあった物の、そのブランクにしてはよくやったかなと。
メンバーもライヴ出来るのを喜んでくれたし、新谷君も楽しそうにやっていたし。俺が弾くって事で見に来た人も結構いたらしく、凄く嬉しいです!!P.I.M.P企画で、なかなか暴力の香りが多めに漂う感じの渋いメンツだったしね。
見た中で印象的なのは、まず勢いのある期待の九狼吽。彼らのデビュー・ライヴで共演した者としては、ここ最近、目を見張る成長ぶりに驚き。暴力的なステージングも以前よりも客を煽る手段に見えました。
ムネ、と言えば九狼吽。他にいたっけ?とならない様に俺も頑張らなくてはいけませんな。
そして、出ました、ガンフロンティア。あの曲調、勿論速い曲など無い。なのに熱くさせるバイブレーション、あとはこいつの機嫌だけ～!!そして殴りかかって来るようなサトちゃん(同郷)のテンション。もっともっと沢山の人に見て、聴いていただきたいです。人間がまともであれば、メジャーにもいける音です。
TRASHにいたってはもう、余裕ですね。さすがです。尊敬に値する、なんだかんだ怖い、大先輩です。夜をぶっとばそうぜ!!!
NO PROBLEMは中さん、ミキオ君がSTICKS IN THROATをやめて作ったので、きっと剛球ハードコアなんだろうと思いきや、WOO HAA-!とのりの良い音が出てきました。面白いもんですね。音源が楽しみです!!!ファミリーみたいなバンドです。
WORM'S MEATのドラムはなんと、あのアナーキーのコバンさんの息子!!で、BASSはフェイマス君!濃いな(笑)。
FIGHT BACKはBASTARDで大活躍のトクロー君と、同じくCROWでテキサスに行った日本一忙しい(ドラミングも忙しい)iron fist辰嶋さん。
いや、今はライディーン、BASTARD、SYSTEMAでツアーしまくりのマサアキ君が一番忙しいかな。多分、人生のピークを迎えている様に見えるので、そろそろ死ぬのでは…と思ってますが。
なんだかんだ辰嶋さんとはもう20年近い付き合い。この業界でACCOMPLICEキンちゃん、エイジ君、マックス君、ライディーンKYCに並ぶ旧友なんです。
PILE DRIVERは珍しくメンバー・チェンジがあった模様。

しかし、俺の学生時代から活動してるから、随分なベテランですが、知り合って年を聞いてビックリ。ほぼ同年代でした。おそるべき10代だったんですね。赤いモヒカンで中学生だって(笑)。
それは京都WARHEAD、函館CRUDEにも言えます。話してみて、年下なの!?と驚愕しました。特にWARHEADのドラムの人の態度は年下ではないです。

まあとにかく、今回、R/A/P/E/S引き受けて良かったなと。たまにはステージ立たないと、むねギャルズが寂しがるからね(妄想)。って言っても今年あと5本入ってるんですが(笑)。そんなにライヴやってたっけ、今まで…話によるとこれだけの忙しいスケジュールは20年ぶりだって!……と嬉しいやら、荷が重いやら。今年の後半はレイプスで行っちゃう感じですね。
勿論、ペイントもライヴ以外の創作活動はしますよ!
あ、チェルシーの日のPAINTBOXのギターは去年ツアーで大活躍してくれたオサム(ALLIANCE)はお疲れって事で、なんとEL ZINE前号で熱くこれからのORDERの活動を語ってくれたのに電撃脱退をした「元」ORDERのcazuが弾いてくれることになりました!
いや～、きっとやってくれるはずですよ!
で、ベースの候補は勿論、頭にはありますが本人にまだ聞いてないのでとりあえずシークレットで。もしやってくれればチェルシーもガッツポーズするはずの人ですが……。どうなるものか、あやぶむなかれ。行けばわかるさ。
FORWARDも新しいドラマーにブルースビンボーズ等で活躍の秋山に決まったようで(彼は元々ハードコア出身!元RUSTLERだったりする)きっと気合の入った新生FORWARDを見せてくれるでしょう。
R/A/P/E/Sも出るので、俺は2ステージ。cazuもπ(パイ)というノイズ・ユニット(?)でも出るので2ステージ。おなじみ弁慶くんはCRUDE、MUSTANGの2ステージ。なので2ステージくらいでゴチャゴチャ言ってらんないのです!
未だメンバーの問題で迷走中のPAINTBOXですが、なんとか出てみせます!!チェルシーの追悼だよ?俺らが出なくてどうすんの!!出なかったら、企画のISHIYA君に、仲間に顔向け出来ないね!ってゆうか出るでしょ、当たり前に。

あ、あと細々とブログなんてやってるんです。そんなに更新しないけど。

http://box0687.at.webry.info/

あとライディーンとペイントの奇跡のコラボがYOUTUBEにあがってますってか、あげられました(笑)。BASTARDを見るついでに是非見てください。わりとおいしい出来です。暇なもんだからこんな事やっちゃいました。FADE IN RECORDSのHPでも見れます。

http://www.youtube.com/watch?v=TcBRR81GG-8&feature=player_embedded#!

てな感じで今回はこれまで。また会おうぜ、キッズ諸君!

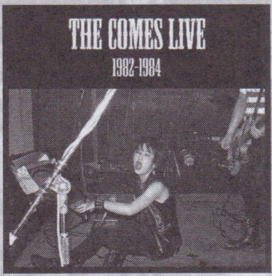
今月の良く回った盤



PAINTBOX「TRIP,TRANCE & TRAVELLING」



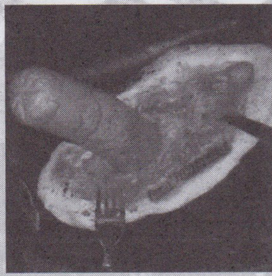
CHUMBAWAMBA「Shhh」



THE COMES「LIVE 1982-1984」



END OF SEEDS「ST」


SLIP HEAD BUTT「ST」

metal punkやろうぜ！ ギタリスト解剖

vol.1 jacky crust war

ギター製作順調に動き出し進んでおります。次回の100%ギター・スペシャル特別企画(勝手に言ってる)にてオーダー・ギター最終回をお伝えできると思います！そして今回は…。
創刊!!"METALPUNKやろうぜ！―ギタリスト解剖―"という企画を思いつきコレをシリーズ化して行こうと思っています！声を掛けたNOISEギタリスト諸君宜しく頼みます！そして第一回目は日本クラスト・ハードコア・バンドFRAMTIDのギタリスト、JACKY CRUST WAR！が登場！熱いぜ！

INTERVIEWED: 二ツ木正康

■こんにちは、早速ですが始めます！まず名前とギター・インタヴューなのでギター歴をお願いします。



「JACKY/FRAMTID。ギター歴は20年(マジ)」

■最初に買った、手に入れたギター、それは何故そのギター??

「アリアプロの青のシングルコイル/安くてかっこ良かったから」

■形はストラトキャスターでしょうか?カッコイイとはギターのルックスが?もしくは実はPUNKとか関係なしにDEEP PURPLEやクラプトンがカッコイイと感じてたとか?あります?そのギターの現在は?

「ストラト・タイプのとんがったシェイプでピックガードなしの色はブルー・シェードってやつ?そうギターのルックスがカッコ良かったから。それだけ(笑)。あの頃はバウハウスとかバースデー・パーティーとかのニューウェイヴも大好きで。あとモトリー・クルーとかも好きでクラシックなロックには全然興味なくて、その良さがわかったのももっと後の事やったと思う。実はそのギター買ったのは15の時で20までバンドはおろかスタジオに入ったのも遊びで数回だけであとはひたすら家で音楽聴きながら弾くマネして遊んでた。あのギターはまだ実家にあると思う」

■現在までに影響を受けたアーティスト/ギタリストをあげてください(簡単に理由も)。

「目の当たりにした中では
BONES(DISCHARGE):ハードコア＝DISCHARGE、DISCHARGE＝ロック、ハードコア＝ロックである事を再認識
コーキ(WARHEAD):いつみても狂悪でレイジング、ハードコア・パンクを体現したギタリストやと思う
GABBA(FUK):ノイジーに弾く事と単にノイズを出す事の愕然たる違い
KAWAKAMI(DISCLOSE):彼がいなかったら今の自分はいなかった
MASAYASU FUTATSUGI(G.A.T.E.S):マニアックなだけでなく実力も兼ね備えている
COLLAPSE SOCIETYの最初期のギタリスト:あんな汚いノイズ・ギター他に聴いたことがない」

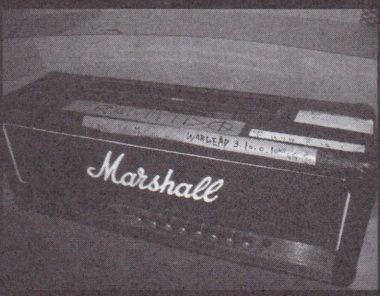
■目の当たりにした～とご自身でも前置きをされていますが、百聞は一見にしかず的なものを最も大切なものとしていますか?(僕まで入ってますね・笑)BONESに対しての見解はオリジナルに対して感じていた想像/妄想が実際目の前で見て間違いなかったというところでしょうか?今現在ご自身が20年経った今でも持ち続けている、オリジナルに対しての想像/妄想を音的に幾つか挙げてください。例えばAKE(MOB47)のエフェクターは常に電池が切れ掛かってるに違いないとか、そんなことでもいいです。

「やっぱFRAMTIDはライヴ・バンドでありたいしそうなるとどんだけ音源を聴きまくってても自ずとライヴを観て吸収する事が重要になってくると思う。ましてやハードコアとかになったらテクニックよりも表現力とか存在感の方が重要やと思うしやっぱそれは実際に目の当たりにしないと伝わらんもんやん?BONESに関しては実際観て間違いなかったとゆうよりはそれ以上の巨大な、ハードコアのみならず「ロック」そのものを動かした人間の存在感に圧倒されたってゆうか。BONESが黙々とプレイするのを観ながら思ってん、一体DISCHARGEはどこから来たんやろう?って。MOTORHEAD、JIMI HENDRIX、BLACK SABBATH、ASH RA TEMPELとかが頭によぎってライヴを観ながら時空飛行をしてるような不思議なかんじやった。オリジナルに対しての想像/妄想?例えばCONFUSEはレコーディングの時ギター持って引っ掻き回しながらただ暴れ倒してただけやったんやないかとか?CRUDE SSのメンバーは本当に鬱病やったんちゃうかとか?DARKTHRONEはものすごく軟らかいピックを使ってたんやないかとか?ANTI CIMEXのCLIFFがBATHORYのギターやったってゆうんはやっぱりただのガセなん???」



イコライザーのセッティングが凄まじい!!

この900には私も散々お世話になってます。



■その影響は今現在どのように自分のスタイルに反映されていますか?

「正直どう反映されているか自分でもわからない。ただ気持ちだけ。スパイク、ノイズ、D-BEAT」

■ライヴでAMPを2台鳴らすってアイディアはKAWAKAMI君の方が最初でしたか?僕はKAWAKAMI君にはDISTORTIONっていうのはエフェクターではなく自分自身でかけるんですよ。DISCHARGEだってそうでしょ?と嫌味をよく言っていました(笑)。

「DISCLOSEのステージを初めて見たのは実は大分の野外フェスんときやってん。青空とグリーンの芝をバックに鋲ジャン/D-BEATってゆう(笑)。あんとき俺まだFRAMTID始める前やったけど確かKAWAKAMI君のアンプは既に2台やったと思う。やっぱギターばかり馬鹿でかくてレコードと一緒やな〜って(笑)。まあ彼のギターの出し方ってのは単にDISCHARGEだけやなくDISCARD/MOB47/CRUDITYとかのボウリング・スタジオ・サウンドての?あのジャー!ってゆう独特のサウンドを出したいっていつも言ってて研究してたみたいやから。その結果ちゃう?」

■個人的なギター練習はしますか?

「あんまりしないほうかも。曲考えたりライヴ前に通すぐらい」

■ライヴ前に自宅で通す時は鏡の前で練習しますか?僕は正直、そうやっていました(笑)。人に見られるわけですからやはりそう意識してました。その辺はどう思いますか?僕はステージの練習ってそうあるべきだと思いますが。曲の進行の流れをつかむってのもそういうことだと思います。

「俺も正直そうやってましたよ、昔は夜の窓ガラスとか利用して(笑)。でもボクシングみたいに本番前のシャドウ・プレイってゆうの?あれは今でも効果的やと思う」

■ギターのコレクション、所有している本数とその内訳、特徴。

「そんなんありまへん」

■後期GLOOMに参加していた際に使っていたプリンスみたいな(笑)ギターはどうなりました?あの当時はGLOOMメンバーの要請か?!フロイドローズ(アーム)に拘ってましたよね?フロイド載せるのに5万かかったって言ってたのはメインのイーグルに載せたんでしたっけ?今現在、アームを使おうと思いますか?

「そうなんあれってプリンスなん??そう思いながらほくそ笑んでたんやな実に君らしい(笑)。いやあれはGLOOMの要請でもなく単に気分転換で。あんとき自分的にGLOOMで弾くとゆう事はそりゃまさかの一大事やったから実は安もんやってんけどギターの一本でも買って心機一転でも図ろうかと。FRAMTIDとはまた割り切って打ち込みたかったし。アーム付いてたけど今思えば恥ずかしいくらい使い切れてなかったよな…。ほらCHAOS UKとかCRUCIFIXとかFINAL CONFLICTとか聴いてたら出てくるやんアームでドキューン!てやつ。あんな風にできたら良かったんやろうけど。あのギターはでもGLOOM解散してからは全く触らなくなってそのまま放ったらかしにしてたら知らん間にボロボロになって引っ越しの時に処分した。そうフロイドは時期的にいつやったかもう忘れたけど5万ぼったくられたあげく今のイーグルにまだ付いてる…。けどもうアーム自体動かないようにギター本体に固定してあってもう使えなくしてあるから。ホンマ呆れるやろう(笑)」

■現在の使用ギター、AMP、エフェクターを教えてください(機材の特徴も踏まえて)。メイン・ギターのイーグルの型番ってわかりますか?それと、スペックなんかも…(材、PUなど)。ソレと何故イーグルだったのか?というのもお願いします。

「BC RICH EAGLE/マーシャルJCM900/ヤマハ JC/DOD-GRUNGE/BOSS G-EQ。
R 0379って書いてあるけど?スペックはわからんなあ…。前にも答えたけど俺モトリー・クルーが好きであのバンドはB.C.RICHでイメージがスゴくあるやん?で漠然とB.C.RICHにしようと思ってて。でもワーロックとかモッキンバードはやっぱ形が派手で自分とイメージが違う気がしたからイーグルにした。何か楽器屋で実際手にしてずっしり重みがあってスゴい音が出そうな気もしたし(笑)」

■このJCってのは拘りですか?それとも必ずどのライヴハウスにもあるからですか?KAWAKAMI君や、最近で言うとヒロシ(D-CLONE)なんかは恐らくそー言えば別にJCでなくても…っていう感覚でマーシャルを使い始めたようにも思いますが。

「そう。どのライヴハウスにもスタジオにもあるから。ライヴの度に音が変わるのも嫌やったしライヴ直前に4人で本番同様のテンションで練習してそれをそのままライヴで出したいってのが常にあるから。勿論マーシャルがあればマーシャルでもよかったのかもかもやけど」

■使用している弦、メーカーとゲージとPICKのタイプを教えてください。FRAMTIDは半音下げですよね?

「弦は(アーニーボール)SUPER SLINKYのピンクで、ピックはフェルナンデスの滑り止め付きのおにぎりM。そう半音下げで」

■セッティングを教えてください。ここで自分の音の拘り、特徴もお願いします。

「ギター→DOD GRUNGE→二股ジャックで分けて、1.そのままヤマハJCへ、2.BOSS G-EQ経由でマーシャルへ。JCのノーマルなディストーション・サウンドとマーシャルのノイジーな音を同時に出せばDISCARDのEPみたいな輪郭のあるノイズ・ギター音が出せるのでは?とゆう単純な発想で始めた。音が潰れないようエフェクターの目盛は控えめに、がポイントかな?とにかく芯があってノイジーに抜ける音。でも一番大事なのはやっぱ気持ち、とゆうことで」

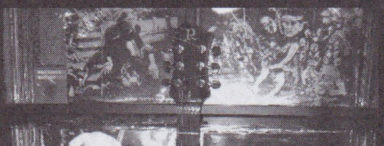
■僕は最初、JCの方で低い音域を出すことに理解が出来ませんでした。只、実際いじってみるとそのほうがセッティングがラクですよね?単純にそういう理由ですか?上記の質問とすこし被りますが、それともJCには何かそうセッティングする根拠があるのでしょうか?

「またまたそんとき言うてくれや〜もう遅いっちゅうねん(笑)。でもそう単純にセッティングが楽やから。まあ最初は理解できない無茶苦茶な事でも長く続けてりゃ定着するって事よ」

■ありがとうございました。

今回のキーワード

一番大事なのはやっぱ気持ち、とゆうことで



BC RICHイーグル、ガンガンに使い込まれ妖艶な雰囲気すら醸し出している。
フロントPUがはずされメクラがうってあるのが ポイント。

SATANIC OCCULT DEATH III

TEXT:二ツ木正康

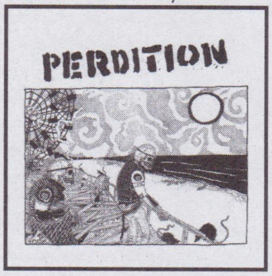
TOXIC HOLOCAUSTというかJOELの人気に少々、ショックを受けました。羨ましい、って(笑)。
けどヤツは全然変わってなくて、相変わらずレコードの話、バンドの話をキラキラと話していました！GO！JOEL！GO!もっとBIGになって貰いたいです！それでは今月も行きます。

NEKROMANTHEON/Divinity Of Death



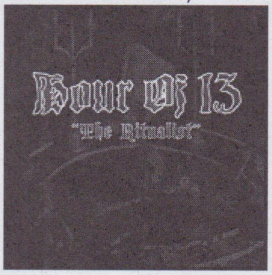
ノルウェー・スラッシュメタルの2ndアルバム。パッと聴いてこれノルウェーでしょ?と言葉が出てしまったほどに、やはりDESTRUCTION臭全開のリフが良い。ヴォーカルが入るとアレ?!っと一瞬思わせられたが、どうやら1stの頃の専任Voは脱退してしまったらしい。絵に描いたようなドカドカ・サウンドで(ホントに！)良いんだけど、POSSESSEDパクリは友達なら許せるけど、やっぱちょっと笑っちゃうな。
(High Roller/HRR108)LP

PERDITION/ST



NYクラスト新作2nd EP。超直球バンド名ですがDISORDERと言うよりSWEですね。しかもダ・ズーズ・タイプではなく、日本人ぽいちゃんと頭も使ってるタイプ。私はダ・ズーズ・タイプが大好きですからもっとFILTHKICKみたいなベタなクラスト・バンドが出てきてほしいですけどね。残念ながら200円になっちゃうのが悲しい現実か…。
(Distort Reality/distort7)7"

HOUR OF 13/The Ritualsit



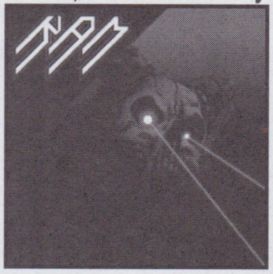
USオカルト・ドゥーム2ndアルバム。そうこのバンドはオカルト臭があって、けど、とてつもなく重苦しくは無く、オシャレと本気のバランスが私にとって丁度良かったんだけど、何か今回の作品はBLACK SABBATHの曾孫のようなサウンドの方が私にとっては耳に付いてしまい、こんなんだったっけ?という??マークが飛び交ってしまった。確かに70's METAL/ROCKな感じは残っているが…。SABBATHか…。
(Eyes Like Snow/EYE013)LP

MORBID MACABRE/Hell And Damnation



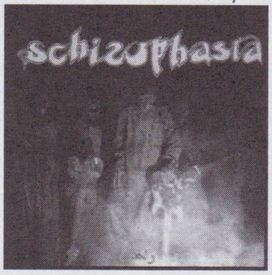
コロンビアデスMASACREのVoらによる当然DEATHMETAL。90年代SWEハードコア・シーンなんかでも今更の重鎮がベッタベッタのDISCHARGEタイプをやり始めたりしていましたが、このバンドもDEATHRASHって言えばSARCOFAGOだろ！ボケ！って感じの神が神をリスペクトする方向性。リスナーが回りまわって、こういう作品は数年後に評価されると思います。
(Obliteration/ORCD 088)CD

RAM/Forced Entry



スウェーデンのスーパー・ヘヴィメタル・バンド2005年1stアルバム・アナログ化。この内容たるや、全くモテ要素のない、バンド仲間にしか受けないのでは無いか?!と思えるほどにスーパー・ヘヴィメタル！全てのパートが本物過ぎて辛い！NIFELHEIMと仲が良いようですがソレもわかる話のPUNKSには全くNO THANKSな代物！クサって無い!最高!!
(High Roller/HRR122)LP

SCHIZOPHASIA/ST(1st)



JO！なかなかやるな！彼はジャーム・アタックで先日来日。私は本人に会って彼の事が実際に会う前よりちょっと好きになりました。と言うのも会うまでのイメージが凄く…(笑)。彼は彼なりに色々あるようです。コレはそんな精神性がガッツリ出てる音源ですな。キーワードはノイズコアですが2010年型前衛的！
(SMRT/品番なし)7"

GHOSTRIDER/Mayhemic Destruction



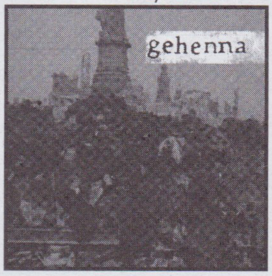
NECRODEATHの前身バンドの84年デモ・アナログ化。一言で言うとノイズ・ブラック・ヘヴィメタルと言った所ですが、誰が一番黒いMETALをやれるか大会にナチュラル・エントリー！というような感じで、HELLHAMMERと400年ぶりの再会は果たせなかったが、イタリアで同じ衝動を発していただろうという所が裏ジャケのブラックRAVENオマージュに象徴されています！
(F.O.A.D./007)10"

AT WAR/Infidel



遂にアナログ化！そしてようやく私も聴きました。先日の来日はとてつもなく良かったと見に行った人は必ず私にそう感想を述べてくれましたが、レコード聴いて驚いた！3回聴きましたが私自身は全く引っかかりません。これぞ元祖ニュールネ魂2010！と言った所でしょうか?サウンドはMOTORHEADタイプ。数年後の再会を誓いそっとレコードを棚にしまいました。
(Heavy Artillery/HA5-5009-1-3)LP

GEHENNA/CALIFORNIA LOVE



買いました。だってUSメタルコアGEHENNAだぜ！ファミコン買うとドアドアが付いて来る！そんな仕様の本作はSplit 7"/CALIFORNIA LOVEの他に、"The Hope Guzzo Bootleg"というタイトルのGEHENNAのライヴ12"と、本編Split EPとは多分何も関係ないTHE LOVE BELOWというバンドの単独7"が付いた、7"EP x 2枚 + 12" x 1枚の変則パック!!です。BOYからコピペ(笑)。ゲヘナ相変わらず渋いです。
(a389/-039)Split 7" PRE-ORDER PACK

PISTONS+BESTHOVEN/Split



イタリアン・パンクス?!PISTONSと、御存知ブラジリアンBESTHOVENのSplit CD。ピストンズは少々気の抜けたSUPER CHRISTのようなMETAL6:4PUNKMOTOR-DISCHARGE全開でちょっとと言うか驚いたことにかなりカッコイイ！ベストーベンは始まった瞬間に笑みがこぼれる何の変哲もない300円D-BEATでマジしびれます！Never Change PLEASE!!
(Heavy Artillery/HA5-5009-1-3)CD

THE THUNDERBOLT! VOL.5

TEXT:TAKAYAMA（NIGHTMARE/PUNK AND DESTROY/FRAMTID）

こんにちは！POLANDのバンドが好き過ぎて飛んで行ってしまったYAMA-G編集長のおかげで、原稿も少しの間、とりかかる必要が無く、他のお仕事をちょこまかやっておりましたが、時の流れの早さかな、何時もの如く、気がつけば締め切り直前ではありませんか！？これまで一体全体なにをウダウダと書いてきたのかさえ忘れかけていた自分ですが、まだいける、まだやります！怒涛のライヴ・ラッシュの最中、時間と時間の合間を疾走し、昼と夜をかきまぜて朝まで書きました今回も！「The THUNDERBOLT!!」vol.5です！よろしくです！

以前、自身のバンド、FRAMTIDで、EFFIGYにお誘いを受け、四国は讃岐うどんMAGMA HELL、香川県にLIVEをやりに行った時のこと。会場でのサウンドチェックも終え、特に何する訳でも無い我々、ブラブラ会場近辺を歩いてると、某中古レコード屋を発見したので、もちろん入店。サクサクとチェックを入れるメンバー達、僕も軽く物色。すると、店番の女性店員が話しかけてきた。なんでも、ハードコア・パンクに精通した方のようで、「FRAMTIDの皆さんですよね？今夜行きます！よかったらサイン書いて欲しいです〜」ときたもんだ。サインと言っても、かっこいいのがある筈無く、単に署名みたいなものになってしまうし、皆、即答で断ろうかという空気だったが、僕は言いました。「あの横に飾ってもらえるのなら書きますよ！」と、そう言いながら僕が指差した場所には、そうです、「ザ・クロマニヨンズ・ヒロト・ハァト」みたいな、昔と変わらないあの字で書かれたサインが飾られてあったのです！店員さんにも快諾していただき、めでたくヒロトの隣に飾られたFRAMTID 4人のサイン。こんな事でも自分にとってはなかなか感無量な出来事だったりするもんで、「俺もついにヒロトと並んだぜ！」と、かなり興奮していたのをよく覚えています。誰が何と言おうと、確かに、並んだものは並んだんですから（笑）これマジで！いやいや、音のタイプの違いや規模の大きさ等、まったくどうでもいい事は抜きにして考えてみるまでも無く、うんうん、よしよし、やっぱし俺はヒロトと並んだのだ！今でも飾られているなら嬉しいが、多分もう無いかなぁ、どうかなぁ？という、相変わらず、ちんけな事で一喜一憂する自分が可愛らしい、というどうでもいいお話でした！

またとある日、仕事中に用事に出かけた際、某レコ屋の前で某友人が携帯電話片手にあたふたあたふたしていた。「おはよう！久しぶり、元気？」と声をかけたのだが、なんでも聞くところによると、店内でヒロトとマーシーが買い物しているらしい。「凄いタイミングで通りかかったなぁ自分！！もちろん握手＋写真くらい、いっとくんやろ？行こや行こや！」等と友人は言うが、きっぱりと、僕にはその意思はありません、という事を友人に伝えました。だって、ライバルに握手求めに行くだなんて、そんなの、なんか、ちょっと、ねぇ！？（笑）冗談はさておき、休みの日にレコード屋をCHECKしてる有名人に話しかけるという迷惑行為、する気になれなくて。僕自身も（もちろん有名人なんかではないですが！）稀に「握手して欲しいです」とか、「サインしてください」とか、「写真撮ってください」とか声をかけてもらう事もあったりして、まぁ、少し知っている人だったり、ある程度言葉を交わした上で、なら写真を撮ったりするのはまだ解る、しかし、やはり握手など求められても困ってしまうし、なんだかな、と思います。一度、店で仕事中に入ってきた変な女が、突然、「あの、Nightmareの高山さんですか？ファンなんです握手してください★」等と実はどうでもいい感じで声をかけられた時など、一応握手はしたものの、自分に対しても虫唾が走るような、虚しい気分になったものです。

多少は意図的にそうしているとは言えども、脈略の無い展開が続いており自分でも何の話をしているのかますます不明ですが、テーマを設けるなど本連載においては無用です！よね？という事で、前回最後の方で、「ナビゲーター」についてちょこっと書いたのですが、その流れでいきますが、この曲は本当に詩人としてのヒロトの才能が炸裂したナンバーですよね、今でも涙無しには聴けない、それ位美しい一曲です。20代後半にさしかかろうとするヒロトに、どうしてこの様な詩が書けたのか。夜空の星々と交信し、季節の妖精たちと戯れる、森羅万象を受け入れ、喜びも哀しみも我と共に、心の声を信じてただ生きる、といった感じの生命賛歌。途中の大サビでは、「ああこの旅は　気楽な帰り道　のたれ死んだところで　本当のふるさと」と歌い上げるヒロトに感動もMAX！私事ですが、僕は、ゾンビ映画の観すぎでしょうか？暇さえあれば死の事ばかりを考え、生きているのがしんどくなる程、本当に死を恐れていた、暗い少年でした、それでも18歳頃になると自分にとっての日々日常を世間の荒波にもまれながら必死で生き抜くほか無く、ただ我武者羅に。そうこうして、もがいてあがいて生きてきて、ヒロトやマーシーの言う様に、「死んだらそれでさようなら」や「最悪でも死ぬだけだから」や、上記「ナビゲーター」の大サビのいう様な心境へ辿り着いたのは、せいぜい30歳になった頃ようやくだと思うし、だから、「ナビゲーター」、昔から大好きな曲だが、本当に理解できたのはつい最近の事だと思っています。この奥ゆかしさったらどうでしょう！？そして、また改めて喰らった時の衝撃と感動ったらないですよ！いやいや、若かりし日は、ご多分に漏れず、中年なんて糞喰らえ！なガキパンク気取っていましたが、それなりにそれなりを経てきてまた聴くThe BLUE HEARTS、うんうん、いいもんです。

前にも書いたが、The HIGH LOWS以後、確信犯的に、「ロックンロール以外どうでもいい」的な姿勢を貫くヒロトですが、やはり、それにつれてファン層も、「イェーイ！」とか「ロックンロール最高！」みたいな、ただそれだけな層が増えたように思うのは、時代の流れの所為もあるのでしょうか？なんかそんな感じがします。ザ・クロマニヨンズのライヴに居る、皆おそろいのツアー・シャツを着た人達の群れは自分にとって通勤ラッシュのスーツ族と同じ位、理解に苦しい存在ですし、皆同じ動きをしてて、気味悪いです。西成に産まれ育ち、道行くホームレスの人々を見て見ぬ振りもする事もできないまま、そこそこ裕福な我が家庭に疑問を抱き、世の中に違和感を感じ、そして未来に絶望さえしていた12歳の自分の心を、まさに電光石火で撃ち抜いた、「気がくるいそう！」あれはそう、間違い無く、「わ、かっこいい！」とか、「ごきげんレディオだね！」とかそういうレベルの話では無かったし、そうして出会ったパンク・ロックは、自分にとっては皆と共有して楽しめるような軽い存在のものでは無く、明日無き世界を生きる自分を勇気づけてくれる唯一のやさしい存在、そういうものでしたし、「俺の為にあるものだ！」だったし、そしてもちろん今でもそうだ。以来、僕にとって音楽とは聴くもの、では無く一発喰らうもの、ガツンときてなんぼのモノとなったのでした。

ザ・クロマニヨンズの4枚目のアルバム、「MONDO ROCCIA」。これが、素晴らしい、とにかく最高。駄作だ駄作だと言われている前作、「FIRE AGE」の、今ひとつ抜けきらなさが嘘の様に、ハッと目が覚めるようなノリのいいナンバーが目白押しで、2nd「CAVE PARTY」と並んで傑作でしょう！B面中盤に収録されている「突然バーン」という曲。これが、先に述べた様な、僕が音楽にガツンとやられた時やその後の感情など、あの凄まじいパンク・ロックンロール原初体験を、素晴らしい唄いまわしで代弁している！そしてそれだけに留まらず、超的確そして間違い無さ過ぎて、図らずとも聴く者に再びあの衝撃と同等のモノを喰らわせてしまうという、言わばフラッシュバック効果もある、当たればイチコロ必殺ナンバーだ！同じように喰らいまくっているThe BLUE HEARTS時代からのファンの方も多いと思います、8ビートのファストなパンク・ロック・チューンなのだが、「ある日突然　稲妻のよう　一人じゃないんだな　もう」などと、僕はもう、マジで涙無しに聴けません！（号泣）OK、大人になってみたところで、やはり傾いたこの世界から転げ落ちそうな我々を、今日もパンク・ロックがケツを蹴り上げる。少年の唄は、今でも君の胸には聞こえてくるか！？YES, 高須クリニック！

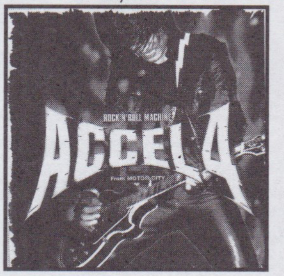
ところで、6月9日（ROCKの日と言うのは嫌いなので言わない！）に遂に出ましたね、The BLUE HEARTS DVD BOX！あんだけ、あちこちで、「買う！」だの、「買うっしょ！？」などと豪語していた私ですが、5月末〜6月頭に集中した諸々の出費がかさみ、あろう事か6月10日現在、未購入！Ex-ファンみんなで事をおこそうとするブルーハーツ集団団員、自称ソウル・ヒロトラバーな自分としてはあるまじきこの体たらく！（大汗）などと言いつつ、実際のところは単なる過去の焼き増しに、高いお金を払うのがなんだかバカバカしくなっただけなのですが…、あ、でも、プレゼントだったら、まぁもらってもいいかな？なんちゃって！（笑）それでは、今回もこの辺で、まぁ、こんな感じでした、どうですか皆さん？（笑）また次号EL ZINE誌上でも、のたれ死んでなければ、The THUNDERBOLT!!よろしくお願いします！ありがとうございます、押忍！

LASHING SPEED DEMONS VOL.7

TEXT:大越よしはる

…いろいろ考えましたが、結局ガレージ特集・その2、ということになりました。前号でも書いたとおり、"ガレージ"というのは非常に間口の広い音楽用語で(狭く捉えれば幾らでも狭くなるのは"サイケデリック"同様だ)、ここでも前号同様、革ジャンのR&RからブルーズR&Bのアヴァンギャルド解釈みたいなのまで、60年代から21世紀まで、CD棚のあちこちから無闇に引っ張り出しては並べてあります。基本的には速くてやかましいやつ中心。

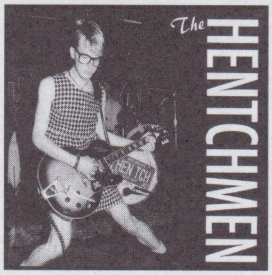
ACCEL4/KAWASAKI Z



ガレージというか、R&Rだが。GUITAR WOLF(前号で紹介)の実弟:アキラ・アクセル(Vo,G)が率いていたトリオの2ndアルバム(もう10年前か!)。やはり兄弟だけあって路線的にはGUITAR WOLFに近く、一方で兄よりもいい意味でひねりのないファスト&ストレートな爆音暴走R&Rを展開。アキラはその後THUNDERRORDSを結成し、現在更に精力的に活動中。

(DNA CAPSULES DNAC-006)CD 2000年

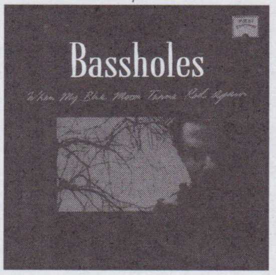
THE HENTCHMEN/Hentch-Forth.Five



90年代のデトロイトが世界に誇るプリミティヴ・ガレージ番長。WHITE STRIPES結成当時のジャック・ホワイトが参加していた98年の音源をCD化したもの。90年代前半までのこのバンドの特徴だったグダグダな脱力感が後退して、かなり元気良く踊れるサウンドになっているが、コレはコレでガレージ・マニア以外にもとっつきやすい、カッコいい仕上がりになっていると思う。

(ITALY IRCD-001)CD 2007年(98年録音)

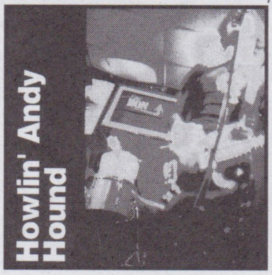
BASSHOLES/WHEN MY BLUE MOON TURNS RED AGAIN



オハイオ発、元GIBSON BROTHERSのドン・ハウランド(G,Vo)が92年に結成し、現在も活躍中の古株トラッシュ・ブルーズ・デュオ(時々二人じゃなくなる)。ギターとドラムで壊れたブルーズを、というとまあよくあるタイプだけど、この人たちは楽曲と演奏の振幅と壊れっぷりが半端じゃない。どのアルバムもいいけど、ここではJOY DIVISION(!)のカヴァー演ってる98年作を。

(IN THE RED ITR059)CD 1998年

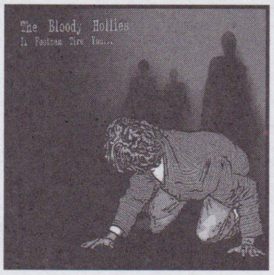
HOWLIN' ANDY HOUND/THE ELECTRIC DREAMS OF…



よくあるガレージ系ブルーズというかブルーズ系ガレージ…とか思ったら予想以上にハードでヘヴィでぶっ飛ばされた1枚。カヴァー曲がLOLLIPOP SHOPPEにSIR LORD BALTIMOREにUFO(!)って…頭おかしいよ(笑)。いわゆるガレージ系でここまでハード・ロック入ってるのも珍しいと思うけど、一方でメタリックな部分は皆無(UFO演ってるのに)。かなりお勧め。

(MOD HOLLAND ENTERPRISES MH-003)CD 2001年

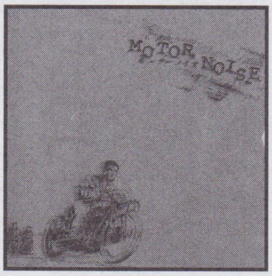
THE BLOODY HOLLIES/IF FOOTMEN TIRE YOU…



生粋の"ガレージ・パンク"じゃなくて今風のいわゆる"ガレージ・ロック"の類を聴くなら、西海岸のALIVEはけっこう見逃せないレーベルだ。このバンドはニューヨーク州バッファロー出身のトリオで、ちょっとダークで切迫したムードのあるロウなR&Rをとにかくもの凄い勢いで演奏する(ヴォーカルがヘンな声)。「Gasoline」とか「The Fuzz」とか、短くてズバッとした曲名もイイ。

(ALIVE 0063-2)CD 2005年

HOWLING GUITAR/MOTOR NOISE



ノイズまみれのハードコア・インストゥルメンタル・ガレージ・ロッキンな日本のトリオ、といってもMAD3あたりとはまた全然違った質感を提示するバンドの、コレは1st(コレももう10年前か!)。その後音楽性の幅を徐々に広げていく2nd、3rdもイイが、ストレートな疾走感とピュアな爆音ぶりではこのデビュー作が一番。しばらく音源が出ていないんだけど、新作が待望される人たち。

(P-VINE PCD-4122)CD 2000年

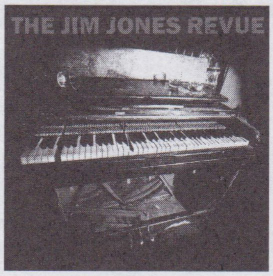
CAPTAIN BEEFHEART & HIS MAGIC BAND/SAFE AS MILK



コレは、いわゆるガレージじゃ、ない…と思うんだけど、このバンドの初期音源はRHINOの『NUGGETS』シリーズに収録されている。まったく正体不明の音楽になる60年代末と違って、確かにこの1stアルバムの時点では一応白人のR&Bみたいなことをやっていて、なるほどガレージとして聴けるビートの利いたR&Rも入っていたりするんだが…やっぱりイカレてる。このページ的には無視出来ない存在。

(BMGファンハウス BVCM35031)CD 1967年

THE JIM JONES REVUE/THE JIM JONES REVUE



90年前後にTHEE HYPNOTICSというSTOOGES直系ネオ・サイケ、みたいなバンドをやっていた人が、今やってるバンド。ガレージというか、レーベル名を見てくださいという感じの、先祖がえりしてリトル・リチャード直系になっちゃったみたいな(実際カヴァーもやってる)。しかしまたコレがとんでもなくワイルドでやかましく、相当イカしたバンドになってます。お勧めです。

(PUNK ROCK BLUES CD002)CD 2008年

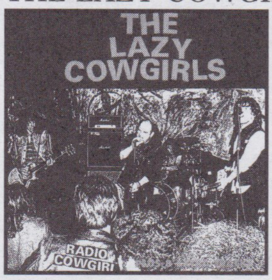
THE FLIP TOPS/ALL WORKED UP



今号のRIP OFF RECORDS枠は、女性ベーシスト(東洋系?)含むポートランドの4人組。ガレージ・パンクというよりも、70'sパンク風のシンプルな楽曲をタイトかつ小気味よいスピード感でぶっ飛ばす、この頃多かったタイプのバンド。00年代後半にドカドカ出てくるBUSY SIGNALSとかの70's風アメリカン・パンクの系譜は、このあたりから種まきが始まっていたのか、と思わされる。

(RIP OFF #058)CD 2002年

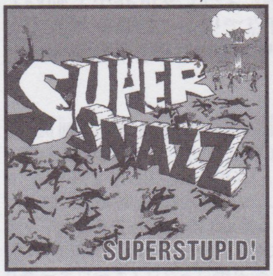
THE LAZY COWGIRLS/RADIO COWGIRL



いわゆるガレージ・パンクというよりも、生粋のアメリカン・パンクという感じのR&R(RAMONES、NEW YORK DOLLSなんかのカヴァーも)。CDは御覧の通りSYMPATHYの記念すべき1番で、全19曲入りの拡張盤、とにかくストレートでタフでハードで、そしてスピーディ(本誌的にコレ大事ですね)なR&Rが目いっぱい詰まってる。解散直前の来日公演も素晴らしかったな。

(SYMPATHY FOR THE RECORD INDUSTRY SFTRI001)CD 1989年

SUPERSNAZZ/SUPERSTUPID!



メンバー交代を重ねて今も活動中のバンドだが、1stアルバムはグランジ/オルターナティヴ真っただ中の時代で、原盤はあのSUB POPからだったのであります。熟練のポップ・センスを聴かせる現在と違って、17年前(!)の彼女たち(当時はオール・ガールズ・バンドだった)の音はキュートでポップながらもラウドでファストでワイルドで歪んだキラーなガレージ・サウンドだった。

(ソニー SRCS6734)CD 1993年

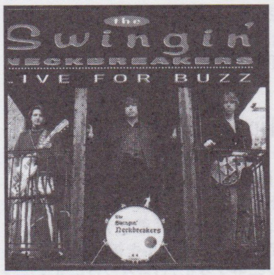
THE TIME FLYS/FLY



オークランドの若手注目株のデビュー作。60年代ガレージと70年代前半のプロト・パンクと初期パンクを全部混ぜてスピードアップして、そこにROLLING STONESとかのメジャーなバンドの色気とスター性も加えたみたいな、妙に大物感を感じさせるバンド。音楽的には全然似てないけど、日本のバンドでいうと毛皮のマリーズ(メジャーデビューしちゃったなあ)みたいな存在感。

(BIRDMAN BMR77)CD 2005年

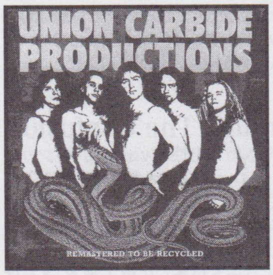
SWINGIN' NECKBREAKERS/LIVE FOR BUZZ



このバンドが出てきたときはもの凄く興奮した。DMZとかHYPSTRZみたいな混じり気なしのピュアなガレージ/R&Rを90年代に(当時)リアルタイムなバンドがぶっ放していたから。もう10年アルバムが出てないが、まだ活動してるらしい。00年までに4枚のアルバムがあって、4作目は国内盤も出ていたけど、勢いと瑞々しさはこのデビュー作がダントツ。もう部屋で踊り狂うしかない。

(TELSTAR TR012)CD 1993年

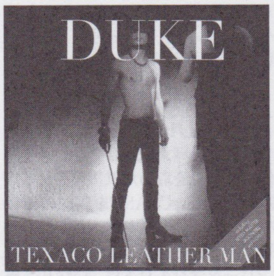
UNION CARBIDE PRODUCTIONS/REMASTERED TO BE RECYCLED



90年前後に活動していたスウェーデンのガレージ/サイケデリック/オルターナティヴ・バンドのベスト。当初STOOGES直系と評されたが、それだけでは済まされない狂気じみた不穏さと音楽的な懐深さを持っていた(後期はスティーヴ・アルビニがプロデュース)。後身バンドと言えるTHE SOUNDTRACK OF OUR LIVESは世界的にメジャーな存在になったが、EL ZINE的にはやっぱりこっちだ。

(MNW MNWCD2011)CD 2004年(87〜92年録音)

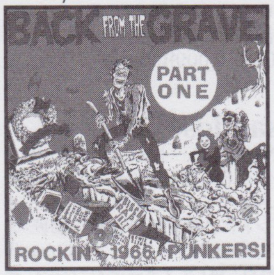
TEXACO LEATHER MAN/DUKE



80年代からやってるのに、このイカレたテンションは一体どういうことなのか。MONKS(前号で紹介)の悪意と狂気を東京ガレージ・シーンで発酵、いや腐蔵させたような、というかこのバンドの凄まじさは180字では紹介し難い。銅鑼が打ち鳴らされヴォーカルが日本刀振り回してギターはケツに酒瓶をぶち込みベースはどこまでもセクシー…な、あの強烈なステージを一度は観てほしい。

(ミュージックマイン FICA2004)CD 2003年

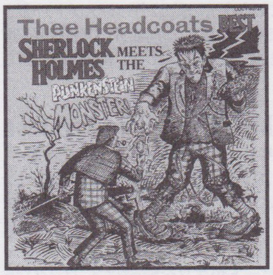
V.A./BACK FROM THE GRAVE PART 1



60年代ガレージの編集盤といえば『PEBBLES』とかいろいろあるんだけど、後にDEVIL DOGSとかを出すことになるこのレーベルのこのシリーズが、多分一番か二番に本誌向けだろう。それもこの第一弾が。SWAMP RATS(本誌VOL.0で紹介)あたりを除くとラウドとかファストとかいうことはあんまりないけど、何しろプリミティヴ。そして「こっちのがパンクだぜ!」という編者の心意気。

(CRYPT CD-0123)CD 1983年

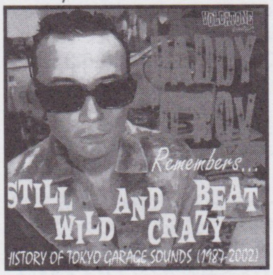
THEE HEADCOATS/BEST



とりあえず手元にベスト盤があったんで載せておくが、このバンドのレコード/CDならアルバムでもシングルでも全部お勧め。MUMMIES(前号で紹介)とかの西海岸ガレージをはじめ、90年代ガレージのローファイなアプローチはこのバンドからの影響が特大。60年代ビートやなんかの引き締まった音を70年代パンク以降のアティテュードで鳴らしていた、頑固で粋でワイルドな英国紳士たち。

(日本コロムビア COCY-80727)CD 1997年

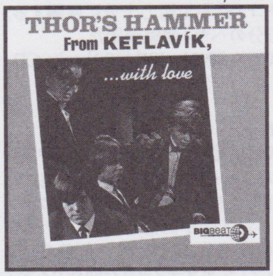
V.A./STILL WILD AND CRAZY BEAT



ハードコアとガレージをつなぐ最重要人物…ハードコアの「EMOTIONAL MARKET」とガレージの「BACK FROM THE GRAVE」と、どちらも伝説的に語られるイヴェントを主催していたDADDY-O-NOV氏プロデュースによる、"HISTORY OF TOKYO GARAGE SOUNDS"という副題通りの1枚。80年代ネオGSから21世紀の音源まで、あまりにも濃密な東京ガレージ絵巻、全14曲。

(VOLCATONE VOL-1)CD 2003年

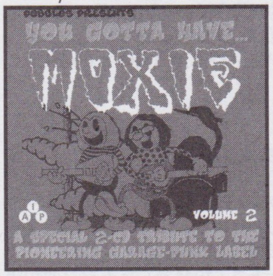
THOR'S HAMMER/FROM KEFLAVIK, WITH LOVE



山路編集長、アイスランドにもハードコア・バンドいるッスか?…ガレージ・バンドはちゃんといました、60年代に。しかも飛び切りワイルドなやつ。オムニバス『DIGGIN' FOR GOLD』で一躍注目されたキラー・チューン「I Don't Care」をはじめとして、ファズがバリバリ鳴りまくるやたらパワフルなビート・ナンバー(だけじゃないけど)がみっちり詰まった編集盤、20曲53分。

(BIG BEAT CDWIKD206)CD 2001年(65〜67年録音)

V.A./YOU GOTTA HAVE…MOXIE VOLUME 2



80年代、オブスキュアな60年代ガレージ・パンクのレア音源を、針音ブチブチのアナログ起こしな音質と超イカレた手描き&切り貼りアートワークで世に出し続けたオムニバス『BOULDERS』を出してたレーベル、MOXIE…の真髄を後世に伝えるべく企画されたオムニバスCD。楽曲や演奏自体が極端にぶっ壊れてるワケじゃないけど、「どう?どうよコレ?」という編者(故人)の気合はMAX。

(AIP AIPCD1062)CD 1999年

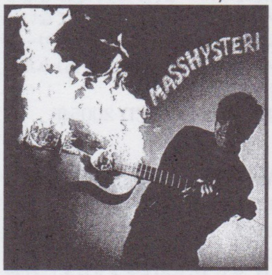
…この原稿を書いているのは山路編集長が欧州放浪をエンジョイしているはずの(?)5月だが、DADDY-O-NOVさんに関してはVIVIDから5月22日に『TSUNAMI ATTACK!! JAPANESE GARAGE ROCK'N'ROLL』というシリーズものの編集盤が3枚リリースされている(コレを書いている時点で未入手)。3枚で96曲(!)収録の決定盤とのことなので、興味ある方はそちらをお勧め。関係ないけどジャズ専門誌「スイングジャーナル」の休刊はショックでした。音楽雑誌冬の時代だなあ。

KISS THE DISC

TEXT:行川和彦

大半が2010年リリースの作品で、一部2009年の発表。パンク・ロック/ハードコア・パンク系のみだ。例によって今世界中で動いているバンドをフォローすべく、ほぼすべてが現行のバンドの新録音の作品である。この原稿を書いた時点でリリース・レーベルでもソールドアウトと判明しているものは省いたから、本誌発売後もしばらくは大半がパンク/ハードコア専門店をはじめとする国内のレコード店でもゲットできると思う。

MASSHYSTERI/Masshysteri



1年半ぶりのセカンド。ツイン・ギターの4人編成になり研ぎ澄まして際立った音の輪郭が鮮烈で、ベースがリードする傷心の疾走感のあまりにもデリケイトなピュア・パンク・ロックに固唾を呑んで耳を傾けてしまった。自国スウェーデン語で歌う女性男性のユニゾン・ツイン・ヴォーカルにも磨きを掛けていて深い。フェラル・ワールド盤LPジャケは硬質で重みも十分。感動的なほどウルトラ・グレイト！

(FERAL WARD　YAN069)LP

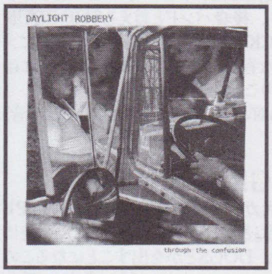
HAYAINO DAISUKI/Invincible Gate Mind Of The Infernal Fire Hell…Or Did You Mean Hawaii Daisuki?



元DISCORDANCE AXISのジョン・チャン(vo)とMORTALIZEDのマツバラ(g)らによるユニットの2枚目。わめき一筋のヴォーカルとメロディック＆テクニカルな濃密鋼鉄ギター中心に、SLAYERばりに加速度で畳み掛けるクロスオーヴァー寄りの"メタル・パンク"が痛快極まりない。DVDパッケージのジャケットで、すべて名曲の12分19秒4曲入りCDに加えて意味不明な20ページのブックレットも封入。

(HYDRA HEAD　HHH666-177)CD

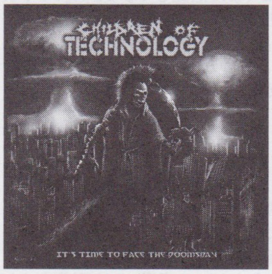
DAYLIGHT ROBBERY/Through The Confusion



女性がvo/bで男性がvo/gとdsのシカゴのパンク・ロック・トリオが、2枚の7"EPに続いて放ったファースト・アルバム。MASSHYSTERIも思い出すスタイルだが、もっと音はハードだしヴォーカルは別々にとるパートが多く女声主導だ。Xをはじめとしてハードコア前夜のLAパンクからアート性を抜いたかのようで、シンプルながらもラフで骨太なアメリカン味のサウンドが苦み走り濃い一枚。

(RESIDUE　#009)LP

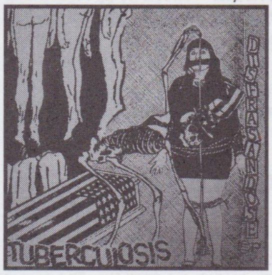
CHILDREN OF TECHNOLOGY/It's Time To Face The Doomsday



DISCHARGEの「Doomsday」からの引用タイトルで放ったイタリアの"スピード・クラスト"バンドのファースト・アルバム。細部にこだわった歌詞(英語)も含めて、鉄アレイがメタルのオイルを補給したような"モーターサイクル・ロックンロール・パンク"は問答無用の暴走族である。フェチなバンドだけにパッケージの自己表現も抜かりなく、CARNIVOREのシャツの女性ドラマーもクールなポスター付。

(AGIPUNK　AG069)LP

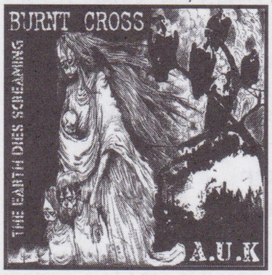
TUBERCULOSIS/Disfrasandose



前号でインタヴュー掲載のマーチンのレーベルが手作り感覚あふれるジャケで放った、LAヒスパニック系の女性ヴォーカルのバンドによる最初の音盤。"師匠"のLOS CRUDOSほどのスピード感はない代わりに泥臭く決してスポーティにならず、ザラついたスラッシュ・パンクと野太い本気ヴォイスで飛ばす。スペイン語だけではなく英語の歌詞もあるのは絶対に伝えたいからだと心に響く怒りの4曲だ。

(LENGUA ARMADA　LA-62)7"EP

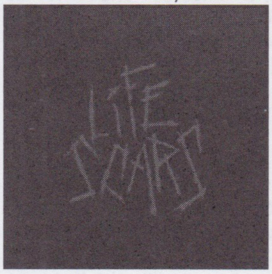
BURNT CROSS/A.U.K/The Earth Dies Screaming



英国のアナーコ系パンク兄弟デュオ同士。3枚の近作7"EPの曲を収めたBURNT CROSSは初期のCRASSとCLASHを哀愁の旋律でミックスしたようでクールだ。80年代頭にCRASSのレーベルから出したALTERNATIVEのメンバーを含むA.U.Kは、AMEBIX風だった7"『Rise』とは違うメロディアスでストレートなパンク・ロックだが、筋金入りの重さである。共に気合十分の約57分の好スプリット盤。

(TADPOLE/ACTIVE REBELLION/RUSTY KNIFE/PUMPKIN/CRAZY PEACE/SOUND FOR A POUND　No Number)split CD

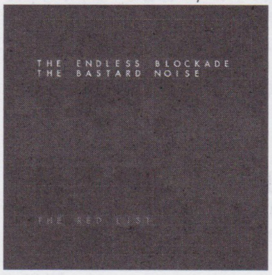
LIFE SCARS/Life Scars



ドラマー以外の3人が女性のポーランド産ハードコア・パンク・バンドの2009年のデビュー・アルバム。政治的な姿勢のDIYアティテュードは16ページのブックレットから伝わってくるが、自国語の歌詞の英訳を読むと普遍的でインスパイアされる。CONFLICTやクラスト・コアも吸収したと思しき曲もよく練られていてカッコイイし、感情的に歌うヴォーカルも胸に迫るデジパック仕様。グレイト！

(NO PARASAN/HASIOK　006)CD

BASTARD NOISE/ENDLESS BLOCKADE/The Red List



"2010年のパワー・ヴァイオレンス"を提示する米国とカナダのバンドのスプリット。BASTARD～はエリック・ウッドとネルソンがやっていたMAN IS THE BASTARDの進化形で、PHOBIAのウォーカー(ds)のビートがケツを蹴飛ばす"ロックな5曲"が最高だ。ENDLESS～はMAN IS～の影響を感じさせる長尺3曲を、ノイズとファストコア込みで胆力十分に展開する。計約63分のヘヴィ煉獄天国だ。

(20 BUCK SPIN　SPIN036)split CD

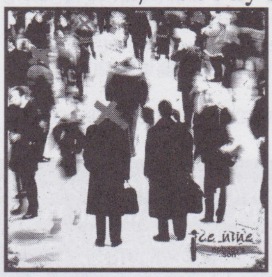
CZOSNEK/Sometimes



タフな女性ヴォーカルがメインで時々ブルータルな男性ヴォーカルも加勢するポーランドの5人組が大半を2009年に録った4作目。いわゆるニューヨーク系のメタリックで分厚い音も混ぜつつ、様々なパンク/ハードコアが交差した多彩な曲が馬力十分な一方、繊細なメロディが潤いをもたらすユニークなアルバムだ。ポーランド語のアナーコ系歌詞の英訳も載ったブックレットの色使いも凝っていて素敵。

(NIKT NIC NIE WIE　No Number)CD

ICE NINE/Nobody's Son



90年代に活動していた当時はカリフォルニアのパワー・ヴァイオレンス勢の陰に隠れてしまった感もあったが、根強いファンも多かった米国中西部インディアナ州のバンドの復活作。これがまた何倍もパワー・アップしてカオティックな曲作りもディープな凄まじい出来だ。憎悪がうねるサウンドは2000年前後のCONVERGEがHIS HERO IS GONEにかきまわされた如しで、これぞハードコア。グレイト！

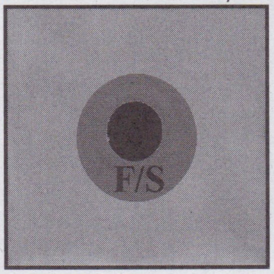
(PRANK　PRANK111)7"EP

POLLUTION/N.S. Drugs



リラプスからリリースのUNEARTHLY TRANCEのメンバーも含むバンドらしいが、ポスト・ロックと対極の生々しいデビュー盤。BORN AGAINSTを思わせるデリケイトなハードコア・パンクで、鉛の沼地から脱却するように定型から逸脱した楽曲にも目が覚める。EPタイトルがナチスの"National Socialism"に引っ掛けたものかと深読みもできるように、ヒリヒリした危険な感触も匂い立つ強力盤。
(DESENSITIZED BKFD-02)7"EP

FOLDED SHIRT/Folded Shirt



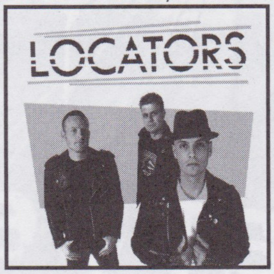
前号で紹介したHOMOSTUPIDSやGRABBIE、DARVOCETのメンバーを含む米国のバンドのデビュー作。彼らの拠点クリーヴランドのパンクの伝統をROCKET FROM THE TOMBS(〜DEAD BOYS/PERE UBU)から受け継いだように、おどけたヴォーカルも音色もリズムも軌道を外れたパンク・ロックが恐らしい。言い訳じみた文字情報に頼るバンドに中指突き立てる如き簡素なスリーヴもナイス。
(FASHIONABLE IDIOTS FIR-037)7"

CURSED/The Last Session



SWARMやACRIDのメンバーらによるカナダの"埋もれた名バンド"。ピール・セッションをやっていたBBCのスタジオで最終ツアー時にライヴ録音をした5曲入りだ。一部日本盤も発売されたアルバムの曲も含むが、邪悪なカオティック・ハードコア的ニュアンスを含みつつ、BLACK FLAG〜BL'AST!〜BORN AGAINSTの流れのヘヴィ・ハードコア・パンク・ロックが、焼け焦げた黒き銀色の光を放つ。
(HIGH ANXIETY ANX-004)7"EP

LOCATORS/Locators



後期GORILLA ANGREBのベーシストが歌い、ヘルキャットとの契約以降のNEKROMANTIXの元ドラマーを含む、デンマークのトリオのデビュー・アルバム。CLASHやSOCIAL DISTORTIONの匂いも漂う77'sスタイルのパンク・ロック調だが、パブ・ロックのように贅肉を削ぎ落とした音でビート強調した作りが妙に新鮮だ。英語で臨んだヴォーカルもナチュラルで味がある。切なくシブかっこいい。
(HEPTOWN HTR049)CD

CÜLO/Nuke Abuse



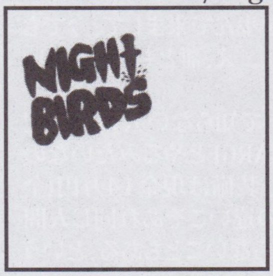
米国シカゴ周辺が拠点のハードコア・パンク・バンドのデビュー盤。基本的にはスラッシュ・パンク・サウンドだが、初期SSD〜後期RIPCORDのスピード感と、初期GANG GREENやADRENALIN O.D.のやんちゃなテイストと、82年ごろのDISCHARGEのロックンロールの感覚が同居したみたいな曲作りと音作りの妙味にやられる。EPタイトル曲は放射能の歌だが、私的な歌詞もリアルな8曲入り。
(PUNKS BEFORE PROFITS pbp46)7"EP

D.O.A./Talk−Action = 0



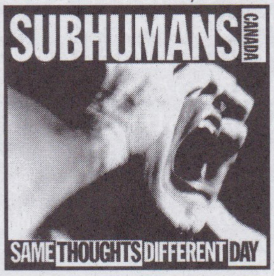
32年間コンスタントに活動を続けるカナダの鉄人パンク・バンドの2年ぶりで13枚目のオリジナル・アルバム。ハードコア・パンク・チューンで始まり、78年の曲やジョーイ・キースリー(vo,g)のソロの曲の再録、ボブ・ディランなどのカヴァーも含む多彩な曲を、足腰鍛えた音+言葉でパンク・ロックに仕立てている。D.O.A.の哲学がタイトルのアルバムだからこそリラックスした風情のいぶし銀の佳作。
(SUDDEN DEATH SDR-0088)CD

NIGHT BIRDS/Night Birds



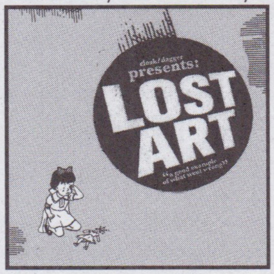
HUNCHBANCKのマイク(g)、PSYCHED TO DIEのブライアン(vo)、元ERGS!のジョー(b)らによる米国東海岸拠点の4人組の2枚目の7"レコード。もうAGENT ORANGEを加速させたようなハードコア"サーフ"パンク・サウンドにひたすら痺れるのみだ。レーベル・メイトとも言えるSOUTHSIDE STRANGLERSとGOVERNMENT WARNINGの"サーフ・ミックス"みたいな美味に乾杯!
(DIRTNAP/GRAVE MISTAKE ZZZ 96/No.40)7"EP

SUBHUMANS/Same Thoughts Different Day



カナダの古豪バンドが80年のファースト『Incorrect Thoughts』と未発表の当時の6曲を現メンバーで録音。直接行動で長期懲役を務めたメンバーも含み政治的に語られがちだが、OVERKILLのカヴァーで有名なEPの曲「Fuck You」だけでなく、本作の歌詞もプリミティヴ(だがインテリジェント)なのだ。それでいて音も曲も折り目正しく切なくパワフルなパンク・ロックで泣ける。1枚もののCDもあり。
(ALTERNATIVE TENTACLES VIRUS404)LP+12"EP

CLOAK/DAGGER/Lost Art



米国東海岸ヴァージニア州リッチモンドの4人組による2009年のセカンド・アルバム。後期BLACK FLAGや同郷の先輩AVAIL、初期CLASHが混ざったようなパンク・ロックで速いハードコア・パンク・ナンバーもやっているが、一筋縄ではいかない。ROCKET FROM THE CRYPT〜DRIVE LIKE JEHU〜HOT SNAKEのようなひねりの効いたサウンドに痺れるのだ。この小粋なセンス、簡単に出せない。
(JADE TREE JT1128)CD

the 原爆オナニーズ/SOLID



世の中年と逆行して歳を重ねるごとにソリッドになっている恐るべき名古屋拠点のパンク・バンドの7年ぶりのアルバム。今回もやはり最新型のパンク・ロックである。変拍子を使ってないにもかかわらずカオスがぐるぐる渦巻いているのは彼らの音楽センスと心象風景の反映だろう。YARDBIRDSのカヴァーもクール。安価ではない、だが永遠に聴ける"ヘヴィ&タフ"な一枚だ。厚手の紙ジャケット仕様。
(TRIPPIN' ELEPHANT TERNG-087)CD

<追伸> パンク・ロックやハードコア・パンクもディープになりえる。どんなジャンルのバンドでも言えるが、しっかりしたソングライティング、センスが表れる音色や演奏、意識が見えてくるヴォーカルなど、一生懸命音楽に向き合って取り組んでいるバンドは聴けば聴くほど深みにハマる。むろん派手なルックスでもグレイトなバンドは山ほどいるわけだが、結局音楽以外の要素(ファッション、主張、戦略、不良自慢etc)の方に手間暇かけているバンドは、パッと聴いて底が見えてしまう。言うまでもなく毎回ここで紹介しているものはいつまでもフレッシュなレコードとCDばかりだ。

幣誌発行人の愉快な独り旅:チェコ編



Disappearance From Reality

これはレポートではない!
珍道中だ!!

前号の編集後記でちょろっと書きましたが、行ってきました!ヨーロッパ!
バンドのツアー・レポートを読むと、実に海外というのは楽しそうで、いいなぁ、僕も行きたいなぁ、と常々思っていたのですが、僕の海外渡航歴は幼少期に行った家族旅行でのハワイのみ、記憶といえば着いた途端に空港でOUTOしたのと、オレンジ色の熊のぬいぐるみがどうしても欲しくて泣きわめいたと、そんだけなのであります。
つまりは初海外同然なわけですが、残念ながらこれまで「僕の友達は本だけ」という暗い人生を歩んで来まして、今でも取材が終わった後の雑談なんかで「バンド関係とかだと誰と仲が良いですか?」と訊ねられれば、「え、誰とも仲良くないですよ」と言ってその場を凍りつかせるような男なので、独りで行くほかない(汗)。
当初はスウェーデンのUMEAでMASSHYSTERIでも、と思っていましたが、調べてみると(ネットで知らない人の旅行記を2つ読んだだけ)北欧は物価が高いらしい。じゃ、ポーランドのEL BANDAがチェコでDISCHARGEとやるみたいなので、そこいらへんにしてみよう、とチェコ→ドイツ→ポーランドを1ヶ月で廻る予定を立てました。装備は現金14万円(全て日本でユーロに両替)と着替え4日分、パスポートに小説3冊という軽装で。まぁ、文化や言語の違いこそあれ同じ人間が暮らしているのだからどうにかなるだろう、とテキトーに行ったところ、世の中にはどうにもならないこともある、というのを今更ながら学習した次第です。
そんなわけでまずはチェコ編。音楽的な話しより、トラブルと酒の話しが大部分ですが、ご笑覧頂ければ幸いです。
旅は計画的にね。

5月中旬。成田空港を発ってから約15時間後、ドイツのフランクフルト空港を経て、チェコのプラハに僕は立っていました。道中の機内では隣に座った旅慣れた風のオッサンが「ドイツは焼きソーセージが旨いねぇ」、「フランスは生ハムだよ」、「ツアー旅行なんて窮屈でダメダメ」という不毛この上ない会話につき合わされ一睡も出来ずに不機嫌なまま入国!空港内には自動両替マシンがあったので、そこでユーロを現地通貨のコルナに。空港はレートが悪いだのそんなことは全く気にせずに、100ユーロ札(1万円ちょい)を入れて出てくる、初めて目にするコルナに「おっ!」と声を上げ、今度は50ユーロ札を入れて、「おおーっ!」とまた驚く。初めて文明に接した原人のようだ…。

空港からは119番バスに乗り地下鉄デイヴィツカー駅を目指す。夜8時をまわっても尚、昼間のように明るい空、柔和な色彩の町並み。"キャー、綺麗!"と内心感激しながらも、ビギナー旅行者だとバレるとスリや勾引しに狙われるっぺ、と平静を装う。

20分程度でデイヴィツカー駅に到着。地下へと続くエスカレーターは、日本のそれと比べ異様に速く且つ構内は薄暗い。どこか共産主義時代の名残を感じさせるものでした。あちらには日本のような改札がないので、切符を買ったら近くに設置してある刻印機に切符を挿入して使用開始時刻のスタンプを押す、というのが必要です(○○駅まで、という距離ではなく、切符の有効時間によって値段が変化)。車内で切符チェックがたま〜に行われるらしいのですが、基本、キセルし放題のような…。人間の性善説に基づいたシステムでした。

で、デイヴィツカー駅から9つ目、ジェリヴスケーホ駅の近くに僕は初日の宿をとっていました。一泊1000円以下のホステルで、その名前がAMEBIXに似ている、という安

直な理由で予約したのです。

駅を出るとまだ外は明るい。地図で見る限り、歩いて精々5～10分程度の距離。今日はゆっくり休もう。明日は、ここプラハのKLUB　007でDISCHARGEのショーがある(DISCHARGEによる3日間のチェコ・ツアーの初日。EL BANDAが出るのは2日目)。長時間の移動の疲れもあり僕は真っ直ぐにホステルを目指した、のですが、プラハの長い長い夜はまだ幕を開けたばかりだったのを、その時の僕が知るすべはない…。

地図を片手に、念のため道行く人にも尋ねながら宿へと。右手に森だか公園だかがある道を真っ直ぐ行って、右手に曲がればすぐ着くはずが、あるべき場所に、それがない。

道を間違えたのかと、駅へ戻り、駅員にも確認すると、確かに今来た道で合っている。早く休みたいという気の焦りもあり、片っ端から人に尋ねて廻る。若い人ならば、大体片言の英語が通じるし(こちらも同レベル)、概して親切。しかし、見つからない。夜の帳も降りてきて僕は涙目に(泣)。時刻は10時を過ぎている。ボラれるのを覚悟して、流しのタクシーを捕まえた。ドライバーの指が何本か欠けているのに多少の不安を感じながらも、ホステルの名前を告げ地図を見せると"OK! Yeah! OK! Yeah!"とテンションが高い。深夜料金のためか、ボラれているのか料金メーターはけたたましいスピードで上がっていくが、とにかく宿に着ければ問題はない。5分も走ったところで車は止まりました。コンクリートの建物の前。そこは何回も通っていた道の、ほんの数十メートル先だったのです。

なんだ、すぐそこまで来ていたのに、引き返していたんだね、テヘ♪安堵とともに、タクシーを降りると(恐らくボラれた)、ホステルの扉を開ける。

そこは安宿の受付にしても、貧相なエントランスでした。そして、何故か"警備員のような制服を着たおじいさん"が驚いた表情で僕を見つめていたのです!

「今晩、予約をした者ですが」と疲れ果てた顔で告げる僕に、老人は言い放った。「ここ、ホテルじゃないよ」。…彼は終始チェコ語でしたが、そのニュアンスは十分に通じました。その前に、どう見てもそこは会社のオフィス…。

あの運転手の野郎!!指を全部切り落として二度とハンドル握れなくしてやる!!なんて温和な僕が思うわけもなく、「お前さん、ここがホテルだと連れて来られたのか」と、哀れみの眼差しを向ける老人と別れ、加速するパニック!パニック!!

もう人気のない暗い道をめったやたらに進み、廃線となった線路の横をとぼとぼと歩く。眼前には不気味に積み上げられた不法投棄らしき産廃の山。ここで強盗に遭えば、確実にゴミの中に埋められる。「邦人男性の白骨死体がチェコのプラハで発見」。不吉過ぎる新聞の見出しが頭をよぎります…。だが、神は僕を決して見捨てはしなかったのです!

産廃の先に、飾り気のない学生宿舎のような建物が見える。まさか!自然小走りになり、壁に書かれた文字を見た。そこにはAMEBIX、みたいなホステルの名前が大きく、確かに、存在していた。この瞬間の喜びは、まるで古本屋の100円均一台の山の中に、横溝正史の「空蝉処女」初版を見つけたような、もしくはレコード屋の特価コーナーでMASSHYSTERIの「PARANOID」EPを見つけたようなものでした(どちらも単なる例えです)。

実際には、宿に着いた、というそれだけなんですが…。

意気揚々とドアを開け、本日の宿へと足を踏み入れる。そこには目映い光が、善良そうなバックパッカーの若者達の姿が!自然と笑顔がこぼれ、近くにいた青年に"やぁ!"なんて陽気に声をかけます。ようやくだ。迷いはしたが、なんだかんだ言って無事に着いた。さぁ、受付に行こう。もう日付が変わっている。早く明日(今日)のDISCHARGEに備えなければ!

が、次の瞬間、僕は神の存在を疑いました。

受付は無情にも無人。その窓口は固く閉ざされていたのです。チェックインが遅くなる宿泊者のために、窓口には部屋の鍵がセロハン・テープで貼られ、宿泊者の名前も併記されている。しかし!あの～、何度探しても、僕の名前、ないんですけど…。

天国から地獄とは、まさにこのこと!建物内に設置された自販機で飲み物を買い、喫煙所で煙草を吸って気を落ち着かせます。…どうする、どうする、オレ。新たな宿を求めて外に出るか。イヤ、流石にそれはしんどい。…どうする、どうする。気もそぞろのまま、尿意をおぼえ、僕はトイレも勝手に拝借しました。4つほど個室が並んだ、広いトイレです。そこで、僕は閃きました。

うん、トイレで寝よう!と。幸い建物内部には"不法侵入"出来ている。無闇に歩き廻るよりかは、ここに潜んで朝を待とう。

リュックを降ろし、便器と扉の間の隙間に身を横たえる。旅の一泊目がトイレ。タチの悪い冗談のようですが、これが現実。

1時間程横になるも、換気のために開かれた天窓から厳しい冷気が入り込み、どうしたって眠れそうにない。再びリュックを背負い、喫煙所へ向かうと煙草を立て続けに吹かす。すると、髭を生やした強面の中年男性が一人やって来て、僕の横で煙草に火をつけたのです。…惨劇の火蓋はこうしてきられたのでした。

ま、まずい。どう見てもこんな時間に荷物を担いでいる僕は宿泊者には見えない。案の定、男は不審そうにこちらをジッと見てくる。そして、「何やってんだ?鍵持っているのか?」と話しかけてきた。こういう時、下手に取り繕うのは良くない。正直に話せば、もしかしたら「なら俺の部屋で休めよ。受付が開いたら事情を話して金を払えばいい。Yeah!」という素敵な展開が待ち受けているかもしれない。僕は、「いやー、予約したんだけど受付が閉まってて、鍵がなくて困っているんだよね」とありのままを伝えました。

彼は「んだとー!?出てけコラ!警察呼ぶぞ!!」と、激怒…。ヒィー、なんてこった!完全に裏目に出た…。その剣幕たるや恐ろしく、本当に警察を呼ばれそうだったので、僕は慌てて駆け出すと、AMEBIXみたいな名の宿から遁走(泣)。

何年ぶりでしょう、こんなに全力疾走したのは。ホステルから数百メートルほど離れた通りで、ゼエハアと息を切らしながら、神の不在を確信した。

NO GODS NO MASTERS!!

そう夜空に叫ぶ。

そして遠くから徐々に接近してくるパトカーのサイレン…。あの野郎、本当に呼びやがったのか?!チェコで逮捕、それはちょっと面白すぎる。僕は再び駆け出したのでした。

その後、ホテルが全く見当たらないこの町で、身を隠すようにさまよい続ける。事前に買っておいた缶ビールを数本あけて、路地裏の茂みで立ち小便をして、地下鉄が動き出す朝5時までの数時間を潰す。公園のベンチで一休みしようと近づくと、そこには



真夜中のプラハをさまよい続ける





暗闇の中で目をぎらつかせ、何かを摂取している若者たちがたむろっていた。ビビる僕。だが、あっちも予想外の場所と時間に突如として出現した不審なアジア人に、驚いておりました。

プラハは恐ろしいところだっペ——。2日目、僕はプラハでDISCHARGEを見るという当初の予定を放棄して、プラハ中央駅から電車で3時間程の、チェコ第2の都市、ブルノへと逃げるように移動した。

午前10時。"屋根があれば～暮らしていける～♪"とRYDEENの曲(THE FOREST IS CRYING)の一節を口ずさみながら、ブルノの安宿で僕はシャワーを浴びていた。もちろん受付で、宿泊代金(一泊800円程度だったはず)を支払った上でのことです。

昨日のことは忘れ、今日から仕切り直そう。僕はまず、MAD PIGSのヴォーカル、Martinoが経営しているというこの町唯一のパンク・ショップ、VOLTAGEショップに行くべく宿を出た。プラハ中央駅の構内でも見かけたが、赤みがかった布を全身にまとった、エキゾチックな服装のロマ(ジプシー:いわゆる国を持たない放浪民族)の女性を何人か宿の近くでも目にしました。プラハでは駅内で物乞いをしていたせいか駅員に摘み出されていたが、本や映画からの薄っぺらい知識として、彼らが貧困、差別、犯罪といった多くの問題を抱えているのは知っていた。日本から来た僕からすれば、インド系の顔立ちに身なりというだけで、彼らに関してどうこういう感情はないはずなのですが、「あ、ロマだ」と意識している時点で、どこか差別意識を持っていたのかもしれないと、今になって思います。

ブルノの街は日本人が安易に想像する、"綺麗なヨーロッパの町"をそのまま具現化したようなところでした。古びて味わい深くも愛らしい家々と、石畳の上を走るトラム(路面電車)に目を奪われながらVOLTAGEショップを目指します。道中、空腹に気づきパン屋さんに入るとコッペパンを一つ買い求める。「いくらですか?」「2コルナ(10円)」。チェコでの初の食事on theストリート。どんだけ貧乏な旅行者なんだ…。

昨夜、散々迷い尽くしたせいか、この日はあっさり目的地に到着。FRAMTIDのTシャツを着ていた僕を見るなり、金と黒に髪を染めた大柄な青年が「あ、FRAMTIDだ。日本から来たの?」と親しげに話しかけてきてくれました。その彼こそがMartinoだったのです。

VOLTAGEショップには多くの日本のバンドの作品、HG FACTやPOGO 77のリリースも並び、他にはバンドTシャツやアクセサリー、ブーツに鋲などなど、一通りパンクに関連したものが揃っています。店内の壁には、この地を訪れたHAT TRICKERSとSYSTEMATIC DEATHのサインも。

パンクという自分と同じ共通項を持った人がいる、というだけで安心できる。これは結構意外でした。店に貼られたDISCHARGEのポスターを見るだけで何だか嬉しい。四方八方を理解不能なチェコ語に囲まれ、独り右往左往していたので、"自分が一瞬で理解出来るモノ"の存在がとても貴重に見えてきます。これは日本では味わったことのない感覚でした。

買い物なんかをしているうちにSEE YOU IN HELLのギタリスト、Filipもやって来た。小綺麗な格好をした実に真面目そうな人です。彼にはVol.1でチェコのシーン・レポートを掲載させてもらったり、SEE YOU IN HELL&SYSTEMATIC DEATHツアーの件で何度もメールのやりとりをしていたのですが、メールの返信も非常に早く、マメな印象だったのです。彼の仕事を訊ねると弁護士とのこと。「おおー!!」と、小学生が野球選手に遭遇したかの驚愕の眼差しを向けると、「いや、ロマとかジャンキーとか貧しい人のための弁護士だよ」と照れていました(笑)。

そしてなんでも今日、ブルノ駅近くのバーでライヴがあるそうです。ローカルなバンドのライヴ、これは見ないわけにはいきません。一旦宿に戻り、夜8時にFilipと駅前で待ち合わせてバーへと向かいます。道中、僕が泊まっているホステルの地図を見せると、「こんなところに泊まるのか…」と呆れられました。治安が実によろしくない地域らしいです。どうりで安いし、建物の周囲を鉄条網が張り巡らされていたわけです。

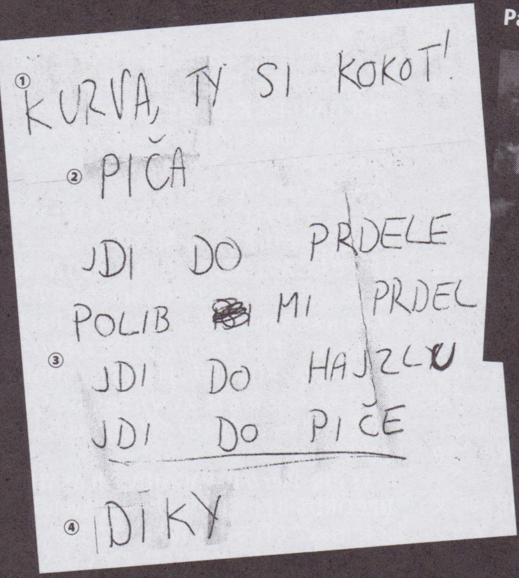
10分ほど歩いたところでバーに到着。雑居ビル風の地下で、特に看板も出ていなかったので知らなければ絶対に辿り着けない場所。大きいカウンターとテーブルがいくつかある、40～50人は入れそうな店でした。店員さんもパンクな格好だったので、パンク・バーだったのでしょうか。隣室がライヴ・スペースになっていて、こっちの方がバー・スペースよりも狭く30人も入ればパンパンです。

ショーは2バンドによる無料のもの(実際は違った。Paayaのインタヴュー参照)。1バンド目はRISPOSTA。豪速球のクラストコア。だからお客さんにクラスティーが多いのか。でも2バンド目はエモいスロー・テンポのハードコア。バンド名すら全く覚えていない(汗)。うーん、ちょっと退屈。で、バーでビールを呑みまくる。やたらと美味しい生ビールはジョッキで一杯100円しないくらい。前号で記事を転載させてもらった"DRUNK NACH OSTEN"ジンのPaayaも来ていて、こんにちは!金髪で後ろ髪だけドレッドの彼は人懐っこい性格で、すぐに打ち解け色々と話す。僕は普段、日本ではライヴに行こうがバーに呑みに行こうが、独りでコソーッと隅の方で隠密のごとく存在感を消している、黙して語らずの実に陰気な野郎ですが、ここでは陽気な男でした。これは高校デビューならぬブルノ・デビューでしょうか?

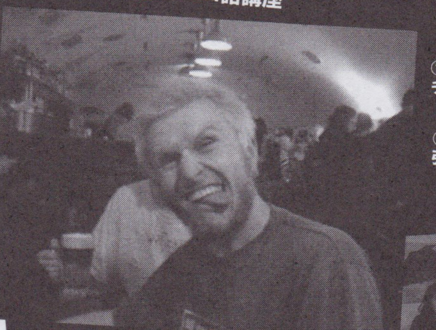
ラムのショットも沢山頂いたところで、



美しいブルノの街並み



Paaya先生の実践チェコ語講座

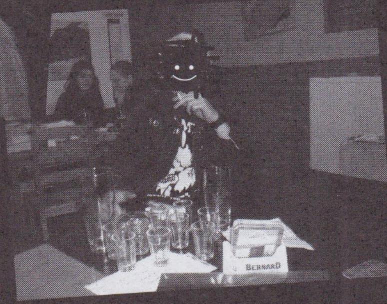


①一番上が「クルバ・テ・シ・ココット!」
チェコ人に言えば殴られること間違いなし

②「ピチャ」はチェコ人女性に対して使えば、
引っ叩かれます

③その下4つは、ファック・ユーの類語
まとめて言えば効果的♪

④「ディーケイ」はサンクス：ありがとう



ついでにビールとラムを
たくさん呑んで満足している発行人

Paayaに実生活で役に立たないチェコ語を教えてもらいました(別欄参照)。「Filipにチェコ語でファック・ユーって言ってこいよ」、「あそこにいる女の子にオマ○コって言ってこい」と、完全に言動が中学生レベルに低下。しかし、昨日のプラハと比べるとここはまるで天国のようです。深夜1時をまわり程よくベロンベロンになった僕を見かねて、Filipが「Paayaの家はすぐそこだから、今日はこいつのところに泊まれ」。というわけで彼の家にて就寝。広いアパートの一室を友達数人とシェアしているようで、膨大な数のカセットテープのコレクションもありました。翌朝は表を走るトラムの音で目が覚め、イチゴ・ジャムを塗ったパンをごちそうになる。Paaya、どうもありがとう!

この日はEL BANDAとDISCHARGEのショーがヴァラススケー・クロボウキ(ブルノの東。スロバキアとの国境近く)のCULTBURGERという会場で開かれる。しかし僕は、SEE YOU IN HELLのメンバーと一緒に車でOBSCENE SOCIETY FESTIVAL(SEE YOU IN HELLやSKITSYSTEMなど計11バンドが出演するフェス)に向かっていました。ヴァラススケー・クロボウキは非常に辺鄙な場所らしく、Filipの「俺らとフェスに来たら?」とのお言葉に甘えて、旅の最大の目標をあっさりと変更。EL BANDA、また今度ね(軽い)。

道中の車内ではPAINTBOXの「TRIP, TRANCE & TRAVELLING」がかけられる。"音頭"になったところで、「この曲はなんなんだ?」と訊かれましたがうまい言葉が見つからない…。

途中、彼らが借りているスタジオに立ち寄り、機材やら物販をどっさり車に積み込む。「日本のライヴハウスは機材が全部揃ってて、楽器だけ持っていけばいいだけだから楽だよね」と言われて、「うん、そうだね」と答えましたが、僕、バンドやってないからよく分かっていません(汗)。とりあえず日本は便利だそうです。

更に走ること3、4時間。道中で立ち寄ったコンビニのような店では、ベースのTomが外で立ち小便をして店のオヤジに叱られる。償いにウォッカでも買おうかと僕が店内を物色していると、「出てけ!この野郎!!」とまたもや怒鳴られる。チェコの中年男性はキレやすいのでしょうか?「なんであいつは怒っているの?」とTomに聞くと、「バカなんだよ!」と。なるほど、バカなのか。



左からFilip from SEE YOU IN HELLとその友達と後述するWRETCHED Tシャツ君。バーにて

会場に着くと、ショーは中盤。400〜500人くらいは余裕で入りそうな結構大きい会場。物販も沢山出ているし、ベジタリアン・バーガーも売っていました。表の駐車場にも沢山のパンクスがたむろってます。バンドはグラインドが中心か。

シンガポールのバンドも出演予定らしく、お客さんから「シンガポールのバンドのメンバー?」と度々訊ねられました。「違う、日本人だ」と言っても、「そうなの。じゃあ、このシンガポールのバンド名はなんて読むの?」。アジア=一つの言語と思われているのか…。しかしそのシンガポールのグラインド・バンド(帰国後に調べたら、WORMROTというバンドだった)、素晴らしく格好良いのです。ベース・レスの3人編成にも関わらず、全パートの起爆力・瞬発力が凄まじい。フル・ブラストで低音高音を使い分けるヴォーカルとオーソドックスながら、肉感的で鍛え抜かれたシャープな音像。滞在中に見たバンドの中でも、ベストの部類に入るバンドでした。客の煽り方もうまくて、アンコールが3回4回と続く。こんなバンドがシンガポールにいたのか!と驚いたのですが、EARACHE RECORDSからのリリースもあり、年がら年中ヨーロッパ全土をツアーして廻っているという、多分、その筋ではとっくに有名なバンドっぽいです。

SEE YOU IN HELLも到着してすぐのライヴにも関わらず、演奏の完成度がやたらに高い。ジャパニーズ・ハードコアのエッセンスを凝縮したスラッシュな楽曲に、独特なチェコ語の語感。そしてヴォーカルJozkaの己の頭をマイクで殴りつける自己破壊行為…。会場も大いに盛り上がります。

他にもチェコとスウェーデンのバンドを4〜5つは見たのですが、正直、可もなく不可

SEE YOU IN HELLが借りているスタジオの壁。どれほど日本のバンドが好きかよく伝わってきます
川上さん/DISCLOSEが生前にFilipへ宛てた手紙もありました



もなくといったバンドが続く。どの国のバンドだから格好良い、なんてことはあり得ないよ、と当然のことですが再確認。しかしお客さんのガタイがでかくて、ステージを見るのも一苦労でした。2メートルくらいありそうな人もザラにいて、僕(170センチ)の前に立たれると全く見えない(汗)。人と人の隙間から覗き込むように見ていました。

そうしてトリのSKITSYSTEM!結構期待していたのですが、どうも全体的にモッサリしていて、演奏のキレが悪い。WORMROT、SEE YOU IN HELLと比べると勢いもなくて、客も前線の一部以外は棒立ち。うーん、うーんと唸っているとFilipが「もう遅いから帰るよ。INSANE SOCIETY RECORDS(SEE YOU IN HELLの作品なども多数リリースしているハードコア・レーベル)の物販に集合」と呼びに来てくれました。了解してライヴ・スペースを出ようと思うのですが、どうもSKITSYSTEMに納得がいかない。迫力がまるでない。もう1曲、もう1曲と見続け、結局最後まで見たのですがイマイチでした。たまたまこの日だけだったのでしょうか。

ちなみに当日、沢山出ていた物販の中に日本のクラスト・バンドのTシャツを売っている人がいたので、「これオフィシャル?」と訊くと(意地が悪い)、「もちろんだ。全てアメリカから仕入れている!」とのこと。うん、それって全然理由になってないね♪

スタジオにも寄って機材を片付け、長いドライブの後、深夜3時過ぎブルノに帰着。今夜はFilip宅に泊めてもらうことに。レコード、カセット・テープ、ファンジンの膨大な量のコレクションに驚く。MRRをこんなに集めている人を初めて見ました。こんなにマニアだったのか…。



Filipが飼っているかわいい猫

昼過ぎに起床し、Filipが飼っている黒猫と遊んで、ベジタリアン・フードを頂いて、また寝る。どこまでダラダラとした時間の過ごし方でしょうか…。

今日はここブルノでDISCHARGEのショーが。プラハ、ヴァラススケー・クロボウキ、ブルノと、DISCHARGEの三立てを目論んでいたのですが、ここに来てようやく本来のスケジュールに立ち返りました。

Filipとタクシーで会場へ向かうと、そこは一階がバー+ライヴ・スペース、二階がバー+物販スペースというとても居心地の良い造り。物販ではPAPAGÁJŮV HLASATEL RECORDS(Vol.4参照)の面々がレコードやTシャツを販売しており、ずっとメールで連絡していたスタッフのPetrとも対面。顔文字を連発する愉快なメール同様、終始にこやかな30歳。

この日はスロバキアのROXORからスタート。ノイジーなD-Beatクラストで、スカンジ〜日本のバンドの影響が強いのだろうとうかがわせるスタイル。SYSTEMATIC DEATHとも共演したはずです。

次いではPaayaがギターを弾くFESTA DESPERATO。こちらはFRAMTIDがヨーロッパ・ツアーをした際に対バンしたと思います。このバンドのベーシストとも昨日、一昨日とライヴで会っていたのですが、彼は2日続けてオリジナルのWRETCHED Tシャツを着ていたのです。オリジナルと言っても、生成りのボディに黒マジックで例のインディアンみたいなのを描いただけというプリミティヴ過ぎるTシャツ。けど、本当にWRETCHEDが好きなんだな、と伝わってきて格好良かったのですが、僕が昨日「またWRETCHED!?」と言ったせいか、今日は違うTシャツでした。ごめんよ…。

肝心の音は終末的な雰囲気が漂うダークネス・ハードコア。ツイン・ギターを活かした分厚い音作りで、アグレッシヴなステージ。自然と体も反応します。

しかし、DISCHARGEのライヴなのに客がパッと見た感じ50〜60人ほどの入りで(実際は120人だったそう)、企画者のMartinoは色んな面で大丈夫か!?と少し心配になりました。この後に滞在するドイツのベルリンで、何人かに「チェコでDISCHARGEを見たよ」と話すと大抵の人がバッド・リアクション!「期限切れのバンドね」やら、「格好悪かったでしょ?」とか、もう不憫なくらいに酷い言われよう(汗)。僕もDISCHARGE大好き!ってノリでは全然ないですし、実際に昨年の来日にも行ってないのですが、ある種、軽蔑の対象になっているような勢いでした。これは多分、スクワットに出入りしているようなパンクスとしか、僕が話していないせいだと思いますが…。

さて、話しを戻して、DISCHARGEが始まる前に二階のバーで休んでいると、普通の格好をしたおっさんがテキーラをおごってくれました。日本人が珍しいようです。煙草が高いというどうでも良すぎる世間話しをしながら、テキーラやらビールを呑んで例によってヘロヘロに。するとFilipがやって来て「あのさ、…DISCHARGE、もう始まってるよ」と、再び呆れ顔で教えてくれた。迷惑かけます…。

フニョフニョしながら一階へ。ステージ前にも余裕があったので、Ratのド真ん前でDISCHARGEを鑑賞。電動車椅子に乗ったお客さんも前線でノリノリ、Ratもマイクをその人に向けたりと、客入りがいまいちだったからこその良い光景も。

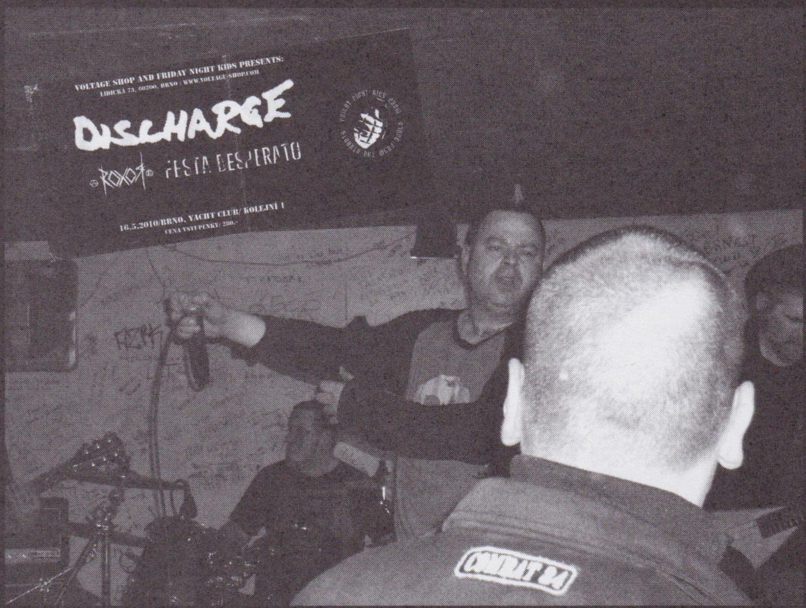
ただ、ライヴはアンコールの声も虚しくスパッとアッサリ潔すぎる感じでフィニッシュ。日本でもこんな感じだったのでしょうか。終始、無表情で淡々と己の役割(演奏)を果たすBonesとRainyは渋かったですし、Ratも頑張っていましたが。ちなみにこの日のチケット代が280コルナ。日本円で1500円弱。こちらの感覚では安いのだが、あちらの感覚ではハードコアのライヴとしてはちょっと高いらしい。

終了後、PetrがPAPAGÁJŮV HLASATEL RECORDS事務所兼オーナーのPavelの自宅に泊めてくれるというので、ここまで一緒に来ていたFilipや遊びに来ていたSEE YOU IN HELLの面々とお別れ。「ほんじゃ、8月に日本で!」。ベースのTomには昨日、ビールを何杯もおごってもらったり(彼は僕以上にエンドレスで呑み続けていた)、Filipには泊めてもらい食事までごちそうになりました。大変お世話になりました!特に彼が出してくれた、豆腐(薄い高野豆腐みたいなの)にハニー・マスタードをつけて食べる、という不思議な料理はとても美味しかったです。でもそれ、日本ではやらないよ。

余韻に浸る間もなく物販をPetrたちと片付けて車で撤収。1時間弱走ったところで二階建て+地下室のある大きな一軒家に到着。ダイニングでPavelとPetrと僕の3人で再び呑み始める(汗)。ビールに始まり、ラム、ウォッカと続き、Pavelが前日EL BANDA+DISCHARGEのショーに行った話しやら、レコード事情やら色々話す(酔ってて殆ど覚えてないですが)。気がつくと朝の5時半。ワーオ、というわけで泥のように眠り、昼前に起床。もちろん酷い二日酔い。グダーとしながら、着替え用としても必要なTシャツに、レコード、CDなんかを色々と1000コルナ(5000円)ほど購入させて頂きました。大体Tシャツは一枚1000円、7インチは500円弱くらいが相場かな。

で、支払いを済ますとちょうどチェコ・マネーが底をつく。PAPAGÁJŮV HLASATEL RECORDSの本拠地、ここジーチャニからブルノまではバスでの移動しかないようで、Petrにバス代(100円くらい)をめぐんでもらい、おまけにバス停まで送ってもらう。どこまで人の優しさにつけ込むのでしょう。

前日は夜中に着いてしかも車だったので気がつかなかったのですが、ジーチャニは町というより"村"と表記したい程に長閑なところ。ザ・ヨーロッパの田舎!な美しい風景の中を、二日酔いのヘロヘロの男2人組が歩く——。Petr曰く、「多分、ここに来た初の日本人だよ」とのこと。確かに、何もなさ過ぎるから、観光客は絶対に訪れないでしょう。ブルノでも黄色人種が珍しいのか思いっきり町行く人々に見られましたが(格好が汚いせいもある)、ジーチャニでは子供たちが驚愕の眼差しを向けてきました。その日、夕食時



には「パパ!今日、変な格好のアジア人を見たよ!」という会話が交わされたことでしょう。「子供がたくさん歩いているけど、これから学校行くのかな?」、「Kenji、今、昼過ぎだぞ」。…そうか、朝じゃないんだった。

バス停での別れ際、Petrが「普段バスには乗らないんだけど、あれに乗ればきっとブルノに着くよ」ということで、彼が指差すバスに乗り込み、さようなら。ありがとう!

ブルノ駅に着いたらとりあえずスッカラカンなので手持ちのユーロをコルナに両替して、KAMIKAZE(チェコ産のスタミナ・ドリンク。缶に漢字で"神風"と思いっきり書いてあり、日本では各方面で問題になるから販売はきっと不可能)を飲んで…、と考えているうちに終点ブルノに到着。

よし、両替!と降りてあたりを見渡すと、えーと、ここは、どこですか?運転手に「ここブルノ?」と確認すると、「そうだ」。でも、僕、こんなところ知らないよ…。中心から少し外れたところなのかしら。煙草を吹かしている青年に、「ブルノの駅に行きたいんだけど、どっち?」と訊ねますと、「それなら8番トラムに乗れば着くよ」。なるほどね、トラムに乗るのね。って現地通貨、1コルナも持ってないのですが…。

まぁ、同じブルノだからすぐ着くだろうと、8番トラムが走っている線路沿いに歩き出しました。

それから2時間後、僕は小雨が降りしきる中、雨と涙で頬を濡らしていました…。歩けど歩けど、ブルノの中心部に着かない(泣)。線路と歩道が都合良く並んで存在しているわけもなく、完全に迷子!右も左も分からない実に見事な迷子っぷりです。九狼吽の"金が欲しい、金をくれ、金がなければ何にもできねぇ!"という一節(EMPTY & TRUTH)、"金"の部分がコルナになって頭の中でリフレインしています。再びボラれるのを覚悟でタクシーを捕まえて、駅まで行き両替して支払えばOK、という考えは、タクシーが全く走っていない現実を知り諦めました。そもそも人すら歩いていない。

人気のない団地とちょっとした森を抜け、思えば遠くに来たもんだ、とベンチに腰掛けます。

僕の人生、これまで実に無計画だった。テキトーに生きてきましたが、これからは計画的に、一手二手先を読む男になろう。そもそもPAPAGÁJŮV HLASATELでEL BANDAのCDを買う必要はなかっただろうに。アナログ盤で持っているんだし、CD自体日本で買えるだろうに。しかも"LET'S FIGHT WHITE PRIDE"と描かれたTシャツも購入したけど、これを黄色人種がヨーロッパで着て大丈夫なの?白人が着るから許されるTシャツじゃないの?ていうか、ここ、どこですか?

人がいないので好き放題に呟いた後、意を決して歩き出す。もちろんテキトーです。

更に1時間ほどさまよっただろうか。二日酔い、雨、空腹、迷子、一文無し、と悪条件のフルメタル・ジャケット状態で歩き続けると、見覚えのある看板が目についた。"GRAND HOTEL BRNO"。確か、駅前にあった高そうなホテルだ!ということは、この看板の指す矢印に進めば着く!そこから数キロ、初日に乗ったプラハのタクシー・ドライバーのごとく、"GRAND HOTEL Yeah! GRAND HOTEL Yeah!"とテンション高く、はたから見ればただのバカ以外の何者でもないのですが突き進む。そうしてこうしてブルノ駅に到着!4時間弱の迷子でした。"BRNO Yeah! BRNO Yeah!"と変な勢いのままVOLTAGEショップに行き、「いんやー、迷子になって大変だったっぺ!」と、仕事に精を出しているMartinoに話しかける。迷惑この上ない(苦笑)。でも、知っている場所がある、そこに知っている人がいる、というのはなんて素敵なことなんでしょう!さながら穏やかなMartinoの顔が僕には天使に見えました。

駅前で一万円分両替し、懐も温かい。物価は日本よりもかなり安いのだから、そんなに両替をする必要は全くないのですが、既に"計画的"という三文字は僕の中から綺麗に消えておりました。

その夜はMartinoとピザ屋に行き、ピザとビールとオレンジ・ジュースを一杯ずつ頂きました(さすがにアルコールは控えた)。

チェコや日本のバンド、パンク観について色々話すと、ブルノのパンクス、と一口に言ってもみんなそれぞれ考え方が全然違う。当たり前だけど面白い。その後は彼の家に泊めてもらいフカフカのベッドですぐ眠りにつく。そういえば安宿とってあるのに、一晩も泊まってなかった…。

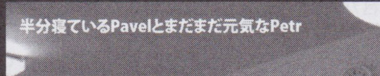
しかしブルノはみんな親切で良い人ばかりでした。バンドもやっていない、ただフラフラやってきただけの僕に、本当良くしてくれました。みんな、どうもありがとう。

さて、そんなこんなでチェコ編はここまで。次号ではベルリン編へと続きます。

果たしてベルリンでも僕は警察を呼ばれるのでしょうか?迷子になるのでしょうか?再びいい歳こいて泣くのでしょうか?音楽の話題よりも旅のトラブルの話しの方が断然長いという、音楽誌にあるまじき体たらく!こんな原稿が届いた日には発行人の権限で突き返すところですが、僕が書いたのだからしょうがない(笑)。

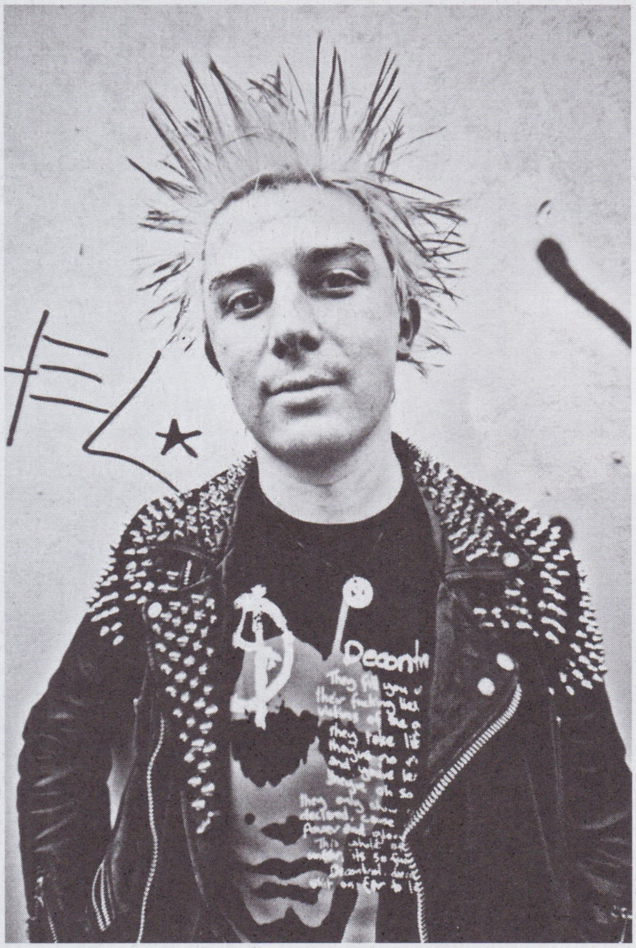
僕なんざこんなもんです、と卑屈になったところで、次回も楽しみにできる奇特な方だけお楽しみに!

半分寝ているPavelとまだまだ元気なPetr





※次項からは帰国後に行ったMartino、Paaya、Filipへのインタヴューと続きます



Martino from MAD PIGS



ブルノで唯一のパンク・ショップ、VOLTAGE SHOPを運営し、ストリート・パンク・バンドMAD PIGSのヴォーカルでもあるMartino。先日行われたSYSTEMATIC DEATH/SEE YOU IN HELLのツアーではドライバーとしても活動し、FRIDAY NIGHT KIDSの名でツアーやライヴも企画したりと、当地のシーンの一端を確実に担っている一人です。
2009年にはJ.U.U.M.の招聘により来日、またPOGO 77からリリースされたTOM&BOOTBOYSとのスプリットCDもあるので馴染み深い人も多いのではないでしょうか?

■パンク/ハードコアとの最初の出会いってチェコのバンドだったの?そのとき何歳だった?

「うん、13歳の時にパンク・ロックと初めて出会ったんだ。友達のKlobi(MAD PIGSのギタリスト)が僕の同級生でね、彼はパンク・ロックを聴いている年上の人らを何人か知っていたんだ。それで彼がその人らを僕に紹介してくれて、チェコのパンク・ロック・バンド、E!EにHNF、それにとても重要な地元の伝説的なバンド、ZEMĚŽLUČを知ったんだよ。それからSEX PISTOLSやEXPLOITEDや色々な外国のバンドを知るようになって、もっとマニアックなバンドを日々求めるようになったんだよね。今でもそうだけど、ハハハ」

■VOLTAGEショップを開いたのはどうして?VOLTAGEは単なるお店じゃなくて、パンクスにとっての大切な溜まり場になっているように感じたけど。確か、3ヶ月前にオープンしたんだっけ?

「そうだね、2010年の1月16日、THE CASUALTIESとSS-KALIERTがブルノでショーをした日にオープンしたんだよ。ここには良いパンク・ショップがなかったから、ここにパンクの店を出すのが僕の大きな夢だった。もし君が何か欲しかったら、取り寄せるかバンドのツアー中に買うしかなかったからね。僕たちパンクスにとってそれは快適なことではなかったから、この点を改善しようと店を開いた。パンクスにとって良い場所にしようとね。探しているものがあればここで見つけることが出来る。世界中の新譜から古いレコードもあって、服とかも色々とあるからね。それに君が言ったように、パンクスが僕らと話したり、一緒に世界中のDVDを見たりして楽しむための溜まり場でもあるよ。正直に言うと、(※日本のパンク・ショップの)VORTEXやKILLERS、PUNK AND DESTROYみたいな感じにしたいなといつも思っているんだ。けどここはヨーロッパだしね」

■お店のシンボルにCHAOS UK時代の、若かった頃のGabbaを使っているよね。これはどうして?

「その通りだね!こんな理由からGabbaを使用しているんだ。CHAOS UKは僕が初めてライヴを見たバンドの一つだし、僕にとっては重要な初期80年代のUKパンク・バンドだからね。"4 Minute Warning"とかは最高だよ。このバンドを僕はリスペクトしている。それにこの絵はアグレッシヴで格好良いから、パンクスならノーなんて言わないだろ、ハハハ」

■確か僕に"UKと日本のバンドが一番好きだ"って言っていたよね。どんなところに魅力を感じているの?

「僕は世界中のバンドが好きだし、グレートでパワフル、そしてストレートな音楽をやっているパンク・バンドが大好きなんだ。激しいショーをステージで繰り広げ、格好良いイメージを持っているやつだね。多くのお気に入りのバンドが日本とUKだというのは事実だよ。UKパンク・バンドを聴いていると、何か特別なものを感じるんだ。バンドで言うと、GBH、CHRON GEN、GEN X、DISCHARGE、UNDERDOGS、BOYS、MAU MAUS、

ANTI SECT(それにCRASSレコードのバンド全て)に、例えばALARMはいつも僕にパンクが生み出すパワーと感情を与えてくれる。それにそういったバンドのステージや写真は、ハートの中まで心底響いて来るよね。日本のパンク・バンドはいつも、世界に類を見ない程にパンクの持つ強烈な面を見せつけてくれる。STALINにGAI、PAINTBOX、SYSTEMATIC DEATH、ZILEMMA、ORIGIN OF [M]、EXTINCT GOVERNMENT、D.S.B.、REALITY CRISIS、J.U.U.M.、HAT TRICKERS、IMPULSIVE、PADLOCK、ACROSTIX、FRAMTID。書き忘れているだけでもっとあるけど、僕は日本のパンクが大好きなんだ。ショーも最高に強烈でクレイジーだし、素晴らしいよね!」

■ブルノのハードコア・シーンについてはどう?ピザ屋でブルノと日本のシーンについて色々話したけど、もう一度お願い。

「そうだね、ピザ屋じゃ素晴らしい夜を過ごしたね、ハハハ!ブルノのハードコア・シーンは結構メチャクチャだね。この数年で多くのバンドが動き出しているから、沢山のショーがあって君は週に3〜5回くらいは見に行ける。盛り上がってはいるけど、金がないのにうんざりはしているよ…(多分それって世界的な金融危機のせいか、恐らくショーに行く代わりに酒を買っているせいかもしれない…分かんないけどね)。大部分においてここのシーンは良いよ。いくつか活動的なバンドもいるし(SEE YOU IN HELL、ZEMEŽLUČ、INTRUDERSS、RESURGO[僕の次のバンド]、RISPOSTA、FESTA DESPERATO、EVEDENCE SMRTI…)、それに溜まり場になっているパンクな場所もいくつかあるしね。SEE YOU IN HELLのFilipはすごくアクティヴで"Hluboka Orba"(MRRのチェコ版みたいな感じ)という面白いファンジンも作っているしね。それに彼と仲間で"United Crusties"という良いショーをたまにここで企画している。僕は友達とで"FRIDAY NIGHT KIDS"というショーやツアーを企画している。だから、ブルノのシーンはかなり良いと言えるけど、今はまだまだの時期にあるとも言えるかな」



■ブルノで僕が一番驚いたのはDISCHARGEのショーに50〜60人しかお客さんが来なかったことなんだ。君は沢山のバンドのショーを企画しているけど、DISCHARGEのショーの詳細はどんなものだったの?

「実際には120人の人がチケットを購入したんだけど(※会場の)Yacht Clubには余裕があってちょっと変な感じだったね。あのショーに300人は見込んでいたんだけど、僕もどうしてこんなことが起こったのか分からないよ。多分、理由としてDISCHARGEはチェコで3回のショーをやった。週末にあって、僕が企画したのは最終日で日曜日だった。けど、悪い意味での驚きだったね。ここでのライヴを君は他には知らないだろうけど、VARUKERSが昨年やったときには、300人もの人たちが来てソールド・アウトになったんだ。けどDISCHARGEは半分以下。悲しいね、DISCHARGEみたいな伝説がブルノにやって来たっていうのに多くの人が見に来ないでこのチャンスを逃したんだから!」

■パンクとファッションの関係性についても話したよね。君の考えをまた聞かせて。

「僕にとって、パンクの感覚とファッションというのは一緒であって、重要なんだ。パンクのアティテュード、反社会的な意見を持ち、それを歌詞とかで示すことも大切。ただ個人的には、パンクスとしてパンク・バンドがステージに立っているのが好きなんだ、鋲ジャンにカラフルなスパイキー・ヘア、HAT TRICKERSみたいなクロックワーク/血塗れのスタイルやCRASS/アナーコ・スタイル…。僕はパンクの持つイメージが大好きだからさ。ステージで激しく飛び回ったりするのを見るのもね!」

■ブルノのストリートを歩いていると多くの人たちが僕のことを見てきて、(多分)アジア人が全然いないからだと思うけど。パンクスもジロジロ見られたりする?警察が何か言ってきたりは?

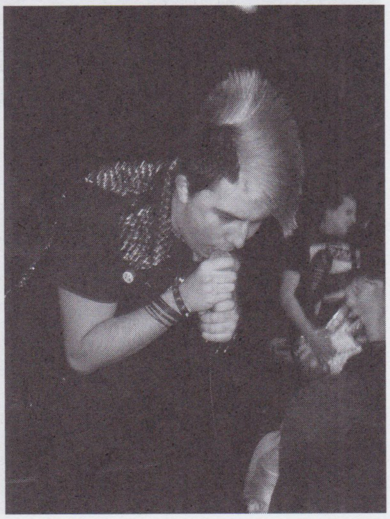
「うーん、差別主義とかじゃないよ、それは間違いない。心配しないで、ハハハ。年がいっている人や若いキッズなんかは保守的だね。ここには過去に共産主義があったし(パンクスは80年代、その法律に反発していた!)。パンクスってものに慣れていないからいつも見てくるね、ハハハ。警察は別に問題はないね、関係ないかな」

■EVACUATEのEPをもうすぐリリースするよね。VOLTAGEレコードとしては初めてのリリース?今後の予定は?

「いや、僕らの最初のリリースはHAT TRICKERS「The Shadow」EPなんだ、それはFRIDAY NIGHT KIDSレコードの名前で実際には出したんだけどね。それから名前を変えて、VOLTAGEレコードにしたんだ。EVACUATEの「Endless War」EPをリリースできるなんて興奮しているよ。なにせMike Virusの新バンドだからね。彼の過去のバンド、THE VIRUSにCHEAP SEXは大好きだし、EVACUATEはそのスタイルを引き継いでいるから。ストレートなUSハードコア/パンクにCO



DISCHARGEメンバーのサイン入り鋲ジャン。右下に小さくTHE ACTIONツアーのフライヤーも



Martino

MAD PIGS



NFLICTやGBHといったUKものもミックスしているからね。ここでチェックできるよ。http://www.myspace.com/evacuatepunks
MAD PIGSとEVACUATEで2010年10月にヨーロッパ・ツアーもするんだ。レーベルの今後の予定は以下。
DESTRUCT「New American Nightmare」CD/LP – LAのハードコア・パンクス
(www.myspace.com/destruct)
MAD PIGS「Who Will Bury The Last」CD/LP – 僕のバンド
(www.myspace.com/madpigs)
MONSTER SQUAD
「Not For Them + Unreleased」LP – サンフランシスコの素晴らしいバンドで、最近のレコードはちょっとFILTHに近い
(www.myspace.com/monstersquadpunks)
ACIDEZ
CD – メキシコのハードコア/パンク・バンド
(www.myspace.com/acidezstreetpunk)
ここヨーロッパでリリースしたい日本のバンドも探しているよ!」

■MAD PIGSのことについても聞きたいんだけど、どうやってバンドはスタートしたの? MAD PIGS以前にもバンドはしていた?

「MAD PIGSは2つ目のバンドだね。最初のバンドはDĚTI SNĚTIといって、もっとポリティカル・ハードコア・パンクだったよ。僕がドラムでベースがMAD PIGSのギタリスト、Pavel。FESTA DESPERATOのPauzaがギターを弾いていた。一本デモ・テープを録っただけだったね。その後に新しいバンドを始めたがっていた友達らとMAD PIGSをスタートして、楽しみながら9年間このバンドをやり続けている。ヴォーカルのSkobがONE WAY SYSTEMと共演したスイスでのショーの後に抜けてしまって、彼の代わりに僕が歌うようになった。その後の2年間は正式なドラマーを探し求めて、今でも一緒にプレイしているSamを見つけたんだ。そして今、新しいアルバムのレコーディングをしている」

■J.U.U.M.との日本ツアーはどうだった?パンク・カルチャーも含めて、大きな違いがチェコと日本にはあるよね。何に一番驚いたのかな?

「素晴らしい時間、そしてツアーだったよ!僕ら全員日本をツアーして興奮したね!SEE YOU IN HELLから色々と話しは聞いていたんだけど、本当楽しんだよ!名古屋、東京、広島、大阪といった素晴らしい都市でライヴをして、僕の大きな夢が叶ったんだからね。素晴らしい体験だった。グレートなバンド、イカした場所、素晴らしい人々や友達に会って、日本の料理とビールも楽しんだ、ハハハ。何に驚いたかって?うーん、ヨーロッパ人と日本人では、文化、習慣が違うから、ヨーロッパよりも人と接するときには、時々気を使ったかな。名古屋のストリートの真ん中で昼間からやったイリーガルなショーでREALITY CRISIS、NORMALS、SYSTEM FUCKERSなどとプレイしたのも驚きだったね。あとツアー中、かなり小さな車に10人が乗ってたから、僕らのでかいケツがおかしくなったことかな、ハハハ。とにかくDaisuke、J.U.U.M.、ツアーで出会えた人たち、どうもありがとう!」

■読者にメッセージをお願い。ありがとう!また日本で会いましょう!

「VOLTAGEショップとMAD PIGSに興味を持ってくれてありがとう。また日本を訪れて、素晴らしい体験をするのが楽しみだよ。このインタヴューを読んでくれた日本のパンクス、ありがとう。すぐにまた会えるといいね!Kampai!」

www.voltage-shop.com
www.myspace.com/fridaynightkids
www.myspace.com/madpigs



MAD PIGS





Paaya from FESTA DESPERATO

DRUNK NACH OSTEN

FESTA DESPERATOのギタリストであり『Drunk Nach Osten』ジンを発行しているPaaya。後日、ドイツでStachel(2007年にBURIALと共に来日。ex HATE RECORDS etc/現LA FAMILIA RELEASES主宰)と再会し「チェコのブルノに行って来た〜」と話すと、「Paayaに会ったか?あいつ面白いんだよ、ライヴでチ○コ出したりさ」と、ドイツでもその愉快な人柄は評判でした。クラストどっぷりかと思いきや、意外にもOASISが大好きという一面も…。

■まずはパンク/ハードコアとの出会いについて聞かせてもらえる?

「ハハハ、最初の出会いは11か12歳の頃だったと思うよ。OASISやそれに似たバンドを聴いていたな。 何かでOASISがSEX PISTOLSを好きだって読んで、PISTOLSの作品を探し、大好きになったよ。特にクレイジーなドキュメンタリーを見た後にはね…でもその後、14歳の時にはNIRVANAの大ファンだったな(基本的に、どちらかといえばNIRVANAはパンク・ロック・バンドだとずっと認めているんだ…)。バンドに関する本を読み、人間や社会に対する考え方が変わったよ…自分の生き方を見つけることが重要だってことも、社会の基準に縛られることもないと気づかせてくれたんだ。クラスメイトからチェコのパンク・ロック・バンドのテープを録音してもらったな。まるでダメなギグに行ったり、地元の図書館で音楽雑誌からパンクの記事を破りとったりして過ごしたりもしたよ(2000年のことで、インターネットにアクセスするには限界があった)。その後少しして、自分と同じくらいの歳の若いパンクスを知るようになった。地元のバーでつるんだり、テープや他のものをトレードしたりしたな…。それから地元のパンク・ロックの店を発見したね(今じゃ、うんざりするようなメタル/ゴシックを扱うオシャレなところになっちゃったよ)。そこで作品をいろいろと手に入れたよ、特にハードコア・ジンをね。ジンからDIYの考え方やポリティカル・ハードコア・パンクを知るようになった…でも最初に聴いていたバンドは、ポンコツなチェコのパンク・ロック・バンド(E!E、S.P.S.、MALOMOCNOST、PRAZDNOTY、P.V.A…)だったな。ポーランドのパンクもよく聴いたよ。俺にとって最初のノイジーで過激なハードコアはDISCLOSEのディスコグラフィー・テープになるかな(笑)。その後になって初めてDISCHARGEを聴いた時は、たいくつだな〜と思った。だってDISCLOSEのほうがもっと荒々しかったからね、ハハハ!パンクの熱狂的で激しい面に驚かされたな。そして怒りとポリティカルに満ちていることにもさ」

■いつ、どうしてジンを始めたの?東ヨーロッパのハードコアの情報に触れられる素晴らしいジンだね。

「初めは2005年頃に、東ヨーロッパのバンドの作品や宅録して配っていたような作品を集めようという考えだったんだよ。でもそれは時代遅れのアイデアだった。もう既に、ほとんどの人がMP3のフォーマットに狂ったように夢中になっていたからね。それにどうせ、俺のテープ・レコーダーはすぐにぶっ壊れちゃったしさ。でもずっと情報は求め続けていたよ。2006年の夏に、友だちとバルカン半島の国々を1ヶ月かけて旅して廻った後、旅のジンを書いてみたんだ。それが『Drunk Nach Osten』の0号になったんだよ。これまでのところ、2号目まで出してて、2つの言語に分けたヴァージョンをそれぞれ出しているんだ…最初にチェコ語、その後に英語。どちらの号も内容はほぼ同じだよ。それにジンに掲載したほとんどのバンドをCDRコンピレーションに収録して付けている。このジンを書いている主な理由は、チェコのパンクス(他の国々のパンクスもだけど)は、たいていアメリカ、ブラジル、スカンジナビア、日本のパンク/ハードコアに心を奪われている。でも東ヨーロッパの国々でパンクスがどんなことをしているのかほとんど知らないんだ。そんなの馬鹿げているよ、だって今あげた国々は、肉体的にもここに住む俺たちととても近いんだからね!だけど、俺たちはシーンの情報を得るのは簡単じゃないし、協力しあうこともほとんどない。『Drunk Nach Osten』はこういう状態を変える一役を買っている。もちろん、俺が好きでやりたいからやっているんだけどね。旅して廻るのも、いろいろな人たちと出会うのも楽しいから…」

■東ヨーロッパのハードコアの魅力って何かな?例えばラトビアは日本には全く馴染みのない国だけど、チェコではどうなの?

「ないね。ごく限られたいくつかの有名なバンドを除いては、ほとんどのバンドは残念なことだけど、全く馴染みがないんだよ。俺も





調べ始める前(2005年)は、東ヨーロッパのパンクのことはほとんど何も知らなかった。一般的に言えば、意識して情報を求めなければ、チェコでは東ヨーロッパのシーンについてはめったに耳にしないな」

■FESTA DESPERATOのライヴはブルータルなクラスト・コアで格好良かったよ。確か、3年ぶりのライヴだったんだっけ?ベースかドラムがいないとかで…。

「ありがとう!君がショーを気に入ってくれて嬉しいよ…。今とは違うメンバーで2002年にスタートし、速くてカオティックなノイジー・ロウ・パンク/ハードコア/スラッシュをプレイし始めた。メンバーの何人かは、以前に地元のパンク・ロック・バンドでプレイしていたけど、俺たちにとってはこのバンドが初の勢力的なバンドだったよ。俺たちは速くて怒りの詰まったハードコアをプレイしたかった。ヘイトに満ちたメッセージを撒き散らし、楽しみ、DIYで行く…。あの頃、ブルノにはそういうバンドがいなかった。デモも作ったよ。その中の1つはずっとリリースしていないな。メンバーは代わり、サウンドのほうももっとダークでヘヴィなクラスト/ハードコアに変わっていったよ。その後、デモを1本(今はヴィニールEPで再発されているよ)とフルEPを出した。その頃、他にもいくつかのバンドが活動を始めたね…RISPOSTA、EVIDENCE SMRTI、BASTO…。俺たちは数多くのショーをやったけど、チェコや中央ヨーロッパでのショーがほとんどだったな。ギターのやつの仕事の関係で長いこと街を離れることができなかったから、それほどツアーはやらなかったよ。2007年からはメンバーの中に問題を抱えるやつも出てきて(興味の喪失、金欠、ドラッグ、仕事…)、長い休止期間に入った。その間に、RISPOSTAのドラマーと一緒に作品をレコーディングしたんだ。今はまたオリジナル・ドラマーと共に再始動し、新曲を書き、ショーで演奏する準備をしているところさ」

■チェコ語で歌うことは重要なことなのかな?歌詞の内容はどんなの?

「チェコ語で歌うことは、実際には"重要"ではないな。俺たちはナショナリスト(国家主義者)じゃないからね。でもチェコ語で歌うのは、ただ単に自然なことなんだよ。メンバーの半分はチェコ語以外は話せない。チェコ語は母国語だし、他の言語だと自分自身を表現することができないんだ。俺たちには世界中のたくさんの人たちに、自分たちのメッセージを広めようぜっていう野心はなかったと思う。俺たちはCHUMBAWAMBAじゃない。ハハハハ…。チェコ人/スロバキア人の多くは英語を理解できないから、英語で歌うのは逆効果になるんだよ。まあその問題は別として、俺はチェコ語の歌詞の響きが好きなんだよね。FESTA DESPERATOはメンバー全員が歌詞を書く。大体の歌詞はギターのMarekと俺が書いていて、何曲かは他のメンバーも書いているんだ。中心になるテーマはないけど、大きく捉えれば、どちらかと言えば個人的に幻滅を感じていることよりは、この世界の社会悪を反映させようとしたものになるかな。文明の残虐行為、不安な未来、徐々にむしりとられる自由、偏って存在する資本主義者のモラル、(二流の)EU国家の矛盾をはらんだ生活、宗教/教会の教義の詐欺、虚しい生活、危険な愛国心、など…。いくつかの歌詞を君のジンに日本語訳して掲載してくれたらベストだね。ウェブサイトで全ての歌詞が読めるよ。歌詞は俺たちにとっては間違いなく重要だ。くだらないテーマの馬鹿げた歌詞をヘヴィな曲にのせてプレイしたって楽しめないさ。近頃はショーでもっと話をしようと努めているんだ。歌詞を記載したフライヤーも配っているし…」

■ところで、共演したDISCHARGEについてはどんな印象を抱いたか聞かせて。

「クールなパンク・ショーだと思ったよ。それだけのことだね。再結成っていうのは、俺個人としては好きじゃないんだよな。でもショーは良かったよ。現在進行形のDIYパンク・バンドを判断するのと同じものさしで、あういうバンドを判断することはできないよね。クソったれ、DISCHARGEは1977年からノイズを作り出してきているんだよな。彼らは今のDIYパンク・シーンとは全く違ったバックグラウンドから成長した。このことがずっと頭にあって、素晴らしいショーだと思ったんだよね。新曲を作ったっていうのも、昔からの友だちのヴォーカルを除いては、メンバーがオリジナルというのにも好感が持てるな。再結成バンドって、昔懐かしい曲をプレイし、オリジナル・メンバーは1人いるだけなんてもんで、たいていは痛々しいよね。でもとにかく、昔からやっている人たちが、時代遅れであろうと生き残り、新しいバンドを始めるほうが俺は好きだな…」

■ちなみにFESTA DESPERATO以前もバンドはやっていたの?

「重要なものは何もないよ。FESTA DESPERATOを始めた時、俺は17歳になりたてだった。その前はちゃちな地元のパンク・ロック・バンドでプレイしていただけだったよ。もしくは、いろんなマリファナを試しているうちに、イメージがわきあがって即興で作ったやつをテープ・レコーダーで録音したりとかさ(笑)。2006年から2007年の間はPRIPYATってバンドでドラムを叩いていたんだ。2人の怒れる女性ヴォーカルを擁する、荒れ狂ったロウ・ハードコアだったよ。唯一、デモを1本レコーディングしたな。あれはすぐにでもテープでリリースするべきだね。2007年にSEE YOU IN HELLのセカンド・ギターにヘルプで入ったけど、地元のショーで2回やったのとブラジル・ツアーに参加しただけだった。最近はクラスト/パンク・バンドのRESURGOでベースを弾いていたんだ。でもこっちも正式なベースが見つかるまでのヘルプだったよ。俺はいろいろなバンドでプレイしたいんだよな。アイデアもたくさんあるし、特にドラムは叩き続けていきたい。だけど残念ながら時間がないんだよね」

■君と初めて会った時のバーでのライヴは無料だったけど、バーでやるハードコア・ショーが無料なのは普通のことなの?

「ああ、それはきっと誤解しているな。ショーはタダじゃなかったよ。Protest Festのためのベネフィット・ギグだったんだぜ。Protest Festは別のカルチャーと活動を結びつけ





る、毎年恒例のイヴェントなんだ。ドキュメンタリー映像の上映、コンサート、ポスター・アクションから構成されている。極めつけは、最後のストリート・フェスティヴァルだね。www.protestfest.czをチェックしてみて。地元のハードコア・ショーじゃ、普通は入り口で入場料をしっかりとられるよ。今、俺が関わるショーでは、入り口で好きな金額を払ってもらうような試みを始めたところなんだ。でもうまくいくかどうかは、俺にも確信はないんだけどね。やってみてどうなるか」

■(無銭入場していたのか…)SEE YOU IN HELLのFilipから、君はロマに英語を教えている先生だって聞いたんだけど、合ってる?

「うん、実際にはもうやめているんだよ。もし君が良い教師になりたかったら、全精力を教師の仕事に捧げなくちゃならないと思う。俺は他にも興味がたくさんある。それだけじゃなく、チェコの教師(特に最初の2年間)は、給料が最低(国の平均給料の半分くらい)で、厳しいし消耗する仕事だと考えられているんだ。俺はハイスクールを卒業する時に、自分で納得できるような仕事に就きたいと思ってね。教育は良い選択に感じたんだよ。とにかく、俺は9年間同じ学校で働いていた。そこはある時期になって、大部分が貧しいロマの家族が暮らしている地区の別の学校と統合されてね。その後、"多数派"の子供たちの親が自分の子供を別の学校に転校させてしまい、ゲットー状態になってしまったんだよ。仕事や子供たちに対して、大きな理想はなかった。でも間違いなくどでかい経験だったよ」

■繊細な問題だけど、ロマに対する差別問題についてはどう考えている?

「究極に難しく、繊細な問題だね。ロマの人たちは1950年代のボリシェヴィキ政権(ロシア社会民主労働党が分裂して形成された、ウラジーミル・レーニンが率いる左派の一派)によって、永住を強要され"従わされ"たんだ。準備もなしで、ロマのルーツや習慣とは全くかけ離れた文明や社会に、無理やり順応させられた。中には大体において同化していったロマの家族もいるが、巨大なロマのコミュニティは今でも存在し、厳しい失業問題、貧困、ギャンブル、アルコール中毒やドラックの乱用、売春、下層階級の状況につきまとうあらゆることと戦っているんだ。それはもちろん、大多数の眼差しの中に潜む"先入観"をさらに加速させるだけになっちまうんだが。多くの人々が"解決策"を見つけ出そうとしているけど、提案される意見は、たいがいの場合が差別や民族大虐殺のような、受け入れられないものなんだよ。チェコの社会は様々な問題(黒人、同性愛者、宗教…)に、かなり寛容なほうだと思う。でも、ロマの人に対してはひどい悪意を持っている。先入観が大き過ぎる。反人種差別主義者でさえ、ロマの人には関心が薄い。両方の側に適切な教育をする以外には、解決策はないんじゃないかな。でもこれは簡単な問題ではなくてね…」

■ブルノのハードコアを僕は楽しんだけど、それは良い面だけであって、多分悪い面もあるよね。今のシーンについてはどう考えている?

「もちろん悪い面もあるさ。どこも同じだよね。ここは地元のハードコアの価値を全く認めていないように思うんだよな。ブルノにスピードの速いバンドもほとんどいなくて、ショーも数少なかった時代のことを少しだけ思い出すな。他に、個人的に悲しいと思うことがあるんだ。新しいパンクスのほとんどが、呆れるほど政治に無関心なんだよ。大まかに言って、音楽のセンスはとてもいいんだけど、彼らはそれを超えていくことはないんだ。メッセージに対してもどうでもいいようだし。地元のクラスト・シーンはアルコールとうるさい音楽で結びついている仲間の集まりと言ったほうがぴったりだな。やかましくてクレイジーなディスコみたいなもんさ。唯一の違いが音楽スタイルになっているように思う。だいたいの場合、オーガニゼーションはDIYで運営されている。パンクスが関わっているポリティカルなことに関しては、他の国とほぼ同じで、ブルノのヒッピーや学生が行っているよ」

■最近のお気に入りのバンドは?

「チェコのバンドをあげるなら、俺の最近のトップはEVIDENCE SMRTI(地元のメタル/パンク/クラスト。叙情的なヴォーカルで、NAUSEAやSACRILEGEの影響大)、RISPOSTA(君も彼らを目撃したよね…陳腐な決まり文句ではなく、ファッキンなオリジナル・クラストコア)。SPOLUVINAも好きだな。このバンドはウェブサイトも何もない。でも獰猛で荒れ狂ったハードコア/パンクをやってくれるよ。他には、AGENT ORANGE、NEW MODEL ARMY、SACRILEGE、INNOXIA CORPORA(オリジナル・チェコ・パンク・ロック)、DAZD(セルビアの異教徒。メタル/パンク)、などかな。それに、もちろんOASIS、ハハハハ」

■今後についてどんな計画があるの?

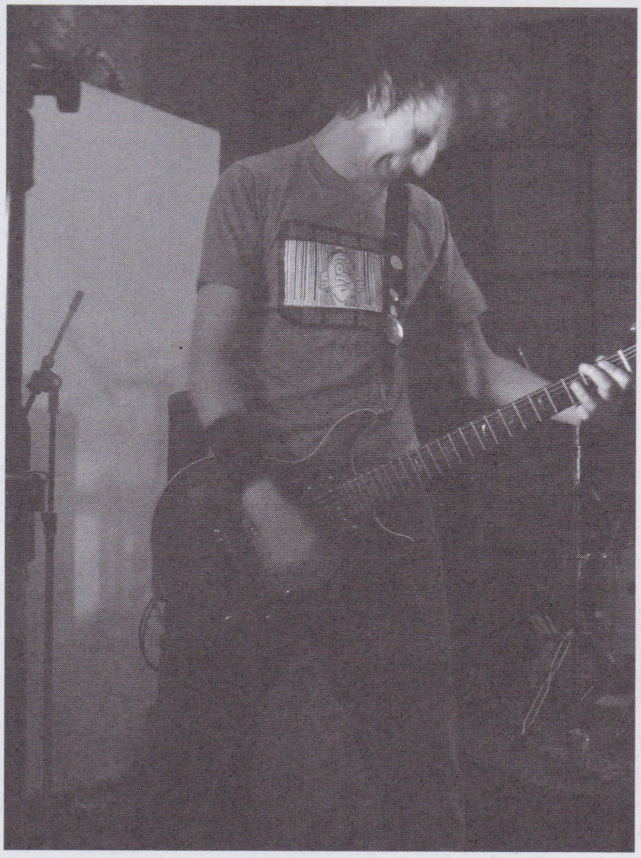
「プランもアイデアもたくさんあるよ。でも実現させたいなら、誰にも話さないほうがいいかな(笑)。いやいや、話すよ。今以上にジンを出していきたい。ロシアやベラルーシを訪れる。FESTA DESPERATOでツアーに出る。ブルノのパンク・シーンをもっとポリティカルに変える。OASISの全てのヴィニールを安い値段で手に入れる」

■最後に読者にメッセージを。どうもありがとう!

「興味を持ってくれてありがとう、Kenji。君のジンにスペースをとってくれ、サポートもしてくれて感謝するよ。俺のジン、バンドなどに連絡をとりたいと思ってくれた人がいたら、paaya.ds@seznam.czにメールしてくれよな。http://dno.maskcontrol.comもしくはmyspace.com/paayajainenからpdfでジンをダウンロードできるよ。バンドはwww.festadesperato.comをチェックしてくれ。Thanx and Kampai!」







Filip from SEE YOU IN HELL

HLUBOKÁ ORBA

ブルノで最も精力的な動きを見せているバンドは?と問われれば、恐らく当地のパンクスの多くがSEE YOU IN HELLと答えるだろう。
1999年に結成し、2003年からは"United Crusties"の名の下、日本のバンドも含め数多くのショーをブルノで企画している彼ら。2006年には初となる日本ツアーも敢行。そして今夏、再来日を果たす。
SEE YOU IN HELLのギタリストであり、レコード・コレクター、弁護士、そして『Hluboka Orba』というジンも発行しているFilip(とても真面目なナイスガイ)へのインタヴューをもって、珍道中チェコ編のシメとさせて頂きます。

■SEE YOU IN HELLは日本のハードコア・バンド、CROWとSYSTEMATIC DEATHとのスプリットEPをリリースしたよね。またCONTRAST ATTITUDEとも新作スプリットEPを出すことになっているみたいだけど、その次も日本のバンドとのスプリットEPを考えてる?

「たぶん、そうはならないと思うよ。スプリットEPを6枚出して、もう十分だと感じているからね!過去に、チェコのMINDLOCK(2001年)、スロバキアのTHE PUBLIC(2003年)、チェコのMASSGENOCIDE PROCESS(2005年)とスプリットEPをリリースしているし、もちろん、俺たちの愛してやまない、敬愛する日本のバンドともたくさん出している。日本のバンドとのスプリットEPは俺たちにとっては大きな誇りだよ。でも、今ちょうど自分たちの新しいフルLP(もう3枚目になるね)に忙しくてね。ところで、最近リリースした3枚のスプリットEPのアートワークは、絶対にチェックしておいたほうがいいよ。それぞれのカヴァーのアートワークは、違う国のアーティストが手がけているんだぜ!CROWとのスプリットはチェコのコミック・アーティスト、Milan Sodoma。SYSTEMATIC DEATHとのスプリットは日本のSugiの作品。CONTRAST ATTITUDEとのスプリットはブラジルのMurilo Pommer。それぞれが見事だ!CONTRAST ATTITUDE/SEE YOU IN HELLのスプリットは、2010年の7月にInsane Society Recordsから出る予定だよ。ちょうどその頃は俺たちの日本ツアーもあるね!」

■SEE YOU IN HELLは昨年、2度目のブラジル・ツアーを敢行したし、今年の夏には再び日本ツアーも控えているよね。また、たくさんのショー(United Crusties)もブルノで企画している。本当に活動的だよね。動き続けるモチベーションは何なのかな?

「そうだね、SEE YOU IN HELLのほとんどのメンバーは、80年代後半からハードコア/パンク・シーンに興味を持っていて、90年代の初め頃からは積極的な参加者になっていたよ…バンドを組んだり、ショーを企画したり、ジンを作ったり、レーベルを始めたりとね。俺は個人的に、ハードコア/パンクというのは、表現や創造のための自由なスペースだと考えているんだ。自分自身を確立する場所であり、自分の夢を実現させる場所だとね。活動してきた20年の間には、たくさんの素晴らしい人たちに出会えたし、貴重な体験もしてきた(バンドで世界中をツアーしたこともその一つだね)。たぶん、これはハードコア/パンクに関わっていなかったら味わえなかっただろうな。それと、ひど過ぎる社会を目の当たりにすることが、ハードコア/パンク・シーンの中で活動し続けるモチベーションになっている!俺にとってのパンクは、プロテストであり、俺たちに差し出された見せかけの世界以上に良いものを作り出す努力をすることかな。生活していて感じる耐え難いことから脱出する方法でもあり、自分を取り囲む許せない何かに立ち向かう方法でもあるね」

■君たちのショーはエネルギーに満ちていて、サウンドの完成度も素晴らしかった!でも、ヴォーカルのJozkaがマイクで自分の頭を叩いていたのには驚いたけど…理由はわかる?

「それについては彼には聞いていなかったよ!たぶん、ステージ上で、自分で自分を傷つけるように、内なる悪魔に狂わされちまったんじゃないのかな?!」

■SEE YOU IN HELLのツアーやプライベートな旅行で日本を訪れているよね。日本製のギターも使っているし。日本のハード

Split with CROW



Split with SYSTEMATIC DEATH



Split with CONTRAST ATTITUDE



コアと日本の国の最大の魅力は何なのかな?ブルノは本当に美しい街だし、酒は安くておいしい。素晴らしい土地だと思う。格好良いトラムも走っているし(笑)。

「日本には個人的に2回訪れ、SEE YOU IN HELLのツアーでも1度行っている。日本のハードコア/パンク・シーンが大好きだ!ほとんどの場合、日本のバンドはもの凄く一生懸命に活動しているし、多くが10年か15年かそれ以上、活動しているよね。ライヴ・パフォーマンスやスタジオ作品の質にも細かく気を配っている。USAやブラジル、それにもちろんヨーロッパ中でもギグをしたことがあるけど、日本で見たギグが最高だよ…長いことパンクを貫き通している人や、パンク・スピリッツを燃やし続けている人をとても尊敬しているんだ!
国としての日本は、ヨーロッパとは全く違うね(後で詳しく書くよ)。これは日本を好きな理由の一つでもあるな!ホームタウンでの毎日のクソみたいな生活から脱出できるのも、俺にとっては嬉しいことだ。遠く離れた国に旅するのはね…。俺の住んでいる街は…そうだね、たぶんイエスだよ。ブルノは、重工業に搾取されたり、公害や醜悪なコンクリートの建物のあるチェコの他の街と比べれば良い街だね。君がここを訪れ、この街を気に入ってくれて嬉しいよ。こちらに旅で訪れる日本のパンクスにはなかなか会えないからね。君がここへ来たのは、みんなにとっても素晴らしいことだと確信しているよ!俺たちはブルノでプレイした、BATTLE OF DISARM(もう1997年のことになるね!)、FRAMTID、DUDMAN、NK6、VIVISICK、D.S.B.、それからSYSTEMATIC DEATHなどのバンドとグレートな時間を過ごしたな!俺のホームタウンで彼らのギグを企画するのは喜びだったよ!」

■チェコ共和国(ヨーロッパ)と日本のカルチャー(パンク・カルチャーを含む)では大きな違いがあると思う。最初に日本を訪れた時はカルチャー・ショックを感じたんじゃないかな?

「日本はヨーロッパと比べると、いろいろな面で大きく違っているよ!2004年に初めて訪れた時には、少しショックを受けたね。特に東京や大阪のような大都市には…人ももの凄く多いし、道路も複雑で乗り換えも難しい(新宿駅は狂ったアリ塚みたいだ!)。ベジタリアンにとっては(魚の肉も含む)肉を使っていない食べ物を見つけるのは難しかったね。今年の夏にSEE YOU IN HELLが行ったら、ぜひ肉を使っていない食べ物を教えてくれないかな(ツアーの最中、毎日、米と醤油だけじゃ、つまらないからね。ハハハ!)。日本の伝統的な習慣は難しいね。英語でコミュニケーションをとるのも大変だ。でも全てを乗り越えてベストを尽くすよ。そして日本滞在を全力で楽しむぜ!海外を旅するにはそれが一番だと思うんだよね。違いや問題なんてものを気に病むのはやめて、滞在を楽しむ。他に旅行のポイントはないよ、そうだろ?」

■しかし君はヴィニール、テープ、ジンの凄いコレクターだよね。"Burning Spirits"スタイルの日本のハードコア・ヴィニールは大量に持っていると思っていたけど、実際には様々なスタイルや国のヴィニールを持っていた。コレクションの中から、ベスト10レコードを挙げてもらえるかな。

「その通り、大量のレコードやテープのコレクションをしているんだ。数えたことはないが、世界中のレコードやテープが数千以上はあるんじゃないかな(大量のファンジンも所蔵してもいるよ)。俺が好きなのは、ファスト・ハードコア、ロウ・パンク、クラスト、グラインドコア、ノイズ…世界中の特色ある様々なスタイルだね!時代時代でいろいろな作品を聴いてきたから、コレクションの中からベスト10レコードを選ぶのはとんでもなく難しいな。たぶん80年代、チェコスロバキアのハードコア/パンク・バンドの古いデモ・テープになるかな。ほとんどがヴィニールで再発していないから、今では人目につくこともなく、埋もれてしまっている。80年代を振り返ってみると、一般に音楽や文化を含む全てが厳しくコントロールされた全体主義国家に暮らしていた1989年頃までは、チェコスロバキアでヴィニールがリリースされるのはほとんど不可能だったよ。公式にリリースされたパンク・ロックの7"はVZ(VISACI ZAMEK=英語ではPADLOCK。チェコスロバキアの極初期のパンク・バンドの一つ)の2曲収録のEPだった。1989年以前は、99%のハードコア/パンク・バンドは、不法に自宅でレコーディングするしかなかったんだよ。
俺にとって大事な80年代の珍しい作品は、例えば、RADEGAST、H.N.F.、SANOV、F.P.B.、KRITICKA SITUACE、ZEMEZLUC、あるいはS.M.S.のようなバンドのデモ/ライヴ・テープになるね。最近よく聴いている日本のレコードは、JUDGEMENTのEP、PADLOCKの『Strike Of Crimson』(CD)、DEATH SIDEのCD、V.A.『Eye Of The Thrash Guerilla』(LP)、SYSTEMATIC DEATH『Systema Six』(LP)かな」

■『Hluboka Orba』というジンをもらったけど、このジンは素晴らしいね!ワールドワイドな内容に、トータルで200ページというのも凄い!!一人で『Hluboka Orba』を作っているの?それとも友達と一緒に?





「このジンは1993年に始めたんだよ。最初は旧式のタイプライターで文字を打ち、"切り貼り"の古典的なDIYのやり方で貼りつけてコピーした、貧弱なファンジンだったんだ。2004年になって、1、2年毎に新しい号を出すようになった。ページも200ページの分厚い体裁になったよ。部数はたいてい500から1000の間だね。チェコのジンの多くが、チェコ語のみで書かれている。俺のジンでは、ポリティカルな意識を持ったワールドワイドなDIYハードコア/パンクをミックスさせていこうとしているんだ。そう、たくさんの仲間が、コラムやツアー・レポート、インタヴューやレビューなどを寄稿してくれている。彼らの中にはもう10年以上も手伝ってくれているやつもいるんだよ！寄稿者のほとんどは、GRIDE、SHEEVA YOGA、FESTA DESPERATOなどのチェコのバンドでプレイしているやつらや、SEE YOU IN HELLの他のメンバーもいたりする。今ちょうど、28号目に取りかかっているところなんだ。毎年恒例にしている俺たちの"Killed By Brno Fest"に合わせて、2010年の12月には発行できればいいんだけどね。もしインタヴューのために、レコードやCD、デモなどを送りたいと思ってくれる日本のハードコア/パンクのレーベルやバンドがいたら、俺に連絡してきてよ！」

■君の仕事はロマ(ジプシー)やジャンキーのための弁護士だと聞いたけど、実際にはどんな仕事？貧しい人たちにアドバイスしたり、法廷に行ったりするのかな？なぜ弁護士になろうと？

「そうなんだ、俺は2つ仕事をしていて、2つとも俺の街の最下層の地区に関わる仕事だよ。その地区は"ゲットー"とか"ブロンクス"と呼ばれることもある。貧しく、ひどい状態の家を君も眼にしただろう。ストリートの犯罪も横行し、ドラッグの使用も広範囲に渡っているんだ。問題を抱えた貧しい人たちや、助けを見つけられないでいる人たちのために、法律に関するアドバイスをする社会奉仕の、2つのオーガニゼーションで働いているよ。そういう人たちの中にはロマの人たち（次の質問で詳しく答えるね）もいるし、中毒が原因で問題を抱えたドラッグ常用者もいる。俺は法律に関わるアドバイスをし、時には法廷で彼らの代弁をすることもある。それから、毎日の生活に問題のある人たちをサポートする、ソーシャルワーカーの小さなチームの責任者もやっているんだ。企業の弁護士にはなりたくなかった。俺にはかなりのストレスになるだろうし、大企業のために働くには倫理的な問題も抱えるこ



とになるだろうしね。社会奉仕の仕事を始めてもう6年になるよ。この仕事をずっと続けていきたいね」

■僕はロマについては全然知らなかった。もちろん君も知っているように彼らは日本にいないしね。ロマに対する差別問題はあるみたいだね…。ブルノでも少し話してくれたけど。

「チェコ共和国には約30万人のロマの人たちが暮らしているよ（チェコ共和国の人口は1千万人）。彼らの多くは社会の底辺で生きている。差別や教育の欠如、それから彼らの伝統や文化など、長い歴史が原因となっているんだ。それには、現代ヨーロッパの21世紀社会との激しい衝突も理由にあるよ。教育に関心がない者もいるし（子供を学校に通わせない親もいるんだ）、盗み、ドラッグの売買、スリ、売春に手を染めている者もいるんだ。多額の借金、長期に渡って無職だったり、家を失ったり、家族の問題を抱えている者もいる。俺たちもできる限り彼らを援助しているけど、簡単ではないし、時にはかなりのハードな仕事でもあるんだ」

■日本の読者にメッセージをお願い。どうもありがとう！Na zdravi!（チェコ語で乾杯）

「前に日本を訪れた際に友達になったみんなにまた会えると嬉しいね。日本で素晴らしい時間を過ごせるだろうと確信しているよ！俺たちのショーを見に来てくれよ。そしてその後はパーティーしよう！また日本に招待してくれたTomioに大きな感謝を！Kanpai!」

コンタクト：
orba@seznam.cz
www.seeyouinhell.cz
www.myspace.com/seeyouinhellthrash

SEE YOU IN HELL JAPAN TOUR

July 31th NAGOYA - Huck Finn
(CROW,REALITY CRISIS,HAZARD,DEMOLITION,ACUTE)
August 1st KOCHI - Chaotic Noise
(CONGA FURY,GOD FREE HO,REVAL)
August 2nd TAKAMATSU - Rizin
(AXEWIELD,AKKA,GOABLA,SUICIDEAD)
August 3rd MATSUSAKA - Barret
(CONTRAST ATTITUDE,ACROSTIX,TOTAL NOISE ACCORD,END OF SEEDS)
August 4th OSAKA - Chika Ikkai
(TONE DEAF,VORACIOUS SOUL,CYBERNE)
August 5th TOKYO - Earthdom
(CROW,EXTINCT GOVERNMENT,PADLOCK,SHORT FUSE)
August 6th NIIGATA - Woody
(CROW,AGE,HAZARD)
August 7th YOKOSUKA - Pumpkin
(SYSTEMATIC DEATH,HAZARD,PROTESTATION,F.V.K.)
August 8th TOKYO - Earthdom
(CROW,KRIEGSHOG,AGE,VIVISICK)



always tedious editor's notes

PIČA!PIČA!というわけで、約一ヶ月の珍道中から戻ってきました。次号掲載予定のベルリン編では、ライヴの感想をメモったり写真を撮ったりしていたので、多少は音楽的要素が増すかと思われますが、どうなることでしょう。帰国後、最も多く浴びせられた言葉は「計画性なさすぎ!」です。今後は海外で使えるクレジット・カードと携帯電話を持っていこうと心に誓いました。
さて、来たる7月31日をもちましてEL ZINE創刊一周年となります。そのタイミングで出せればなと考えていますが、すると一月に2冊出すことになるので…、一ヶ月遊んでいたツケだと思って、ベストを尽くします…。ドーン!と豪華に大物アーティストが表紙で付録もつけて、ということは間違っても起こりません。いつも通りになる予定です(表紙は白で)。

発行者 山路健二

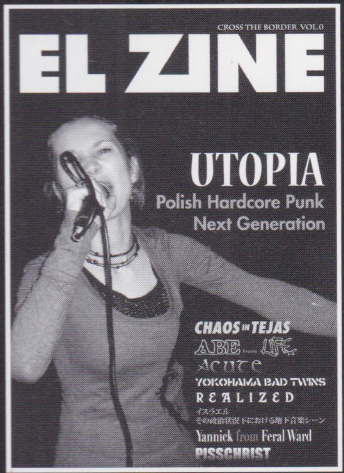
次号の発売は…7月31日(目標) ※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した

EL ZINE vol.6 2010年7月10日発行 HP・BLOG・MYSPACE・MIXI・TWITTER→NO FUN E-MAIL→unno13@gmail.com

BACK ISSUES

PRICE : ALL Five Hundreds Yen

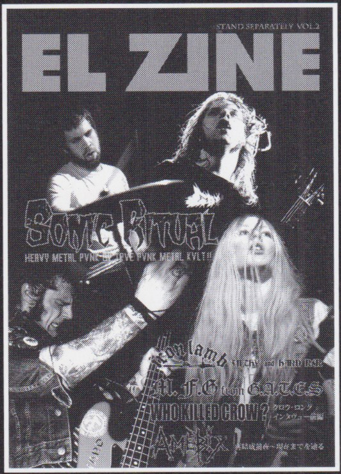
SOLD OUT : Vol . ZERO and Vol . ONE



VOL.0 UTOPIA



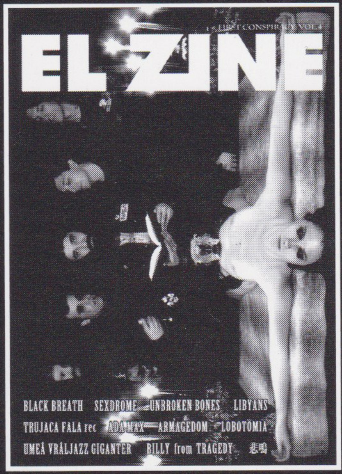
VOL.1 MOONLESS



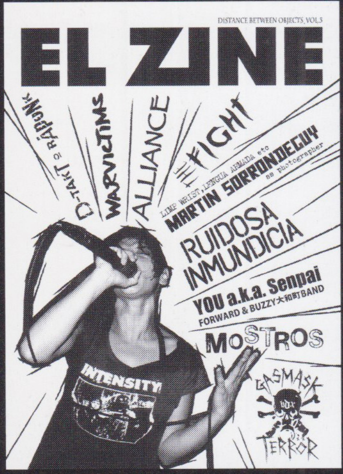
VOL.2 SONIC RITUAL



VOL.3 KALASHNIKOV



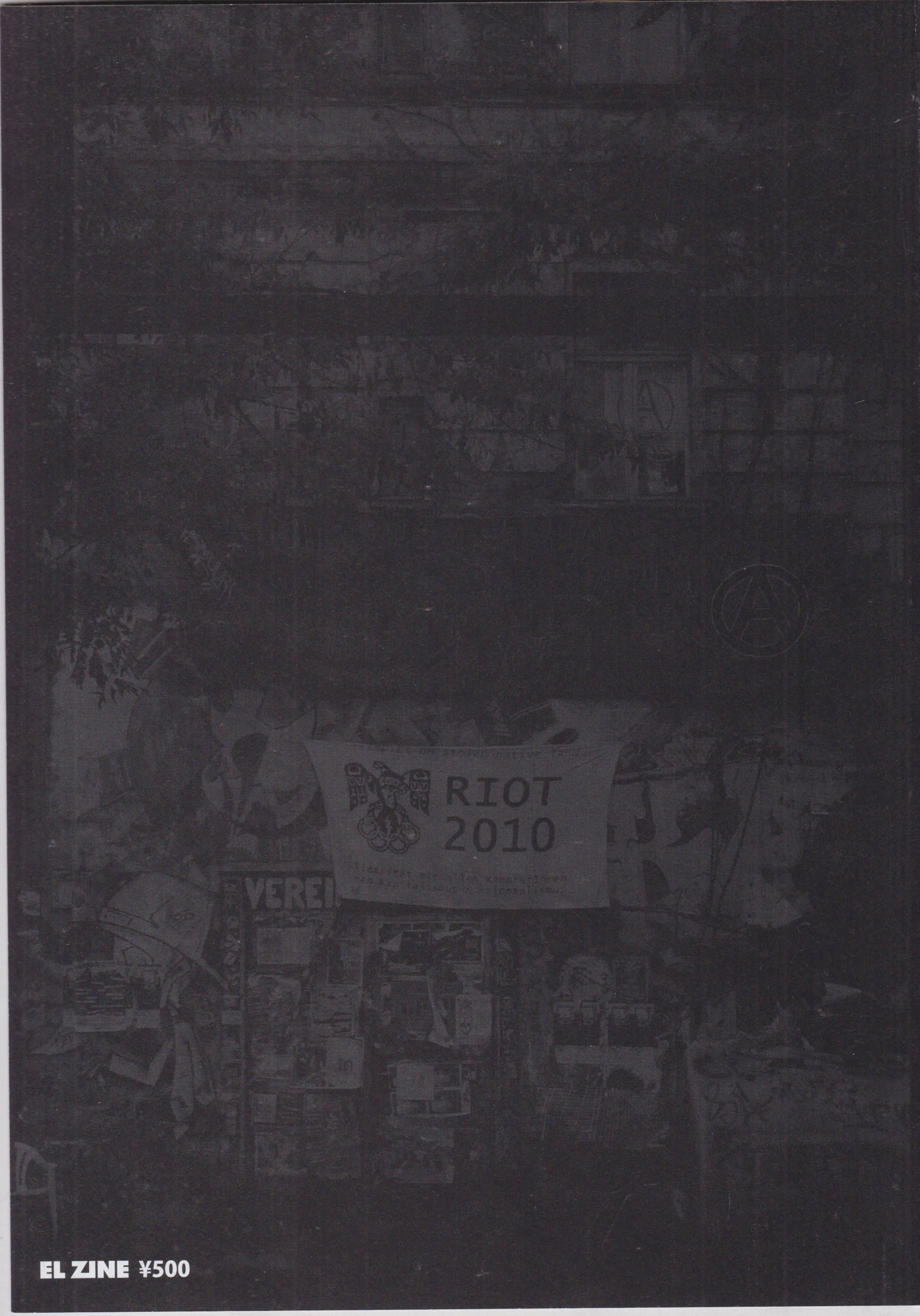
VOL.4 BLACK BREATH



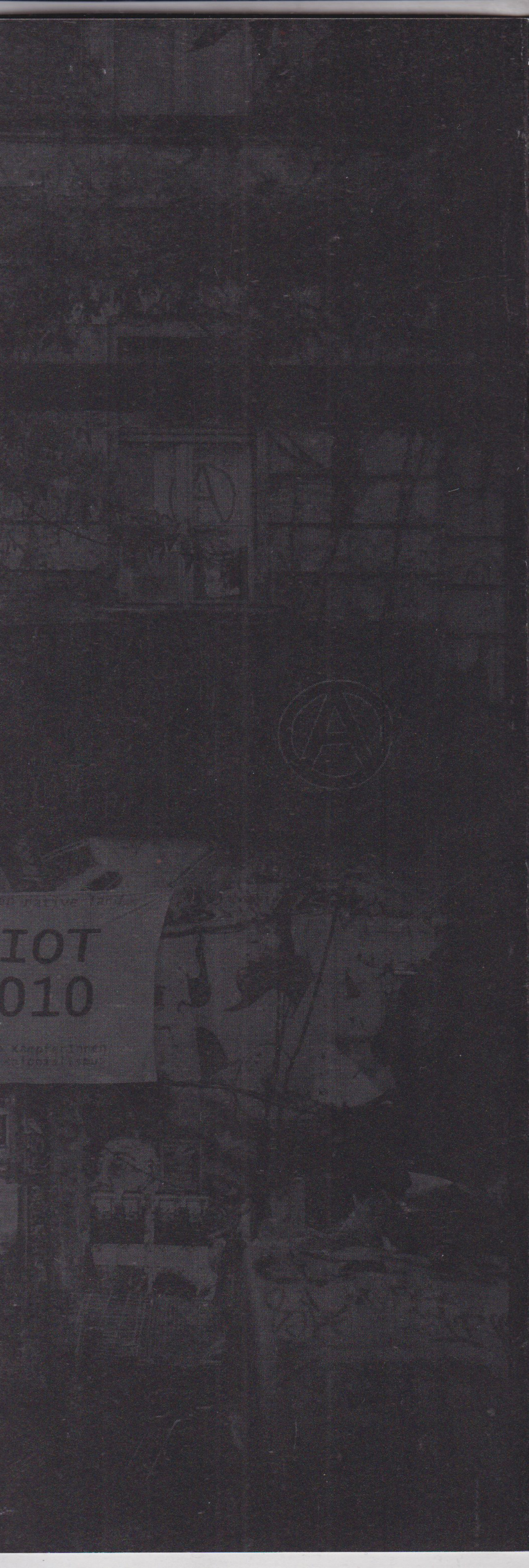
VOL.5 RUIDOSA INMUNDICIA

直納しているレコード屋さんetc ANSWER(名古屋) BASE(東京・高円寺) BOY(東京・高円寺) DISK UNION(関東圏) G-SIDE(浜松/ライヴハウス) HARDCORE KITCHEN(神戸) K-CLUB(高知) record KNOX(水戸) MISERY(広島) NAT(東京・西新宿) PUNK&DESTROY(大阪) TIME BOMB(大阪) WOODY(新潟/ライヴハウス)

ディストロして頂いている方々 FUJIさん(REALIZED/北海道) SOUICHIさん(UNDER THE SURFACE/東京) YUさん(SKIZOPHRENIA/津山) はっちゃん(BURST HEAD/沖縄) 紺野さん(SPROUT RECORDS/仙台) ONIGIRIさん(WATERSLIDE/東京) YUKIさん(SP RECORDS/東京) CR JAPAN(東京) MCR COMPANY(京都)



EL ZINE ¥500



EL ZINE

DISAPPEARANCE FROM REALITY VOL.6

EL Z



RAW NOISE IN

ZAC FROM WORLD BURNS

MAD PIGS FESTA DESPE

A.U.K. MENOS VALI